097128-000-3

特9-371

真田幸村九州漫遊記

玉田　玉秀斎／講演

M42

DBS-0922

第9
371

眞田幸村

九州漫遊記

玉田玉秀齋講演
山田醉神速記

第一席

へ、申し上げます、先般中川玉成堂より引續き出版いたしましたる、前編眞田幸村諸國漫遊記、中編眞田幸村佐渡ヶ島大仇敵後編眞田幸村北國漫遊記の講談は、何れも愛讀諸君の御意に叶ひ、非常の御喝采を蒙むりましたる段、玉秀齋初め出版元に到る迄、深く御禮を申し上げます、然るに又々各地讀者諸君より急ぎ約束の續編を出版せよとの御催促頻りでございますゆへ、不肖嗚呼ケましくも今回は、眞田幸村九州漫遊記と題しまして

一先づ當講談の結末を附けるの考にございますれば、相變らず御愛顧あらん事を希望いたします、左れば後編は如何なる處迄辨じ來りましたかと申しまするに、日本無双の大軍師眞田左衛門尉幸村は、越前福井の御城下を出立の上、夫より近江地へ入り込み、賤ヶ嶽まつた大岩山の古戰場を見物いたさんと、大岩山に差し掛つたる處、雪の爲に路踏み迷ひ、果ては深き谷間へ足踏みこらし、大雪に閉られ難澁の處を、獵師五左衛門の爲に助けられ、橋板村なる同人宅に伴れ歸られ、宿泊の其の夜妖怪の正体を見現はし古狸を退治して、諸人の難義を除き遣り、夫より京都東山双林寺境内に閑居あす有無齋事、元は土佐高知の領主、長曾我部宮内少輔盛親に對面いたさん爲め、京都へ乘り込み來たると云ふ處迄、御機嫌を伺ひ置きましたる事にございます、偖ても眞田幸村は賤ヶ嶽、餘吾湖、大岩山の古戰場をも見物を濟し、夫より當處を出立の上、段々と途を急ぎ漸やく京

都へと到着いたしまして、東山は双林寺境内に閑居あし、入道して名を有無齋と改め、月雪花に風流の道を樂み、密かに世の中の動靜を窺ふて居ります、元土佐高知の領主、長曾我部宮内少輔盛親の許へと歩つて參り、案内を乞ふて奥へ通り互に席定まるや、盛親は先づ口を開き盛親「コレは幸村殿、珍らしき御對面でござる、見れば僧侶の姿とあられての御訪問、何か之には深き仔細あつての御考であろう、一應承はり度ふ存ずる幸村「イヤ、盛親殿にも始終御健祥で大慶に存じます、幸村斯かる姿と相成り諸國巡遊いたすのも、御意の如く深き樣子あつての事、實は云云斯樣〳〵の考にて、專ら豐臣恩顧の大名の擧動を探る爲めでござる盛親「ハ、ア、イヤ夫れは誠に御苦勞千万、某も御承知の如く、慶長三年五月十八日、伏見桃山城にて先君秀吉公御他界、同じく五年九月十五日關ヶ原の戰爭と相成り、其の時の落着は貴公も御承知の通り、夫れが爲に某も德川家の惡じみ

を受け、目下の境遇と相成り、浮世を捨てゝの記住居をいたし居りますが、矢張り精神は貴公と同一にして、其の機會を相待つて居る譯でござる」と互いに胸中を明し合ひ、暫らく密議をして居りましたが、聽て幸村は幸村只今申す通り、必らず近き内に關東關西は手切れと相成るに相違あい、其の節には何卒秀頼公の御味方として、大阪へ御入城の事を偏へに願ひ奉ります。盛親「イヤ、其のお勸めあくとも、某の胸中も貴公と同一であれば、穿々御心配いたされあ、其の節には某老後の思ひ出に花々しく入城いたし、思ふ存分德川勢を惱ましして遊る考でござるシテ貴公は之よりいづれへお越しであるや幸村「ハイ、拙者は之より大阪へ下り、備前島の片桐且元殿に面會し、夫より中國九州と漫遊いたし度き存意でござる盛親「フム左樣でござるか、夫れでは二三日は當處に滯在いたし、處々名所舊蹟を御見物あつては如何幸村「イヤ辱あふござる、然らば兩三日御厄介に相成り

ませう」と衆傑長曾我部盛親と智略張良孔明に優ると云ふ眞田幸村は、万事の謀計を打ち合はし、夫より互いに各地大名の模樣等を物語りて其の夜を更かし、サテ翌日より眞田幸村は、洛中洛外の名所舊蹟を見物いたしながら地理を諳んじて居ります然るに一日眞田幸村は、例に依つて處々を見物いたしながら、今歩つて來たのが觀音三十三所の第十六番札所、音に名高き清水寺へと出て參り、石段を段々登つて行くと、遙か上の觀音堂の廣場に於いて、人がワア〳〵と黒山の如く群集り、何か騒いで居る樣子に、幸村は何事やらんと急ぎ來たつて見ると、酔拂ひの武士五六人が、年頃十八九才ばかりの婦女を捉へて、頻りに難題を吹き掛けて居る、夥多群集の人々は口々に○「オイ、彼の婦女は可哀そうじやあいか、見れば何處か町家の娘らしいが、足を踏んだとか何とか云つて、先刻より慘々な目に遭はされて居るが、誰も挨拶をして遣るものはないのか　△「左樣だ、

相手の酔泥れ武士は、所司代板倉伊賀守様の家來と云ふので、皆遠慮して口を利く者がねねのだ、何とか助けて遣る方法はあるまいか」と云ふのを聞いた真田幸村は、群集の背後より延び上つて見ると、件の武士六人は娘を中央に取り圍み、武士「ヤイ婦女乃公の足を踏みあがら、知らぬ顔で行き過ぎるとは不埒な奴、サア地辨からんに依つて、我々の酒の相手をいたせ、然らば免しても遣らう」スルト又一人の武士は、武士「コリヤ娘ワ、我々は苟にも板倉伊賀守様の家來だぞ、ソ其の家來の足を踏んで謝つた位で、地辨すると思ふかサア我々と一所に來い」と無理に手を取り引立てんとする、娘は大地にペッタリ座り色も青褪め眼に涙、「ヱヱお武家様、何うぞ御了簡あさつて下さいませ、妾は踏んだとは思ひませねど、貴所方が、御酒に酔ふて居られまして、妾が除けた方へ跳ねて來られましたので、ツイ粗相をいたしたのでございませう、何うぞお免し下さいませ」と平地へ頭を擡り附けて詫りますが、却々聞入れず、果ては手取り足取り引擔いて行かんの亂暴狼藉、先刻より此の体を眺めて居た真田幸村は、少しく憤といたし幸村「何うも不都合な武士である彼等は板倉伊賀守の家來と云ふを笠に着て、町人婦女等を虐めるとは、甚だ悪むべき不心得な奴だ、一つ口を利いて遣ろう」と群集を押し分け其の場へ這入り込み幸村「アイヤお武家、拙僧は見ちるゝ通り借倍で、田辺兵雪村と申す者でございます、如何ある仔細かは、知らぬが、高が婦女の事故拙僧に免じて、此の場の所は許して遣つては下さるまいか武士「ナ、ナンダ、坊主の癖に我々に向つて横柄な言葉遣いをする奴だ、汝等の出る所でない、黙首で居れい幸村「イヤ、夫れはお心得違ひである、人を助けるは出家の役であれば、此の儘に見過ごすと云ふことは相成りませぬ、又假りに婦女が足を踏んだにした處が、婦女に足を踏まれた位で、詫いの何のと云ふお身柄でもござるまい、却て

各々方の御身分に拘はります、依つて幸ひ拙僧がお詫を申すより、是非共お許しを願たい　武士「ヤイ喧しい哩、假令如何樣に申さうとも許すことは相成らん、藤坊主の知つた事でない、控へて居れい」と足を擧げて磴たと蹴り飛ばさんとする、此の傍若無人の有樣に、堪忍強き幸村も憤懣の色を爲し　幸村「之れは無禮至極、仲裁人に對つて劍暴をあさると、出家とても容赦はいたさぬ」と件の武士の胸倉をドンと突き飛ばした、突き飛ばされて根が醉つて居る者だから、足許が蹌踉々々といたし、彼方へ轉倒つた、之を見たる殘りの武士は大に怒り　武士「已れッ、小癪な腕立て許しは置かん」と各々一刀抜き連れ斬つて掛かる、此方幸村は莞爾と打ち笑ひ　幸村「ヤア、清淨無垢の佛地に於いて大刀を抜くとは何事である、主が主なら家來も家來、以後の慎しめ斯うして呉れん」と振り込み來たる一刀の下を拯き潛りあから、一々脾腹へ當身を喰はし、到頭六人共其處へ悶絶さした

其處で幸村は六人の大小刀を取り揚げて終い、之れを一つに纏つて置いて、サテ婦女に向ひ　幸村「コレお女中、狼藉武士は斯樣にいたしたれば、心配せずと早く歸るがよい」此の時迄傍へにブル〳〵震へながら小さくなつて居た件の婦女は、漸々身裝も繕ひ其處へ兩手を支へ　娘「ハイ、既に難澁の處をお助け下さいまして、誠に有り難ふ存じます、妾は珠數屋町に佛具屋渡世をいたして居ります、愛宕屋清助の娘浪と申します、シテお坊樣は何處のお方でございますや、改めてお禮に上り度ふ存じますれば、何うぞお聞かせあさつて下されませ　幸村「イヤ拙僧は、諸國行脚の身であれば住所はない、又名前も云ふ程の事でもあるまい、夫れには及ばぬゆへ、氣を附けて歸りあさい　娘「イヱ、左樣でもございませうが、是非共お聞かせを願ます」と强て尋ぬるものですから　幸村「夫れでは名前丈け申し上げる、拙僧は田眞雪村と云ひます、御緣があつたら又お目に掛かる時もあろう

サア早く歸られよ」と無理に婦女を歸らせて置いて、眞田雪村は倒れたる武士の側に參り、一々活を入れて之れを蘇生せる、スルト件の武士六人は、四方キョロ〳〵見廻しながら、鳩が豆鐵砲に打たれた樣に、眼をパチ〳〵させて居る、此の時眞田幸村は彼等に向ひ幸村「お武家、如何でござる今一度手の内をお見せ申さうか」之れを聞いた六人は、其の處へ手を支へ武士「ハイイエ結構でございます、何うか無禮の段々平に御許の程を願ます」と恐縮の体で何れも三拜九拜いたして居るばかり、此の体に幸村は笑ひ出し幸村「アハ、、、、苟にも京都の所司代、板倉伊賀守勝重殿の家臣に、貴殿の如き亂暴者あつては、下々の迷惑であると考へるに依つて、此の大小を証據といたし訴へて出ると考へてござるが、各々異存はござるまいな」イヤ之れを聞いた六人は、俄かにオル〳〵震ひ出し色蒼白め泣き出しそうな顏をして武士「ドー何うか、夫れ丈けは御容赦を下されない、實は其の大變酩酊をいたして居つて、ツイ失禮をいたしました、乎に御容免下され」と地邊へ頭を摺り附けて謝罪に及ぶ、其處で幸村も漸やく色柔げ幸村「夫では、今日の處はお許し申さう、此の後は屹度斯樣に婦女等を相手にして、狼藉をいたされあ、左ば大小刀はお返しいたす」と、一々歸して遣り、後をも見ずして飄然と其の處を立ち去りまする、然るに件の武士六人は互いに顏見合せ武士「オイ佐藤氏、何んと恐ろしい強い坊主もあるではあいか佐藤「左樣だ、彼れは只の坊主ではあるまい、田眞雪村と云つたが、何でも由緒ある奴に相違ない武士「ウム、乃公も左樣思ふて居る、普通の坊主は顏あぞは嬌しい者であるか、彼の坊主の顏は何處ともなく恐ろしい、彼奴の眼で睨まれると躰がスクみ樣な氣がするではあいか武士「左樣〳〵何處へ歸るか一つ背後を尾けて遣ろう」と六人の武士は相談いたし、幸村の歸る背後より見へ隱れに尾けて參る、然るに此方眞田幸村は、後に

あつたら慶元兩度の戰に於いて、關東百万の大軍を一城の許に引寄せ、自由自在に懸け惱ますと云ふ、十能六藝に達し天文地理に通じたる、古今無双の大軍師であるから、左樣あことは素より承知、態と道を變へて彼方此方と歩みあがら、今しも建仁寺の境内に這入り込み、傍への雪隱の中へ飛び込み、眤つと窺ふて居ると、背後より尾けて來た件の六人の武士は、同じく門内に入り來り、武士「佐藤氏、確に此處へ這入りましたあ」佐藤「左樣然し、建仁寺の和尚は拙者能く其の顏を知つて居るが、今の坊主とは異います、一應小僧か番僧にでも尋ねて見やう」と六人は奥へと歩つて參いる、始終の樣子を雪隱の中で聞いて居た幸村は、密かに雪隱より立ち出で表へ飛び出すや、僥倖能しと急ぎ双林寺差して歸つて來る、而して此の事を盛親にも話し、豪傑軍師は互に手を拍つて笑ふて居る、然るに件の六人は建仁寺の番僧に向つて武士「コリヤ〳〵今朝樣の〳〵僧侶が此の境内へ

這入つたが、一當寺に來て居るのであるか番僧「ヘエ、、、左樣あ僧侶は當寺には決して居りませぬ、何かお間違ではございませぬか武士「イヤ確かに見屆けたのだ、然し其方が隱す譯もあし、ハテ面妖な事である」と六人は怪みあがら、境内隈なく尋ねたが毫も相判らん、其處で六人は建仁寺を立ち出で佐藤「何うも不思議な事である、事は依ると彼は天狗かも知れませぬ武士「左樣〳〵、鞍馬山が近い故僧正坊が坊主に化て來て、我々を惑したのであらう」と取り止めもあき事を考へ一同不審に思ひあがら急いで立ち歸り、此の事を眞事僞事打ち交せて、自分等の主人ある板倉伊賀守勝重殿に言上する、スルと勝重殿も不審の眉を顰め勝重「フム、シテ其の僧侶の姓名は何と申した家來「ハイ、確か田眞雪村とか申しました勝重「ナニ、田眞雪村と申せしとか、フム、、、」と暫らく何か考へて居たが、軈て膝を叩き勝重「ウム相判つた、田眞雪村と申すは世を忍ぶ假りの名、誠は紀州九度村

に閑居いたす、眞田幸村である、ぞッ家來「へエ、彼れが名高い眞田幸村だ……、へエ、何うして御主人樣夫れが相判りまして、勝重「ウム、他でもない田兵とは眞田と云ふ事を逆に讀んだので、ある、雪村を讀みで云へば幸村と成る、依つて眞田幸村に相違ないのじや家來「へエ、道理で普通の坊主とは違つて居ると思ひました」と今更あがら何れも縮み上つて恐れて居る、此の時所司代板倉伊賀守は臣下に向ひ勝重「眞田幸村が僧侶の姿と相成り、諸國行脚をいたし居るとは、關東よりの通知によつて承知いたして居つたが、當地へ來たりしとは今の今迄氣付かなんだ、彼れ幸村は紀州九度村に閑居いたして居るど雖ども、却々油斷のあるべき人物にあらず、大御所家康公に置かせられても彼れの技倆拔群なるを慕はれ、何とかして味方に引き入れんと種々苦心をいたされると聞及ぶ、然し乃公の見る處では彼れ幸村は、却々一通りの人物にあらざれば、關東方に味方なぞと思ひも依らず、梅檀は二葉にして刈ざれば幹を枯らすの憂ありとかや、今にして彼れを除かずには德川家に不利ある事は、火を見るよりも瞭然あり、依つて只今より幸村の居處を探つて參いれ」と、夥多臣下に嚴命を下し、京都町中を四方八方と捜索をいたされる、然るに此方東山双林寺境内、長曾我部有無齋の閑居に於いては、主客何れも好き話し相手が出來たと云ふので、近頃は夜の更ける迄軍略兵法の事に、互いに異見を戰はして居りましたが、一日幸村は例の如く飄然として閑居を立ち出で、黄昏時に歸つて參り、盛親に向ふて云へる樣、幸村、時に盛親殿、先頃貴殿にお話し申せし所司代板倉が、大分慌てゝ參つた樣子でござる、盛親「フム、夫れは面白ひ事にあつて來た、然し彼れも古狸家康よりの目鏡で以つて、京都の所司代とある位の人物だから、屹度此の閑居に眼を附くるに相違ござるまい、幸村「左樣、此處一兩日の間に氣付きませう、其の眼付いた處を又ソロソロと

抜けて板倉の氣を探ませて遣るも一興である」と兩人は互いに笑ひ興じて居る、然るに所司代板倉伊賀守は、最早今日で五日ばかりも洛中洛外殘る隈なく相搜らすと雖ども、一向に相判らんので種々と苦心をいたして居つたが、不圖思ひ浮べたる事ありと見へ臣下を呼び「勝重」コレ者共、先日より處々方々と幸村の行衛搜索に及ぶと雖ども、未だ何の便寄もなく甚だ困つた次第である、就ては不圖思ひ浮べたるは、目下東山双林寺境内に閑居いたす有無齋事長曾我部盛親である、彼れも關ヶ原の敗戰に世を挾められ、只今は猫の如く爪を隱して溫順しく、月雪花に老後を樂む如く見せ掛け居るも、密かに天下の動靜を窺ふて居る事は、大御所公の御眼方に達はす、依つて特に眼を附け油斷をいたすあとのお言葉であつたが、若しも彼れの處に幸村滯在いたすかも相判らん、取り急ぎ双林寺境内を搜索ば及べい」と心利きたる家臣に命じて長曾我部盛親の閑居を搜索させまする

處が翌日に到り家臣との二人は駕せ歸り家臣「ハア、御主人樣に申し上げます勝重何事であるぞッ、家臣「ハイ、御指圖に從ひ、双林寺境内長曾我部有無齋の閑居を探りましたる處、確に先達來一人の僧侶參り居り、毎日他出をいたし夜は遲く迄主人有無齋と頻りに何か語らうて居るとの事にございます勝重「フム、然らば其の者が眞田幸村に相違ない、何とかいたして彼を打ち取る工風をいたさねば相成らぬ、尚も拔らず張り番をいたせ、而して外出いたせし時は急ぎ報知せに及べよ」と命じて置いて勝重は二三股肱の家臣と共に、何か頻りに計略を凝して居る、此方眞田幸村は或夜盛親に向ひ幸村盛親殿、何うやら板倉は某の有家を知つたらしい、故に之より一先づ大阪へ下り、衆での手筈に及ぼうと思ひます、依つて御貴公も通知に接し次第、直ちに御入城を願ひたい盛親「イヤ承知いたした、夫では太儀ではござるが萬事お拔かりなき樣、充分の御盡力に預り申す」と兩雄互に後

日の再會を約束いたし、幸村は身仕度充分に用意を調へ、双林寺境内を立ち暗に紛れて其の場を出立いたしました、處が双林寺境内を張番いたして居た板倉伊賀守の家來の者は、幸村の立ち去る樣子を見て、急き馳せ歸つて主人勝重に此の事を申し上げる、勝重は之を聞いて勝重「ナ、何と申す、幸村が今夜只今當地を出立いたすとあ、夫れでは今夜を過ごしては彼を擊取る機會はあい、ャア、山添玄蕃はあらざるか玄蕃「ハア、御主人仰に御用でございます勝重「オ、玄蕃、其方は之より手勢百名を引連れ、幸村が必ず淀川堤より大阪に下るに相違ない、依つて先廻をいたし彼れの來るを待ち伏せ、追取り圍んで擊取つて了へい玄蕃「ハ、ア、委細畏り奉る」と山添玄蕃は急ぎ手勢百名を引連れ、身仕度甲斐〳〵敷、幸村の背後を追ふて、間道より淀川堤の橋本に先廻りをして、彼方此方に手勢を忍ばせ、幸村の來るを今や遲しと相待つて居ると云ふ、サア淀川堤の大騒動、亂

師真田幸村が加藤家の浪人荒川熊藏、赤星太郎兵衛兩人に出遇ひの一條は、一寸一息いたしまして、次席に講演いたします事にございます……

第二席

偖ても軍師真田左衛門尉幸村は夜に紛れて長曾我部盛親の閑居を立ち出で、段々と道を急いで、今や淀川堤橋本の少し手前迄差し掛つて來ると、何とおく殺氣陰々と立ち登り、行手を遮ぎる樣子の旭見ゆるに、左衛門尉幸村は足を留めて、仰いで眺つと天の星を眺め、闇に透して向ふを窺ふて居りましたが、莞爾と打ち笑ひ幸村「ハ、ア、偖ては向ふに伏勢ありと覺へたり、流石は板倉伊賀守である、余の立ち去るを知つて先廻りをいたし發ち取らん手段と相見へる、假へ幾百人の伏勢ありとても、何條何程の事やあらう、イヤ板倉伊賀守の鼻柱を挫いて呉れん」

と傍への稲村蔭に歩つて參り、用意の燧石を取り出だし、之れに火を遷して、ブウ〳〵と積み累ねたる稲に吹き附け置き、之れから消へる氣遣あしと見定めて置いて、拔足差足一丁餘り後戻りをして、暫らく樣子を伺ふて居ると、燃て程なく火は漸々と燃へ上つた、此の体に彼方此方に隠れ忍んで居る板倉伊賀守の家來は家來「ソリヤこそ、又も眞田の計略に掛つたか、ソレ追つ取り圍んで擊ち取れい」と山添玄蕃を頭として、處々に忍んで居たる同勢百名計りは、バラ〳〵と其の處へ現はれ出で、燃へ上る火の處へ駈け群集り「眞田は何處だ幸村は居るかと」一齊に拔き連れて立ち騒いで居る、遙かに此の体を眺めた幸村は腹の内にて笑ひ出し幸村「アハ、、、思慮なき雜兵の立ち騒ぐ事かな、面白し〳〵、イデ彼等を驚かし呉れん」と密かに彼等の背後に廻り、天地に轟く大音聲幸村「ヤア〳〵、板倉伊賀守の木葉役人共、眞田左術門尉幸村此處にあり、汝等の來たるを篤より承知の上待つ事久し、成らば手柄に擊ち取つて見よやツ」と田の中に建つてある棒杭を引き拔くが早いか、辻路附き騒いで居る多勢の中へ喚き叫んで躍り込んだり、山添玄蕃を始め同勢の面々は、不意の事として面喰ひ山添「夫れ、眞田幸村あるぞ油斷をするな」と前後左右より追取り圍んで斬り掛る、此方幸村は事ともせず、四方八方より擊ち込み來る奴を、右に躱し左に躱し丁々發止と扱ふて居る、然るに談し替つて淀川堤防の彼方より、ス〳〵と歩つて來たつたる旅裝束の大兵肥滿の武士二人、遙かに燃へ上る火影を打ち眺め武士「オイ赤星、彼の火は何だらう、何か騒ぎ聲が聞へるでありいか赤星、左樣だ荒川、此の眞夜中に火が燃へて居るも怪いが、兎に角早く行つて見やう」と兩人は尚も道を急いで、既に間近く歩つて來たつて見ると、只一人の大坊主を多勢が中央に取り圍んで、今や戰ひの眞最中と相見へる此れを見たる件の武士兩人は荒川「オイ赤星、面白い事が始まつ

て居る、彼の坊主に加勢をいたして遣るから赤星「左様だ、事の善悪は何うでも好いのだ、多勢の奴を斬り捲つて終へ」と堤防の上より大音聲を張り上げ荒川「ヤア、斯かる夜陰に及んで、多勢を語らひ只一人に撃ち掛るとは卑怯千万、定めて山賊夜盗の類あらん、熊本加藤家の浪人、荒川熊蔵、赤星太郎兵衛の兩人大入道に加勢をいたすのだ、何奴此奴も覚悟いたせ」と面も振らずドッと喚いて、多勢の内へ斬り込んだり、荒川熊蔵に赤星太郎兵衛の兩人は恰も人あき處を行くが如く、當るに任せて前後左右にバラリ〳〵と斬つて落す、スルト今迄多勢を敵手にして働いて居た幸村は、之れ幸ひと引外して堤防の上にと駆け上り、彼方の樹影に、眈つと見物いたして居る、稍暫くはチャチャン〳〵と斬り結んで居たが、今は彼是半分以上も斬り倒され殘り少なく相成つた、此の体に山添玄蕃は慌て出し山添「ヤア、敵は二人でも却々手剛ひぞ、敵はぬ逃げろ」と、右往左往に散

砂あし蛛蜘の子を散らすが如く逃げ亡せて了つた、後に兩人は血刀を拭ひ鞘に收め死骸に腰打ち掛け荒川「オイ赤星、火が消へ掛つて暗らくあつたじやあいか、然し彼の坊主は我々に委して置いて何處かへ行つたんだろう」赤星「サア、却々圖迂〳〵敵坊主でないか、何處へ逃げ失せたんろう」と、頻りに話をいたして居ると、遠か土手の上より幸村「アイヤ御兩人、其の坊主は此處にチャンと控へて居る、心配召さるな」と其の處へ歩つて參り幸村「之れは御兩所、お腕前お美事でござつた、久し振りに胸が爽快といたした、拙者は田辺雪村と申します」之れを聞いた兩人は一齊に大地へ平伏あし「熊蔵」ハ、ア、今日は如何かる吉日ぞや、掛かる處に於いてお尋ね申す辺田幸村公に御拝顔を得ると、之れに勝る喜悦はございません、私事は肥後熊本加藤家の浪人赤星「荒川熊蔵と申します、同じく加藤家の浪人赤星太郎兵衛と申します、私事は、赤星「私事は、必ず後お見知り下され度く存じます」と叮

嘸に挨拶をいたす、此の時幸村は微笑を含まれ幸村「イヤ、左様に御丁嘸なる御挨拶では痛み入る、乗て明に聞きまする加藤家の勇士荒川殿と赤星殿でござるか、能き處で御拜顔を得ました」シテ御両所には何れへお越あさる荒川「ハイ、私共は主人清正公の命を受け、密かに御貴公の有家を尋ね居りました」幸村「フム、シテ清正公のお言葉は」両人「ハイ、主人清正天下の動静を窺ふに此處二両年を出でずして、關東關西戰爭起る、其時は余は既に死してあらず、只願むべきは紀州九度村に閑居あす兵田左衛門尉幸村公あるのみ、幸村公は今や各地の様子を捜らん爲め、田舞雪村と名を改め、僧侶の姿にて諸國漫遊中にあれば、其方等両人之に巡り合ひ、余が精神を傳へ、且つ余が命は既に旦夕に迫れば、一應面會の致し度と傳へよとの御命にございます」幸村「フム、左様でござつたか、夫れは有り難ふどざる」両人「シテ、幸村殿には今夜の騒動は如何ある譯でござ

いまするや」幸村「イヤ、左様の御事でありしか、夫れはお氣の毒千万、某今夜の顛末は云云斯様〳〵の次第にて、此の者共は皆板倉伊賀守の家來であつて、某を擊ち取らん爲の計略にてありましたが、返つて御両處の爲に大半討ち取られ斯くの始末」と事落もあく物語り幸村「實は、之より大阪に下り備前島ある片桐且元殿を訪ぬるの考へである就ては某旁々御相談も之れ有り、一應大阪は備前島ある片桐の屋敷迄御同伴を願ひたいが、如何でござる」荒川「ハイ、夫れは願ふてもない仕合でございます、夫れでは御供仕りませう、シテ此の死骸は所司代板倉が片付ける筈、然し一書を認めて置きませう」と幸村は用意の墨壺白紙を取り出し「一つ此の者共夜陰に乘じ、旅人を劫かし金銀衣類を強奪せん爲め、大勢を頼んで暴行狼藉をあすは、定めて盗賊の類と相覺へ、諸人の患を除かん爲め、此に天に替つて誅戮を加へたり、當領分

は京都所司代の御支配所と相聞へ候間、宜敷跡片付の義相頼み候、京都所司代板倉伊賀守勝重殿、御存知の旅僧より」とサラ〳〵と一筆を認め、之を死骸の髪に結び附け置き幸村「斯樣にいたして置けば大丈夫である、左らば參ろう」と智勇兼備の軍師真田左衛門尉幸村は、急かず慌てず傑荒川熊藏、赤星太郎兵衛の兩人を引伴れ、悠々寛々として其の處を立ち、大阪表を指して乘り込み參いる、然るに此方板倉伊賀守は、打ち洩されの家來が逃げ歸つての注進に依り、真田幸村を討ち洩したのみか、返つて家來大半を討たれ、殘念〳〵と口惜しがつたが、何うも後の祭りで仕方がない、其處で家來に命じ死骸取り片付をいたさせる、スルト家來は一々死骸を引取り、取り調べますと丁度六十三人討ち果され、且つ死骸の髪に何か一書が結び付けてある故、之れを主人の板倉勝重に差し出だす、板倉勝重は此の書付を一覽いたして大いに怒り「勝重「サエー殘念である、此の勝重を

馬鹿にせし致方、彼れを討ち洩せしは丁度虎を野に放つが如く何時如何なる事を致すやも計り難い、嗚呼大阪方は未だ侮る事は出來ない」と齒を噛み鳴らして口惜しがつて居る、偖ても真田幸村は荒川熊藏、赤星太郎兵衛の兩豪傑を引伴れ、備前島なる執權職片桐市之正且元の屋敷へ出て參ると、既に夜は白々と明け放れて、丁度若黨が表門の扉を引き開けて居る處であるから幸村「一寸お尋ね申す、若黨「ハイ、何に御用でございます、幸村「御主人且元殿はお目覺でござるか、若黨「ハイ、先刻よりお目覺にあられまして、泉水の邊をお歩でございます、幸村「フム、夫れはお早ひお目覺め、然らば田真雪村と云ふ僧侶が訪ねて參つたとお傳へを願たい、若黨「畏まりました、暫らくお控へを願ます」と三人を內玄關に待たせて置いて、若黨は奥庭の通用門を引開け內にと這入り、泉水の傍を散歩いたして居られる、御主人片桐且元公に此の由し申し入れる、スルト此の事を聞かれた且元公は

喜悦の眉を開き、且元「フム、眞田幸村殿が參られたとな、夫れは待ち兼ねた若黨イエ御主人様、眞田幸村様とは申されません、眞田雪村と云はれましたので……且元「イヤ其方の知つた事では、あい、夫れではお出迎ひ申さう」と自身が急いで玄關へと出て參られ、且元「之は〳〵、幸村殿には能くこそお訪下されました、今日は見へられるか明日は御來駕下さるかと、心待ちに相待つて居り申した、サアお通り下されたし」幸村「イヤ、之は且元殿、相變らず御健祥にて大慶に存じます、流石は且元殿の御眼力、某しの參るをお待ち兼とは恐れ入りました、然らば御免下されたし」と且元に從ひ兩人を連れて奥にと通り、主客互に席定まり、万事の挨拶も相濟み、サテ且元は口を開き且元「時に幸村殿、此の御兩處は何某でござるや、幸村「ハイ、實は昨夜淀川堤橋本に於いて云〳〵斯樣〳〵の事あり、其の節之ある御兩處來たられ、某の危急をお救助に預つたる次第、即ち肥後熊本加藤家の浪人、

荒川熊藏、赤星太郎兵衛殿と申されます、且元「フム、夫れは宜き處へお越しなされた、加藤家の模樣を知るにも風强でござる、シテ幸村殿には今日何れを御漫遊あされしや」其處で幸村は今日迄諸國を廻り、一々捜り得たる各地大名の擧動を物語り、サテ改めて幸村「只今お話し申せし通り、豐臣家恩顧の大名中にも、舊恩を捨てゝ德川家に媚び從ふて居る向もあり、まつた表面は服從と見せ掛け眞實機會を待ち居る連中もあり、種々樣々であります、然し夫れは兎も角、此の肝心の大阪は如何でござるや、且元「ハイ、某執權の職にありながら、兎角に大阪城内に於いては意見用ひられず、淀君始め大野織田の輩に常に邪魔物扱ひをされるに、ホト〳〵困却いたし居ります」と眞實面に表はれて、落涙に及ぶ、眞田幸村も俱に涙を流し幸村「イエ、貴殿の御胸中はお察し申す、忠臣世に用ひられず、奸臣時に蔓るは、古今其の例し尠からず、聽に嘆息の到りでありますが、然し

太阪城内には他に人物はございませぬか　且元「イエ、人物あきにあらず、世に用ひられざるばかりでござる、年は若けれども木村長門守主成あぞ、智勇兼備の大忠臣であります、まつた忠義鐵石の如き豪傑には薄田隼人兼相の如きあり、其他忠勇兩全の士に乏しからずも雖ども、申すも恐れ入つたる次第ではござるが、兎角淀君の御專横、或は秀頼公のお側には、大野織田の一類が其の權威を振ひ、執權職の某さへも、思ふ事の八分も用ひられず、旁々先途を思ひ遣り、日夜心魂を碎いて居ります」と涙と共に物語る、之を聞いた幸村始め荒川赤星に到る迄、何れも齒を喰ひ締め無念の涙に昏れ、暫らく言辭もございませんだが、聽て幸村は幸村、イヤ、御物語りを聞けば聞く程、豐臣家の先途が思ひ遣られる、然し之も時節を待つより外に仕方もありません、就ては近き内に關東關西手切れと相成るは必定、其の時に於いて兎や角厭いでも駄目でございれば、今日に於いて

百年の計略を廻らせて置かねば、乾度臍を噛むの悔があらうと思ひますが、片桐殿の御意見は如何　且元「如何さま、御同感でござる、就ては充分お打合せ申し置きたき義あれば、木村長門守重成殿を一應呼び寄せますれば、何うか御面會を願ひたい、其の上にて三人評議を凝そうではござらぬか　幸村「ハイ、夫れは某よりお願ひ申し度く存じ居りました、然らば木村殿を至急御招き下されたい」と其處で且元は背面を認め、之を若黨に持たせて大阪城内へと差し遣はす、程あく長門守重成は騎馬にて駈け附け、案内を乞ふて且元の居間へと通る、スルト且元は且元「之れは重成殿、早速お出で下され千万辱ない、此の方こそ元の信州小縣郡上田の城主、真田左衛門尉幸村殿でござる」　重成「ハア、兼てより噂には御高名の閉より下手に座り手を支へ程を承知いたし居りましたが、御貴殿が真田幸村殿にございますや、某は木村重成と申す若年者、以後御懇意に御願ひ申しま

す幸村「イヤ、申し遅れました、某は真田幸村でござる、當時大阪城内の若手勇士の一人に、忠義無類の木村長門守重成殿のある事は承知いたして居りました、何卒御別懇に願ひ申す」と互いに謀遜をいたし初對面の挨拶に及ぶ、其處で且元は木村重成に、真田幸村が諸國漫遊をいたして居る精神まつた幸村より聞き取つたる各地大名の動靜に就いて、詳細に物語りをいたし、今回大阪表に參りし理由を述べ且元「右の次第であるから、特に御貴公をお招き申し、三人御協議いたし置たき義の之れあり、態々お呼立て申したのでござる」重成「イヤ、若年の某を左程重く御信用下さる段、恐縮の到りに存じます、然らば不肖ながら御協議に預りませう」と改めて三人は別席に入り、暫らく密議を凝らして居りますが、ツモ此の三人則ち智謀鬼神を驚かすの真田幸村、仁義に厚き片桐且元、忠勇双びなき木村重成は、如何ある謀略を相談いたしまするや、一々此の場の有様を申し上げ、

ましたら、皆々しうございますゆへ、皆摘んで申し上げますが竟り關東關西手切に相成つた節には、軍師に真田幸村を仰ぎ入城を願ふ事、各地に散在かす豊臣家の恩顧のある豪傑、則ち長曾我部宮内少輔盛親、塙團右衛門直之、其他勇士の面々に檄を飛ばして入城を促がす事、其他事成らずして戰爭利あらず敗亡に終りし節は、秀頼公を薩摩へ落し參らせ、機會を見て再度の旗擧をいたそうと云ふ事迄、洩らす處もなく三人首を鳩めて打ち合せをいたしたのでございます、軈て協議も相濟み、三人は以前の席へ出て參り、サテ幸村は且元に向ひ幸村、時に且元殿、他ではありませぬが此の兩君は却々剛勇無双にして、一方の大將としても恥かしからぬ人物でありますれば、何うか大阪へ御入城を願ひ、一臂の力を添へて頂ては如何でござるや且元「イヤ左様願はれますれば、我々は大いに喜悦びます、何卒左様お勸めを偏へにお願み申す」其處で幸村は兩人に向ひ幸村「荒川氏亦

星氏、只今お聞の通りでござるが、御貴殿達も我々と志を同ふして、今一度豊臣の天下を盛り返へしたいとの御心願であればお氣に召さぬ處もあろうか、大野織田等には御交際をいたさいでも宜しいから、暫らく御辛棒を願ひ度が、御得心は下さるまいか」兩人「ハイ、左樣御叮嚀なるお言葉では痛み入ります、吾々は犬馬の勞を惜まず、嘗つて秀頼公の御味方をいたしたい考へでありますれば、宜敷お願ひ申す」と心好く承知をいたす、其處で指々大いに喜悦び、木村長門守重成は一先づ暇を告げて大阪城内へ立ち歸る、後に幸村は且元に對ひ幸村「尚ほ且元殿に御依頼の一義がありますが、某の家來猿飛佐助、金ケ崎榮次郎、北條浪人和久半左衛門、因州鳥取浪人宮部熊太郎、まつた冤十郎、此の五人の者が大阪へ參り、某と出會ふ約束をいたして居ります、何うか知らせて呉れる樣若し尋ねて來ましれ時は、何うか知らせて呉れる樣若し御話し置を願ひます、必らず一兩日中には參るであろう

と存じますれば、夫迄お邪魔ではあるが逗留いたしてもお差支へはありますまいか」且元「何の、御心配には及ばぬ事、イヤ承知いたしました」と若狭仲間に其の旨申し聞かせて置いて、且元は且元「夫では幸村殿、某は之より登城をいたします故、荒川赤星御兩處にも御同道を願いまして荒川熊殿、赤星太郎兵衛の兩人に向ひ幸村只今お聞の通りである故、且元殿と御入城の上、幸村何うか宜敷お願ひ申す」某は兩三日中に家來の到着を待ち受け、隨分と忠勤を勵んで頂きたいすの考でありますが、今一應中國九州を漫遊ひますが、之より急いで九州へ參り、肥後守清正公にも御拜顔お話を聞けば多分駄目であらうとは思を得る心底で居りますゆへ、何か御用事のございますが、既に清正公たしませう兩人「ハイ、お言葉有難ふございます」の御命令により、主家浪人の妻にて御當地へ馳せ參じました上は、一命は無き者と覚悟いたし居りますれば、別に用向とては

ありませんが、何うか主君清正公に正しく御傳への程を願ひます、又重ねて御拜顔の時を相待ちまする」と互いに別れを告げて、

兩人は片桐且元と共に大阪城内へと歩つて參いる、サレバ眞田左衛門尉幸村は、執權片桐且元、

まつた木村長門守重成にも面會を濟ましし、萬事の手筈を示し合はし、サテ是れからが諸國を漫遊いたし專ら同志を募つて居る眞田家の郎黨、筧十藏、金ケ崎榮次郎、猿飛佐助、又は和久半左衛門、宮部熊太郎の榮傑勇士の面々、衆て期したる事として、備前島片桐且元の屋敷へ尋ねて參り、眞田幸村に對面の上、中國漫遊の途次藝州廣島に於いて福島左衛門太夫正則に面會いたし、其の荒膽を取挫くと云ふの實に、面白き講談は、次席に申し上げる事に致します……

第三席

偖でも眞田左衛門尉幸村は、備前島なる執權片桐市之正且元の

屋敷に逗留いたし、密かに家來の來たるを相待つて居ると、其の翌日筧十藏、和久半左衛門、宮部熊太郎の三名が尋ねて參り、五人の勇士は首尾能く茲に落合い、御大將眞田幸村殿に對面をいたし、互に其の勢を慰めて居りました、色々漫遊中の事共を物語り、

然るに眞田幸村は一同に向ひ幸村サテ皆の者、乃公は之より中國九州を漫遊いたす積りである、依つて猿飛佐助、筧十藏の兩名は同道をいたせ、又金ケ崎榮治郎、和久半左衛門、宮部熊太郎の三人は、之より山陰道の方を漫遊いたせ、何れ九州より歸りには、乃公も山陰道を巡る考であれば、何處かで面會いたすであらう、而して本年の十月迄に乃公等に出遇はん其の時は、一應大阪へ立ち歸り、我々の歸りを相待つて居れ、榮治ハイ、委細長ましたシテ何日御出立あされます、幸村オ、明朝出立いたす積りである、牛左、夫れでは、御主人にも隨分御壯健で

御漫遊の程をお願ひ申します、幸村「其方等も、能く氣を附けて參るがよい、乃公は今度は山伏の姿と相成り出立いたす筈である佐助「十一郎も同じ姿と相成るが宜からう」兩人「ハイ、承知いたしました」と夫より皆々仕度に取り掛り、出立の用意をいたして居る、スルト寛十造は十造「オイ、宮邊、和久、金ケ崎、若しも山陰道に於いて乃公の仇のお絹に出遇ふた節は、乃公の代りに仇討を仕て呉れ、夫れとも乃公等が來る時候じやと思へば、待つて居つて呉ても、何方にしても差支あいから、皆々頼んだよ、」

三人「オット合点だ、猿飛も寛も御大將のお供をして、氣を附けて行けい」と互いに樂しく話しあから、夫々出立の準備を調へて居る、サテ翌日と相成ると、眞田幸村は片桐且元に向ひ幸村「且元殿、左れば兼てお約束いたせし通り、之より中國九州地へ出立いたしますれば、又暫らく御無沙汰をいたすが、何分後の處宜敷お願ひ申します、且元「イヤ、決して御心配には及びません、誠に御苦勞でござるが、何分宜しく御依頼申す」と兩勇互いに別れの言葉を交はし、眞田幸村は山伏姿に身を扮し、筑十造猿飛佐助を引伴れて、密かに片桐屋敷の裏門より立ち出で途を中國地に取つて歩つて參いる、一足遅れて金ケ崎榮次郎、和久半左衛門、宮邊熊太郎の三名も、片桐の屋敷を立つて、之は丹波の方向へ發足する、サテモ眞田左衛門尉幸村は、紀州根來寺の修行山伏と姿を替へ、身には鈴掛衣に輪寶の袈裟を掛け、腰には鐵作りの强刀を帶し、頭には頭巾を頂き、手に百八煩惱の珠數を携へ、一方の手に金剛杖を携へ、十造佐助兩人にも同じ扮裝をさせ、段々と歩つて來たのが備前岡山の御城下も既に過ぎ福山、三原の御城下も何あく通りまして、漸々泊りを重ね日を重ねまして、藝州廣島御高七十八万石、福島左衛門太夫正則公の御城下へと出て參る、此處迄は別段變つたお話もございません、左れば今眞田主從は廣島御城下入口にと相成ると幸村「コレ

兩人、之より當國の領主、福島左衛門太夫正則公に對面をいたし、一應其の意中を探つて見る積りである、其方等は何處かへ宿を取り相待ち居れ　兩人「ハア、シテ御主人樣には之より直ちに御登城でございますか　幸村「オヽ、左樣いたそう、就ては此の通り筋の宿屋へ泊り、戸外へ何か目印を出して置け　兩人「ヘイ長まり奉つる」と兩人は向ふへ行く、後に幸村は只一人スタ〳〵と廣島城の大手御門前へと歩つて來たり、門番に打ち對ひ　幸村「御門番衆、少しくお頼みでござる、何うかお取次が願いたい」此の聲を聞き附け、門番は立ち出でゝ見れば、其處に山伏が立つて居るから門番「ヤイ、只今頼みがあると申したのは其の方か　幸村「如何にも左樣でござる、一寸執次で頂きたい　門番「シテ、誰方に何と言ふて取り次ぐのじや　幸村「ハイ、當國の領主福島左衛門太夫正則公に、田舎雪村と云ふ者が參つたと取次いで下され　門番「ナヽ、ナンダ、忝くも御城主樣に會たい……其方は狂氣ではあいか、當御城主樣は山伏おぞにお近付きはない哩、トツトと歸り居れい　幸村「之れは、怪からん事を承はる者かな、山伏であらうが何であらうが過へば直ぐ別る、其方等の知つた事でない、早く執次がぬと身の爲に惡るからうぞッ　門番「ナヽ、何を吐ずか此の糞山伏奴が、早く立ち去らぬと手酷ひ目に遇はすぞ」と五六人の門番は手に六尺棒を携へ、夫れへ飛んで出で、幸村目掛けて叩き掛る、此の亂暴ある擧動に、物に動せぬ幸村も憤懣の色を爲し　幸村「ヤイ虚外あり、如何に理非を辨へぬ門番とて、除りと云へば餘りでないか、サア打たるゝ者あら打つて見よや」と金剛杖を振り上げ右と左りに打ち拂ふ、時しもあれや城内より「御家老吉村又右衛門樣のお下りッ」と先觸をいたしながら靜々下城をいたす、福島家の老職吉村又右衛門、今門前に出て參り、此の騒動を打ち眺め　吉村「ヤア、大手御門前に於いて狼藉をいたすとは何奴あるぞ、余は當家の家老吉村又右衛門である、

部まれッ」と制止する聲に、門番は縮み上がり、頭抱へて門内へ狐鼠〳〵と逃げ込む、此の時左衛門尉幸村は、又右衛門に向ひ

幸村「アイヤ、某は決して狼藉者ではござらぬ、門番の無禮に出で遇ひ、已を得ず防いだ迄の事、某は紀州根來寺の、山伏にして田眞雪村と申すもの、何卒太守正則公に御拜謁仕り度、態々參上いたしたる者にございます御傳達下されますれば有り難き仕合に存じます」之れを聞いて家老吉村又右衛門は、暫らく頭を左右に傾け、何か思案をいたして居ましたが磯と手を打ち吉村「フム、夫では御貴殿は、眞田幸村殿ではござらぬや幸村、如何にも左様、其の幸村でござる吉村「イヤ、之れは珍客の御入來、拙者御案内申し上げるに依つて、斯ふお出で下されい、コリヤ門番先刻よりの無禮、追つて何分の沙汰いたすであらう、神妙に控へ居れい」と叱り飛ばしあが ら、眞田幸村を案内して城内へ引返し、大守正則公の御前に伺

候いたし吉村「ハヽア、我君様吉村又右衛門にございます」此の時上段襖の上に脇息に凭れて控へられたる太守正則公は「正則「オヽ又右衛門、其方は只今下城いたせしと思いしに又參りしか、

吉村「ハア、我君様に是非御拜謁を得度、天下有名の人物を召し伴れ參りました正則「ナニ、天下有名の人物とは何者あるや吉村「余人ではございません、元信州小縣郡上田の城主眞田安房守殿の嫡子、天下の麒麟兒と云はれたる、眞田左衛門尉幸村殿の事でございます正則「フム、左すれば眞田幸村が當城へ參つたと申す、吉村「ハア、如何にも左様にございます、只今私大手門前へ下城の際、云云斯様〳〵依つて召し伴れお次に控へられます、

正則「フム、夫れでは至急目通りへ召し伴れよ吉村「ハイ、畏り奉つる」と吉村又右衛門は御前を立つて次へ下り、繼て眞田幸村を案内して御前へ伺候いたす、眞田幸村は遙か末座に平伏して居る、スルト大守正則公は正則「コレは、珍らしや眞田幸村、其

處では話も出來難い、近ふ〳〵　幸村「ハヽア、然らば御免下され」とッと御前間近く進み　幸村「ハヽア、大守正則公には麗はしき御尊顔を拜し、大慶至極に存じ奉ります」　正則「コレヨ幸村、其方は紀州高野山の麓、九度村に閑居いたすと聞つるが、如何なる用向にて罷かる山伏の姿と相成つて廻國いたし居るや」　此の時幸村は鋭き眼を光らし、睨つと太守正則公の顔を見詰めおから　幸村「ハヽア、幸村の斯く山伏の姿と相成り、諸國を漫遊いたし居りますのが、太守正則公には「お判りに相成りませぬや　正則「オヽ、一向余は存せぬが、如何なる次第であるか語つて聞かせよ」　スルト幸村はカラ〳〵と打ち笑ひ　幸村「アハヽヽ、元は尾張愛智郡中村より出でし土百姓の子が、少し小力があるのと機會が好かつたので、幸に豐臣秀吉公のお見出しに預り、豐臣家御盛の時節には、お側去らずの大名方の内でも、四天王七虎の内に數へられ、加藤福島と云へば泣く子も止むと迄歌はれたる、横紙破りの福島正則公も、麒麟も老ぬれば駑馬に劣るとかや、眞田幸村の斯かる姿と相成つて居るがお判りにあらんと」あつては、老も老たり古狸に誑かされたる御顔付、　幸村笑止千万に存じ奉る」と、胸に一物あるから、態と四方憚らず罵詈雜言を吐き散らし、ッと大守正則公の面上を睨め付ける、之れを聞いた正則公は烈火の如く憤り　正則「ヤア、小癪なる其の一言、今一言申して見よ手は見せぬぞッ」と佩刀の柄に手を掛け、今にも飛び掛らんの權幕、尻並ぶ夥多家臣の面々、スワ事こそ起りたれと吉村又右衛門始め何れも手に汗握つて氣を採んで居る、此方幸村は平氣の平左で落付き拂ひ　幸村「アハヽヽ、某の申す條が御立腹に相成る樣では、未だ少しは脈があると相見へる、左樣お急きあらずと某の言葉一通りお聞きあれ、　正則公今日薩備兩國の大守として、七十八万石を領されるは聊も誰のお蔭で、斯かるお身分をあられましたか正則「ウム、ッ夫れは關ヶ原の軍功に

依つてゞある哩、幸村之れは怪しからぬ御言葉と心得る、關ケ原の戰爭では只加增にあつた迄の事、其の以前より大名とあられしは誰のお蔭でござるや、其の邊を確に承りたふ存ずる「ウム、少、夫れは……幸村イヤ、夫れは御返答出來ますまい、苟にも加藤福島と云へば、豐臣恩顧の大名と云ふ事は、三才の兒童も能く存じて居ります、然るに慶長五年九月十五日、關東西分ケ目の關ケ原の戰爭に、ヨシ石田治部少輔三成と不和で、ありとは云へ、德川勢に加勢をすると、取りも直さず豐臣家に弓を引きしと同然に候はずや、夫れに比ては加藤家は剛ひも、双方へ義理を立て關ケ原の戰爭には馳せ加はらず、御當家の、と比べては天地雲泥の相違ではござらぬか、此の義如何でございまするや、御返答あらば承りたふ存じます、若し此の幸村の申す事に間違が御座らば、謹んで此の首進上仕る」と威丈高あつて詰め寄せる、流石肝傑強き剛性我慢の福島左衛門大太正則公も、此の道理ある言葉には敵はぬ、グッともすッとも云はずに、只眼を白黑にいたして、青ふあつたり赤ふあつたり、宛で火吹達磨の樣な顏をいたして居る、之れを眺めた左衛門尉、幸村は、少しく言葉を和げ「無礼の浪人眞田幸村が、七十有餘万石の大守に對つて、斯かる無禮の言葉を發するも、覺り豐臣家を思ふての赤心より出でし事でございます、尙ほ無禮序に一つお聞を願ひ度は、不肖幸村は御存知の如く豐臣家恩顧の家柄ではございません、定めて御存知でもありませうが、幸村若年にして未だ與三郎と名乘りし時代に、秀吉公の爲に聊か恩儀を蒙りました、幸村が幼年の頃秀吉の恩義を受けしと云ふ事は眞田三代記に詳かに辨じてあります故、茲には省略して申し上げません」聖人の書に「一飯の德も必らず馴ゆ」と申して、他人に一度たりとも恩義を受くれば必らず報恩と云ふ事を忘れては、人門として犬畜生にも劣りし所業かと考へます、依つて不

宵幸村は聊かある恩義と雖も、之れに報せんが爲に斯かる姿と相成つて居るのでございます然るに憚かりながら大守正則公は、御幼名市松と申されし時代より、秀吉公に對しては恩義のあるお身の上、云はゞ切つても切れぬ君臣の間柄ではございませぬか、左れば其の先君秀吉公より受けられし恩義の、重い輕ひ深い淺いは衡量に掛けずとも明かある譯かと考ます、敢て申し上ぐる迄もございませんが、不肖幸村は父安房守以來、頻りに大御所公より大碌を以つて、お招きに相成ると雖も斷然之を退け、遂には信州上田城をも打ち捨てゝ、斯く見る影もあき浪人と相成り居るは、決して伊達や物好きで致して居るのではありません、此の義偏へに御賢察に預りたく存じ奉つる」と赤心面に現はれて、辨舌滔々として述べ來つたる其の言葉、傍りに人あきは如く怯めず臆せず、寶にや慶元兩度の激戰に三軍を叱咤して、古今無双の大軍師と仰がるゝ程あつて、威風は堂々として四方を拂ひ、自然と備はる其の品格に、太守正則公を始め列座勇士の面々も、唯一人言葉を發する者もなく暫らくは虫あき原野の如く、一座は森として居ります、聽て太守正則公は言葉を和げられ、正則「オ、幸村、其方の申す條は殿に道理ある言葉である、余の如き者と雖ども、恩義の二字には及向ふ威勢もなく、余は決して先君大閤殿下の御高恩は寸毫も忘れし事はないのである、然るに慶長五年關ヶ原の戰爭には、彼れ石田三成と日頃仲惡かりしを以つて、德川勢に加擔いたしたのだ、然し其方の如く正面より鋭く斬り込まれては、流石の余も其の返答に困るが如何にせば宜いと申すのであるや幸村「ハア、不肖幸村の過言をお立腹もあく、返つて御嘉納あらせらる、有り難き仕合せに存じ奉つる、別義ではございません此處二年を出でずして、關東西手切と相成り、一大戰爭の起るは火を見るよりも瞭あ次第であります、其の時に到つて諸國大名は自然と二派に分れ、關

東方大阪方と相成るは必定、其の節には太守正則公は何れへお陳方を成さるお考に候や、此の義聚め承りたく存じまする、正則「オヽ、其の時は……ウムヽヽ、幸村「イヤ、御返答は出來ますまい失禮ある申し條ではございますが、咽喉元過ぐれば熱さを忘るゝの譬へ、以前は如何ある恩義あるにもせよ、目下は德川家の祿を食み賜ふ、藝備兩國の太守として七十有餘万石を領される、福島左衛門大夫正則公でございますれば、口が可愛い爲には以前の恩義を捨てられるのは當節柄でございませう、正則「ウムヽヽヽ、幸村「イヤ、之れは無禮を申し上げて恐れ入り奉りますが物の道理は左樣なことかと考へます、就ては幸村一つのお願がございます、何んとお聞屆けは下されまじきや、正則「フム、願とは何事じや、幸村「ハア、別義にも候はず、太守正則公に置かせられましても、先君大閤殿下の御高恩を少しにても、御思ひ召さるゝならば、以前申し述べましたる今後の戰爭に於いて、敢て

大阪方に御加勢は相願いませんが、事情を拂へて德川勢にお味方おき樣に願はしう存じます、正則「フム、夫れは尤もなる其方の言葉である、如何にも其の義承知いたした、幸村「ハヽア、早速御承諾下され千万辱ふ存じ奉ります、就ては御疑ひ申し上げる樣ではございますが、決して德川方に味方をせんと云ふ一書を願ひ度ふ存じます、正則「イヤヽ、夫れには及ぶまい、正則諾と云へば金鐵よりも堅いと思へ、幸村「アハヽヽ、デはございませうが、近頃は金鐵は兎角溶け安いのに困ります、何うか是非共お願い申します」と手詰の談判が激しいので、到頭御太守正則公も止むなく一書を認められ、之れを幸村に渡す、幸村は始終を讀み了り幸村「イヤ、之さへ頂戴いたし置きますれば大丈夫でございます」と道か末座に下り、慇懃に頭を下げ、幸村「ハヽア、先刻より無禮の段々、平に御宥免の程を願ひ奉つる、然らば最早お暇申上仕ります、正則「オヽ、幸村暫らく待て、一献酌ふではあいか、幸村「ハ

イ、有り難き御諚には候へども、幸村酒類は一向無調法にございます、且つ先を急ぎ居りますれば、失礼ながら之にて御暇申し上げます」と厚く御礼申述べ、吉村又右衛門其他の方々へも挨拶をいたし、御前を下り御城内を出で、鈴掛衣の袖を風に吹かせながら、悠々然として立ち去りました、後には太守正則公始め夥多老臣勇士の面々、皆々烟に捲かれた様な顔をして、大腦不敵なる幸村の擧動に呆れ返つて居るばかり、軈て正則公は家老吉村又右衛門に對はれ正則「フム、、何んと又右衛門、恐ろしき奴もあるものでないか、余は今日迄沢山かゝる人物を見た事はない、即きしに優る大人物である、嗚呼恐るべし〳〵」と流石剛性我慢の福島左衛門太夫正則公も、舌を捲いて驚き恐れて居られる、之れが爲めに後年難波戰爭の際、福島家は事を左右に托して徳川方に馳せ加はらあんだのは、幸村が豫め計略を以つて、斯の如くいたしたが爲めであります、イヤ之れは後のお話

七、偖ても眞田佐衛門幸村は、首尾能く三寸の舌頭を以つて福島左衛門太夫正則を籠絡いたし、僥倖好しと一人心に笑ひながら、御城内を下りスタ〳〵と歩つて來たつたお濠端、スルト向ふに猿飛佐助が待つて居るから幸村コレ佐助、何といたして其處に立つて……佐助コレハ、御主人様でございますか、又宿屋が判らん時は、お困りであらうと思ひまして、先刻よりお迎ひに上つていました幸村ウム左様か、夫れは太義であつた佐助シテ、御前の首尾は如何でございます幸村オ、、大丈夫だ之れを見よ」と一書を見せる、猿飛佐助は夫れを受取り讀んで見て佐助成程、何時に替らぬ御大將の御働き恐れ入りました」と一書を幸村に返す、其處で兩人は十造の待つて居る大手通一丁目の宿屋へ參いり、冗十造にも此の趣を話し、主従三人は互いに笑ひ興じて居る、サテ翌日と相成ると、三人は宿屋を立ち出で段々と道を急いでサレバ之より一直線に肥後熊本に乘り込み、

荒川熊藏の話に依つて聞き及んだる、御病中なる肥後守清正公の臨終に、是非共一目面會を致さねば相成らぬと周防德山の御城下に出で、此處にて便船を求め、海上難のお話もあく、九州は中津の御城下へ上陸いたし夫より森の御城下も過ぎ、急ぎに急いで漸々茲に肥後熊本御高七十二万石、加藤肥後守清正公の御城下へと乘り込んで參りました、左れば之より眞田左衛門尉幸村が、加藤肥後守清正公の御臨終に會し、密かに清正公の依托を受け、夥多加藤家の老臣勇士を向ふに廻はし、蘇普張儀の辯舌を振つて、加藤家の向背を定めると云ふの一段は、例に依つて例の如し。

第四席

茲に肥後熊本の城主御高七十三万石、加藤肥後守清正公は、古今無双の名將でございまして、日本國中は勿論、雞林八道に迄

鬼上官と呼ばれ、饒勇拔群あると同時に仁義の志に厚く、流石の德川家康公も家康「恐るべき者は、只加藤主計頭のみである、彼は目の上の瘤である」と非常に清正公を憚かり、其の結果として京都所司代板倉伊賀守勝重に内意を含め、毒饅頭を食はせ自然と毒命を縮めるの策略を施したのでありますから之は大閤記に詳しく演じてありますから、此處には申し述べません、然るに此の頃に到りては、流石剛勇の清正公も病氣には勝れません、毒の爲めに此頃では既に毒命も旦夕に相迫つて居ると云ふので、夥多臣下の面々は其の心痛一方あらず、皆々安き心もございませんと云ふ危急お場合と相成つて居ります、其の混雜眞最中の處へ、眞田左衛門尉幸村は急きに急いで熊本御城下へ乘り込み來り、先づ加藤家の忠臣大木土佐の屋敷に訪ねて行き、

幸村「お頼み申す、若黨「ハイ」と答へて若黨が出て參いる、幸村は田眞雪村と申す者でございるが、御主人大木土佐殿御在宅ならば

至急に御面會が願ひたう存じます　若黨「ハイ、暫らくお待下され」と奥へ這入り、暫て立ち出でたる主人大木土佐は土佐「コレハ〳〵、真田幸村殿には能くこそ御來駕下されたる、サア先づ奥へお通り下されたい……ナニ御家來御同伴で差支ございませんか」幸村「然らば御免下されたし」と佐衛門尉幸村は、筧十蔵、猿飛佐助兩人を從がへて奥へと通り、初對面の挨拶も相濟み、サテ大木土佐は、憂の内に喜悦の色を浮べ　土佐「就に幸村殿には、丁度宜き處へお出下されました、手前主人清正公にも目下蓮命旦夕に相迫り、臣等一統皆々安き心もありません、然るに主人清正公時々某共を枕頭に召され、豐臣家の前途に就ては、余が死せば只真田左衛門尉幸村あるのみ、幸村殿こそ豐臣家の柱石であると申され、先頃荒川熊藏、赤星太郎兵衛の兩人に意を含め當地を出發いたさせ、御貴公を訪ねさせました樣な次第　幸村「イヤ、其の荒川赤星の兩人には某既に面會致し、万事聞取りました、扨つて未だ清正公御存命中に、是非共御面會致し置たいと存じ、急ぎに急ぎて漸やく只今駆け附けましたる次第、取り敢へず御貴殿の御案内を得て、清正公に御面會をいたしたく、何卒御取り計らひ下されまじきや　土佐「ハイ、承知仕りました、然らば御案内いたしませう　幸村「イヤ、御苦勞に存ずる、就ては此の家來兩人は何うか暫らく、お屋敷で御厄介に預り度ふござるが、お差支へはありますまいか　土佐「何んの、御心配には及びません、緩々御休憩下されたい」と夫より兩人は屋敷を立つて熊本城内へと歩つて參いる、既に大手御門前と相成ると、一人の若武士馬に跨り、足を早めて御門内より駆け出づる樣子の只あらぬに、大木土佐も胸騒ぎがいたし、近付く僕に件の若武士に向ひ　土佐「コレ、立花隆太郎であいか、馬に乗つて慌だしく何事あるぞッ」若武士は大木土佐を見るあり、とヲリと馬より飛び下り　立花「ヤア丁度好き處で御目に掛ります、今御殿御容体お聞

りの御様子、依つてお屋敷へお知らせに参いる處でございます、皆々お待受ね、早くお出で下さいませ」大木土佐を始め背後に従へ、幸村迄、顔色を變へ、言葉忙しく「土佐ナニ、御殿の御容体お異ケとあ、それは大變、幸村殿お續き下されい」と云ふ間も遲し、韋駄天走りに城内へと飛び込み、駈け附け來たつたる、御殿清正公の御病室、見れば老臣勇士の面々御枕頭に伺候あし何れも憂ひの色を帶び肅然として相控へる、土佐は眞田幸村を次の間に待たせ、自身は靜かに御枕頭に進み、居並ぶ何れもに目礼あし、ステ其の處に平伏致し土佐「ハヽア、我君様大木土佐にございます、御容体如何あらせられまするや」此の聲の耳に入るや剛氣の清正公、涙つたる兩眼を見開かれ、御聲微かに、

清正「オヽ、土佐にありつるか、余は待ち兼ねた」此の時大木土佐は兩眼に涙を浮べ土佐「我君様、御存命中に是非共御拜顔を得たき儀物之れあり、則ち眞田左衛門尉幸村殿を召し伴れ参りま

した」と此れを聞くと等しく、清正公は重き枕を揚げられ、清正「ナニ、眞田左門衛尉幸村殿が來たられしとか、オヽ丁度幸ひ、早く〳〵」土佐「ハヽア」と答へて大木土佐は次の間に下り、聽て眞田幸村を案内して、清正公の御枕許近く座らせる、眞田幸村は老臣勇士の方々に會釋いたし、改めて清正公の方に向き直り、昵ッと枕を擡げて待ち搆へて居らるゝ清正公の、替り果たる御姿に目を留め、兩眼より涙をハラ〳〵と流して居る、清正公も亦眞田幸村の面体を、落ち窪んだる眼にて見入りながら、同じく落涙に及ばれ、双方暫らくは何の言葉もなく、日本無双の名將と智將は、互いに口でこそ云はねども、思ひは同じ心の内で語り合ふて居る、聽て幸村は夫れへ手を支へ幸村「ハヽア、御替り給ひし清正公の御姿、幸村殘念に相心得ます清正「オヽ、幸村殿能く参られた、秀頼公を補佐し奉り、豐臣の天下を泰山の安きに置くの謀計は、貴公あらでは他に人ありとも覺へず、清正夫

れのみが氣掛りである、依つて荒川熊藏に申し含め、差遣はしたが面會下されしや、幸村「ハ、ア、如何にも荒川赤星兩人にも巡り合ひ、委細を聞取り夫れ故驅け附け參つたる次第、シテ清正公には御容体は如何でございますや、清正「オ、余の病氣は兎ても明日を保ち難し、死する壽命は最早惜むに足らねど、只氣に掛かるは大阪方の運命、天下騒しと雖も秀賴公の御身体を托し奉るは、貴公からでは他に人物之れなく、仏つて如何にかいたして貴公に對面仕りたいと、夫のみを日夜憂慮罷りありし處、今日只今始めて、相會ふ事を得しは、之ぞ天の引き合せ、未だ大阪方の運命の盡ざる處、喜悅び之れに過ぎず」と其身の苦痛は打ち忘れ、苦しき息を吐きあがら、莞爾と打ち笑む其の光景、幸村は之を眺めて兩眼より落つる涙は瀧の如く、情迫り氣は閉ぢ言葉も容易に出ずいたして居ましたが、暫くあつて頭を上げ、幸村「テ、、今に始めぬ其の御誠忠、幸村ホト〳〵感じ入りました、清正公の壽命をして此處二年永からしめば、再び豐臣の天下とあすばイト容易ある事なれど、天無情にして此の誠忠無二の名將を奪ひ去るとは、實に殘念至極でございます、清正「イヤ、幸にして貴公の有る以上は、余は安心して死する事が出來る、然し幸村天下の形勢は如何と心得る、幸村「ハア、此處二年を出でずして、再び天下は麻の如く亂れ、德川方大阪方と相成るは必定、其の時に到つて諸國大名は自然と二派に相分るると雖ども、皆々く德川方に恐れ大阪へ馳せ參ずる者は一人も之れ無しと相考へます、清正「ウム、余も左樣心得る、シテ豐臣恩顧の大名の向背は何うじや、幸村「左れば、豐臣恩顧の大名として數ふべきは、加賀の前田、奥州の伊達、合津の加藤、米澤の上杉、藝州の福島、筑前の黑田、雲州の堀尾、其の他に之れあり候へども、皆論ずるに足らず、而して前田、伊達、加藤、上杉、福島、黑田、堀尾、皆之れ德川方を揮り、兎ても秀賴公に味方いたす事思ひも

依らす、中には返つて弓を引く不心得者も之れあり候はん、左れば大阪方は孤立にして、天下の大軍を一城の許に引受け、花々しく戦争をいたすの運命に立ち到るかと相考へます　清正「成る程貴殿の意見は余の考と符合いたす誠に心細き次第である、シテ其の後の軍略は　幸村「斯く相成れば、最早や大阪方に得る者は、只各地に機会を窺ふ祿に離れし人物、則ち長曾我部、後藤、塙其他の浪人者を入城せしむるの外之れあしと思ひ候　清正「ウム、シテ僅かの小勢を以つて、美事天下の大軍を引受け、心好く戦争は出来るか何うじや　幸村「左ればにて候、其の上の計略は時に望み勢に應じ、神出鬼没の掛引は、此の幸村の胸中にございまする、然し夫れも一時天下の眼を欺かすばかり、結句大坂方は内より敗れ、徳川の天下となる事は火を見るよりも明かある事にございます、依つて其の上の手段は、秀頼公の御安体を計り奉り、再度の旗挙を期するより外致方あ

し申し相心得ます　清正「フム、流石は天下の智將と呼ばれたる幸村である、能く末の末迄を見透ふし、敵はぬ迄も豊臣家の為に盡さんとは、天晴ある其の精神、清正死すとも心殘りはあい、只怨むべきは余が一子忠廣である、余死せば彼れは兎ても余の志しを引き継ぐ事思ひもよらす、左すれば加藤家は二代にして斷絶する事疑なし、折柄今日迄幾ひ來りし加藤家の勇士二十八將も、忠廣の代とあれば、離散いたすは判り切つたる次第である、が、之も運命あらば是非もない事、只此の上には幸村殿、余の死後は忠廣始め老臣勇士を呼び集め、加藤家の運命を定めて貰ひたい、之のみが頼みである　幸村「ハア、委細畏まり奉つる、幸村此の世にある以上は、秀頼公の御身体は必らず補佐し奉つる御安心あつて然るべし、まつた御當家の運命は、不肖幸村暫く滞在の上、屹度處分を相就け申す、方々御配慮めさるな」と心好く後々の事を引受け清正公を安堵させ參らせる、此の事を

聞いて清正公は、苦しみを忘れて大いに打ち喜悦ばれ、夫より枕許に居列ぶ加藤家の柱石二十八將の面々に向つて、一々御言葉を交され、最後に別室に控へられたる若殿忠廣公をお召寄せと相成り清正「さヨ忠廣、余の遺命も最早此處一刻である、余死せば其方は大木土佐に語り、万事を相談いたせ、其方の精神は既に余は存知て居る故、別に云ひ遺すべき事とてもあい、左ら ば之にて永き別れを告げるであろう、幸村殿遠路態々太儀である」と云はるゝ聲が此の世の別れ、其の儘睡るが如くに息を引き取られました、若殿忠廣公を始め眞田幸村其他二十八將の面々に到る迄、何れも覺悟はいたして居りながらも、今更あがら皆々面を掩い差し俯向ひて涙を呑んで居るばかり、偖て因の清正公御死去に付ざましては、今日迄其の說が區々に分れて居りまして、或は清正公の御遺言に依り、御死骸へ甲冑を着せ、主閣の上へ上げて腰打ち掛けさせ、矢張り生きて居られる樣にいたして、暫らくは死あれたと云ふ事を秘して居つたと云ふ說もございますが、兎に角御葬送其他二十八將の中でも、飯田角兵衛、木村又藏、森本儀太夫、井上大九郎を始め大半清正公御薨去と共に殉死を遂げ、御跡を慕ふたあぞの事を、詳細に申し述べますと餘程お永く相成りますゆへ御薨去同時の模樣あぞは清正公一代記を讀んで頂く事として、茲には省略いたして置きます、偖でも智勇兼備の眞田左衛門尉幸村も、清正公の御薨去に就いては、兩三日と云ふ者は寢食を忘れて、何うも之ればつかりは、日夜嘆き悲しまれたが、何うも之ればつかりは籌命の事でございますゆへ、如何ある名醫を呼んで來ても致方がない、其處で一日、大木土佐に向ひ幸村「土佐殿、某は今回程悲しかつた事はありません、何んじろ古今の名將清正公の御死去は、大坂方に取つては非常の不利益、百万の味方を失ふたよりも尙ほ清正公一人が大切でござ

申ましたが、既に德川方が大坂に遠慮いたして居るのは、清正公御存命であつたが爲めて、云はゞ大坂の運命は清正公に寄りて繼がれて居つたと申しても、決して過言ではございません、殊に其の臣等一統を見られる事、慈母の赤子に於けるが如く、左ればこそ二十八將の中尤も優れたる清正公股肱の連中は、云ひ合した樣に殉死を遂げ御跡を慕ふあぞと云ふ事は、兎ても見られん古今の美談と申しても耻しからず、不肖幸村も清正公御仁德の厚きには、今更ながら感心いたしました土佐イヤ、御同感でございます、某とても二十八將の一人として、平生御恩顧を蒙むりしもの、他の方々と共に御跡を慕ひ參らせたきは山々でござるが、先君清正公の御遺命もあり、旁々死に勝る悲を忍んで永らへ居ります次第、何卒御推察下されたく存じます「幸村」成程、御尤もなるお言葉お察し申す、就ては某も御臨終の際、特に御遺言ありし事故、一度若殿忠廣公の御前に於いて、加藤家恩

顧の面々を呼び集め、御意見を承はり度存ずるが、何卒其の手筈をお定め下さるまいか「土佐イヤ、委細承知いたしました」と大木土佐は御登城の上、其の手筈に及んで居る、實にや清正公は古今無双の名將にして、忠勇義烈の御方に相違ございません其の証據には當年が丁度清正公御死去あされて、三百年に相當いたします、愛讀讀君は新聞紙上で先刻御承知でもございませうが、肥後熊本に於いて大層なる御祭典がありまして、夫れが爲め日本全國より參拜に出掛ける者、其數數十万人と云ふ素晴しい人氣でございましたが、これを以つて見ても清正公の剛ひと云ふ事が判ります、夫れに比較べると福島正則公あゞは惜しい者で、清正公と互角であつた人物も、其の晩年が善くあつた爲めに、今日では誠に騒いで呉れる者がありません、シテ見ると人は其の平生が大事かの樣に考へられます、殊に我國に於いて武將の落去せしに、其の家來が殉死したと云ふ事は昔

だ稀でございますが、清正公に限つて其の殉死者を夥多出したと云ふも、平素臣下に對して仁惠を施されし事の厚かつたのが思ひ合はされます、イヤ之れは餘談に渉りまして恐れ入ります然るに大木土佐は夫々手筈を定め日を極めて、左れば明日は熊本御城内大廣間に於いて、大評定と云ふ事に相成りました、偖て其の翌日と相成ると、加藤家の老臣勇士を筆頭として士分以上は、何れも早朝より熊本御城内を差して詰掛ける、長田左衛門、幸村も早朝より身仕度充分にいたして、大木土佐同道にて御登城をする、驀て大廣間と相成ると、正面上段には七十有餘万石の御鎧子忠廣公は、悠然と御褥に差座せられ、其左右には加藤家二十八將の生殘り、加藤美作、加藤助之助、加藤傳藏、小關平助、小代下總、堀川忠兵衛、長屋安左衛門、阿波伊兵衛、庄林隼太、出雲田宮内、大脇三郎右衛門、柳原治右衛門、木村吉左衛門、久保田吉藏、太田半左衛門、松下清藏、堤權右衛門、

を始め夥多一家中の面々、傍へには大木土佐を筆頭に老臣勇士の方々、何れも威儀嚴然として居列び、忠廣公に向合つて大廣間中央には、之ぞ真田左衛門尉幸村威風堂々と傍りを拂つて相控へたり、暫くは一座肅然として誰も言葉を發する者もございませんが、驀て大木土佐は徐に口を開き、土佐「列座の方々に申し上げる、本日此の處に御出席を相願ひしは餘の義にあらず先君清正公御臨終の砌り、眞田幸村殿まつた不肖土佐に向つて御遺命ありし事は、列座の方々には御存知の方も多からんと心得る、其の事に付いて今日御協議申し上げ度、依つて幸村殿より先君の御遺言の次第を申し述べらるゝに付き、方々靜肅に御拜聽下されたし」と高聲に述べ立てる……、此の時左衛門尉幸村は、鋭き眼を光らし、心眤ッと列座を見渡して居ましたが、佶と威儀を繕ひ幸村不肖幸村は、加藤家とは何の緣固もなき無祿の浪人でございるが、清正公の遺言を承はり居るが爲に、茲に鳴

呼がましへも御嫡子忠廣公を始め、列座の方々に向つて、其の次第を申し述べるのであります、何れも幸村の申す條に付いて御意見あらば、御腹藏なく申し述べられたい、豫め此の義申し置きます」と前置をいたして先君清正公の遺言と自分の意見とを述べ、結句此處二年を出でずして戰爭が起るが、加藤家は德川に大坂何れへ加擔いたすかと云ふ事を申し出でた、所が此の忠廣公は御父清正公には似給はずして、云はゞ暗君と云つても宜い位の方でありますゆへ、勇氣もあく仁義の志にも乏しく、兎ても大國を領して父の遺業を繼ぐと云ふ事の出來ない御方故、此の加藤家運命の評定に於いても、清正公及び真田幸村等の意見とは反對で、只闇らぬ肺に崇あしと云ふ議論で、德川方へ、遠慮した意見でありました、其處で夥多忠勇義烈の家臣は、隨分激烈ある議論をいたし、各々意見を述べたが性質の暗恐ある上に傲情我慢の御方でありますゆへ、却々忠臣の意見を御用ひ

賜はず、當日の大評定も有耶無耶の有樣で、到底小田原評定を免れません、流石堪忍强き真田左衛門尉幸村も、之は兎も駄目であると、智謀に深き人物丈けに、早くも先の先迄を見越して、最早加藤家も運命永からず、アタラ名將の跡も此處兩三年を出でずして、廢絶の悲運に際會いたすであろうと、晴涙を呑んで其の席を去り、大木土佐の屋敷へ歸り、兎十造猿飛佐助にも此の趣を話し、互に加藤家の前途を嘆き悲しんで居る、處へ差して大木土佐も歸り來り、真田幸村に向つて、土佐「幸村殿に識に御配慮下されし御貴殿に對し、何とも申し上げ樣もあき次第、某も先君清正公の御遺命さへあくば、其の場にて割腹して相果てる積りであれど、先君よりお目鏡を以て後事を托せられし身は夫れも叶はず、實に本日の評定の意苦地あさには、某も愛想も盡き果て、先君葬送の土未だ乾ざるの今日、既ホト〳〵に斯かる眼拔け議論を爲す者あるかと思へば、殘念千万に存じ

ます、幸村「イヤ、御立腹は去る事あがら、之も時よ時節と諦めるより外とざらぬ、然し流石は一粒撰の二十八將の方々、御談論と云ひ御決心と云ひ、天晴お見上げ申した、就ては御貴殿は二十八將の内とは云へ、決して一時の怒りに乘じて、主家を退散あそはいたされぬ、飽迄忠廣公の御先途を見屆ける役目を持つて居らるゝ貴公故、万事を忍んで忠廣公を補佐いたされよ、之れば かりは不肖幸村よりも、男々お頼みをいたす、土佐「ハイ、男子一代の面目、泣くにも泣けず死する事もあらず、何卒某の胸中御推察下されたし」と忠義篤石の如き大木土佐も、ポト〳〵と涙を流して物語る、真田幸村始め筧十造猿飛佐助迄貰ひ泣を いたし、一座暫くは悄然として相見へまする、此の時真田幸村は大木土佐に向ひ、幸村「時に土佐殿、最早斯くなる上は、幸村も永く此の地に留るを潔しといたしませぬゆへ、明日は至急出發と定めました、永々御厄介に相成つたが、何うか後々の處御配

慮を頼み入る土佐「ハイ、承知いたしました、若し徳川大坂兩派戰爭と相成るとも、決して加藤家だけは大木土佐身命を抛つて徳川家へ味方はいたさせません、此の義御安心あつて然るべし」と心好く引受けられる、夫れが爲め加藤忠廣公の御代と相成つて大木土佐の忠義無類なる事は、忠臣の鏡と迄云はれた位で、熊本の本妙寺へ御參詣のお方は御存知でございます、清正公の御靈の右手にある墓は、之ぞ加藤家二代の大忠臣大木土佐の石碑でございます、左れば其の夜は主客互に酒酌み交ばし、夜も更くるも飽へず物語りを重ねて居りましたが、サテ夜が明けると、真田左衛門尉幸村は、之より筑前福岡の城主黑田甲斐守を訪ねんと、大木土佐に見送られて互いに別れを惜みながら、筧十造猿飛佐助を引伴れ、到頭熊本の御城下を出立いたす、サレバ之より真田左衛門尉幸村、筑前福岡の城主御高五十二万石、黑田甲斐守長政公を訪ね、三寸の舌頭を以つて、五十

二万石黒田家を烟に捲くと云ふ、實に佳境に入るのお話し次席に申し上げます……

第五席

偖ても奥田左衛門尉幸村は、賀十藏、猿飛佐助の両人を引伴れ段次と筑前福岡街道の方へ歩つて參りましたが、不圖途中にて思ひ出し幸村「オヽ、両人の者黒田家には後藤又兵衛基次と云ふ隨分名高き家來がある、目下は筑前田隈に於いて三万石を領して居る筈だ、黒田甲斐守長政公に對面をする以前に、其の後藤又兵衛基次を訪ぬる事にいたそう」と夫より途を田隈の方へ取つて出て參り、到頭筑前田隈の御城下へと到着いたし、其處で後藤又兵衛に面會の上、云云斯様〳〵で伺ふたのであると物語をいたす、スルト流石は智勇に秀でし豪傑後藤又兵衛基次深く喜悦び又兵「オヤ、夫れは何うも幸村殿には御苦勞千万に存ずる

某も其の事は常に胸中に思ふて居ります故、御殿長政公に向つても常に、豊臣家の旧恩を忘却いたしては相成らぬと頻りに御辞退申し上ぐると雖も、一つも御用ひ之れあく、返つて近頃は某を疎せられ、敬して遠ざくると云ふ摸様の相見へますので、賊に心外千万に相心得居る次第、然し折格幸村殿の御訪でありますゆへ、某御同道仕り今一應御前に於いて、御切諫を仕りお聞入れあれば夫れでよし、若しも大坂方則ち秀頼公を袖にいさる樣の御意見であれば、三たび諫めて聞かざれば則ち去る、葉も黒田家を退散いたす考へ……ナニ御心配に及びません幸村「成る程、忠臣は兎角に用ひられざるが世の傾ひ、貴公の如き忠勇無双の豪傑も、時に遇はざれば是非のあき者、イヤお察し申す、御承知の肥後熊本加藤家も最早清清正死去された上は、到底永くあるまいと思ひ餘に残念に相心得ます、又兵「フム、清正公はお死去あされたか、夫れは惜むべき名將を失ひました、加藤家が

末のみあらず、清正公死去いたされては、之より家康の古狸は誰に憚かる者もござるまい、秀頼公の御運命もお愁しき事に存ずる」と落涙をいたして嘆息する、思は同じ真田左衛門尉幸村も、暫らく悄然といたして居る、何時迄も坐くてあるべきにあらざれば、又兵衛基次は涙を拭ひ又兵夫では幸村殿、イザ御同道申しませう幸村、然らば、御苦勞ながらお頼み申す」と智將真田左衛門尉幸村は、豪傑後藤又兵衛基次と共に、筑前福岡の御城内さして乘り込み來る、流石は黑田家の懐刀と唄はれたる筑前田隈の城主、三万石後藤又兵衛基次だ、手勢夥多を引伴れ威風堂々として、早くも福岡城へと到着する、福岡城内にては先鋒に寄つて又兵衛基次の登城を承知いたし、夫々準備をして相待つて居る、然るに此の黑田甲斐守長政公と申されるは、前名黑田勘兵衛、後に勘解由と名乘られましたる孝高公の御嫡子でございまして、御父君勘解由孝高公は、豐臣家恩顧の大名で、却

々剛勇拔群にいたして文武兩道に秀でし古今の名將でございましたが、一度豐臣の天下を我者にせんと覬つた位の人物、然るに大閤秀吉に見破られ、其の申譯に剃髮して入道とあり、黑田如水と號しまして、御嫡子長政公に名跡を讓り、自分は歌俳僧と月雪花に風流の道を樂み、相變らず秀吉公のお側に出入いたし、至極お氣に入られた方でございます、然して如水孝高公の寵去ある前、甲斐守長政公をお枕許に召され如水「ヤヨ長政、乃公は最早命の數も永ふはあい、一度は天下を覬つた事もある乃公だが、兎ても世の中は思ふ通りには行かぬ者じや、依つて乃公は如水と名を改め、水の流るゝ如く其の成り行きに任すと云ふ考へで、曉年を送つたが、其方も決して非望を抱ては相成らぬ只々黑田家を安泰にいたす事を心掛けよ、其方の氣象は五十二万石で相當である、決して乃公の言葉を忘るゝな」と御遺言をせられた如水「黑田家の今日あるは後藤又兵衛基次のお蔭である

余死せし後は又兵衛基次を杖柱といたし、万事基次に相談いたすべし」と云はれた且つ後藤又兵衛に對はれては如水「ヤヨ基次余が死せば黒田家は其の方を置いて、他に悴長政を補佐すべき人物はおい、悴長政は人を見るの眼に乏しく、或は其方の氣に入らぬかは知らぬが、氣に入らぬ風もあらうに柳かな」で何事も堪へ忍んで余に忠勤を擢んでた如く、悴長政にも盡して呉れよ、之ばかりが臨終の頼みである」と涙と共に遺命をせられた斯かる先君の御遺命があつたのであるから、長政公の世となつても、又兵衛基次は常に黒田家の榮へん事にのみ心掛け、根が剛直なる又兵衛基次、氣に入らぬ事は主君であろうが誰であろうか、少しも容赦せず面と向つて切諫に及ぶので、珍香も焚かす屁も放らすと云ふ性質の長政公とは、兎角に意見が合はん、依つて近頃は基次を忌み疎んせられる、主君長政公の惡動が斯く多に御登

城もいと怪まんと云ふ風に相成つて居る、然るに今日久敷に基次登城と云ふ觸れを聞いたので、長政公は苦虫を噛み潰した樣な顏をして相控へて居られる、處へ後藤又兵衛基次は、真田左衛門尉幸村をお次の間へ待たせて置いて、自身長政公の御前に伺候いたし又兵「ハヽア、御主君には何時もあがら賜はしき御尊顏を拜し、基次身に取り如何ばかりか恐悦至極に存じ奉つる、

長政「オヽ、又兵衛あるか、登城太儀である、シテ何用あるか、

又兵「ハア、別義はございません日本無双の智將と呼ばれたる真田左衛門尉幸村殿、御主人に御拜顏を得度と有つて次に控へ居ります、一應御目通り仰せ下されたう存じます、長政「フム、真田幸村が參りしとか、余は別段話もないが、參いつたとあれば之れへ通すが宜からう」此の冷淡なる主君の言葉に、剛氣の又兵衛グッと癇に障はり、鋭き兩眼を睨ッと見開き又兵「何時に替らぬ主君の御言葉、夫れが賓客に對する禮でござるか、チ、お

嗜みあされて宜しからう」と他の者が斯様な事でも申したら、夫れこそ大變だが、先君孝高公よりの依托を受けて居る又兵衛基次である故、長政公も眉をひそめ、ツと動かし給ふたが仕方がない、黙つて控へて居られる、基次は次の間へ立つて眞田幸村を召し伴れ、御前へ伺候いたす、此の時眞田左衛門尉幸村は、夫れへ手を支へ、幸村「ハア、長政公には何時に替らせもあく、御健勝にて大慶に存じます、某事は元信州小縣郡上田城主、眞田安房守昌幸の一子、左衛門尉幸村にさいあす長政「オ、珍らしや眞田幸村、聞けば山伏の姿と相成つて諸國漫遊との事、シテ當地へ參りしは如何なる用向あつての事か、何か漫遊中には面白き話でもあらざるや、幸村「イヤ、其の面白き話は數限りもなく、澤山之れあります、現に先刻も御登城をいたす途中にて、兩人の若者が喧嘩をいたし居りました長政「フム、何んで喧嘩をむたし居つた、幸村「左れば、右若者を取り鎮へ相尋ねし處、彼等兩人は當福岡の大閤屋秀助と云ふ者の宅に奉公をいたして居る者でござる、長政「フム、幸村「處が兩人共、大變主人秀助の恩を蒙つて、今では番頭と迄引き擧げられ、何に不足なく暮して居りまして、然るに先年主人秀助死亡致し、一子頼助が後目相續いたせし處、頼助の叔父に心の宜からぬ奴あり、如何にかして頼助の若年なるに乘じ、其の身代を横領せんと、惡計を企み、到頭頼助の身代を横領いたし、返つて頼助を追ひ出し、惡人の叔父は其の家へ乘り込み、我物顔に番頭小僧下女下男を使ひ、却々勢を得て參りました、處が追出された若旦那の頼助は、恐計に掛り今は便寄る人もなく貧しく此の世を暮して居ります、然るに以前恩義を受けし番頭の内一人は、其の惡人なる叔父に加擔いたし、若旦那を顧みずして身の立身榮華をばかり計つて居る、處が一方の番頭は少しく考へのある者と見へ、若旦那の貧苦に困すを見るに忍びず、自分は番頭を止めて、舊主人の恩義

に報いんと、種々艱難辛苦をいたして、密かに若旦那頼助に金銭を貸さ、影あから之を補助して居りし處、丁度今日兩人が途中で出逢ひ、貴様は義理人情を知らぬ奴じやと、好い方の番頭が、惡ひ方の番頭に喧嘩を吹き掛けて居た處でありました、長政フウ、夫れは不埒な奴、其の叔父と云ふ奴は惡むべき曲者である、至急町役人に申付け、左様な者が福岡の城下にあつては、諸人の迷惑であるによつて、以後の見せしめに國外へ放逐して了はねば相成らぬ、又其の好き番頭とかは、甚だ賞すべき者であるに依つて、相當の褒美を取らせ、頼助とかを素の通り其の屋敷へ入れる樣いたして取らせるが宜かろう、誰かある町奉行に申付け、大閤屋頼助の宅を取調べ善惡邪正を裁判いたさせよ」と近侍に申し付けられる、之れを聞いて後藤又兵衛基次はクッ〳〵笑ひ出す、一座志ある者は何れも御主君の眞面目さに呆れて居る、此の時眞田左衛門尉幸村は、一段と膝を乗り出し、片

頬に笑を含みながら幸村「アイヤ、長政公にも只今の幸村がお話しいたしたる、惡き叔父惡き番頭の如き人物があれば、甚だ惡むべき奴とお考へあさるでござろう、長政「云ふ迄もない事、其の叔父まつた番頭の所業は、人情に缺けたる致し方、言語同斷である奴である、幸村「イヤ、能く相判りました、然らば長政公には何故其の惡人の叔父に加擔をして、若主人をお苦しめに相成るか此の義承はりたく存ずる、長政「ナニ、余は左様な事をいたせし覺はない……幸村「イヤ、覺へないとは申されますまい、苟にも五十二万石の御主君が、左様な見安き道理がお判りに相成らんとはナテ〳〵結き入たる次第、今日天下の形勢は如何ある有樣でござるや、まつた御當家は如何ある位置に居られますや、幸村が只今申し上げしは之れ一條の譬へに過ぎず、叔父と申せしは德川家康公に相當り、若旦那は之れ豐臣秀頼公を差して申せし事御當家あぞは番頭の一人ではござらぬや、然らば善き番頭か惡

き番頭か、其處は深く申し述べずとも善くお判りに相成つた事と考へます、篤と御賢慮の程を願はしく存ずる」と理の當然に流石の長政もグッと語り長政「ウム、、、〳〵」と頻りに聆つてゐる、今迄默つて此の場の顚末に耳を傾けて居たる後藤又兵衛はカラ〳〵と打ち笑ひ又兵「アハ、、、、御主君の御返事は如何でござる、日頃基次の申せし事と、今日幸村殿の申されし言葉と相違の點がございまするや、武士は義理と張りに依れば、自分の家を叩き潰しても、一身を犧牲に供してゞも、他迄潔よくいたすが武士たる者の本分ではありませぬか、良樂は口に苦く諫言耳に逆ろうとは好く云つたもの、不肖基次口を酢くして之れ迄に度々お勸めいたすと雖も、只兎や角と申されるのみならず、返つて基次を疎せられ、此の頃は何事に依らず、一つも御相談あくして、氣儘勝手に奸人原に御相談あるばかり、左樣あことで黒田の家が立ち行くとお思召しあるか、先君孝高公の御遺言

は豈夫お忘れには相成りますまい、黒田家の今日あるは故大閤殿下のお引立てに依る處、而して之れを今日迄維持し來りしは大言を吐くに似たれど不肖又兵衛基次のありし爲ではござらぬか、基次の申す條に付いて御返答あらば承はりたい、アイヤ御近侍の方々某の申す處に過言がござるか、只恐悚〳〵と其日を過ごすばかりが能ではありますまい、御主君始め列座の面々御返答に依つては、又兵衛基次存じ寄りがござる、篤と了簡を定めて御返答いたされよ」と櫛の歯荒々しく當り難くぞ相見へる、甲斐守長政公は一体大坂方に味方をする考は毛頭持つてござらん、只事勿れ主義で德川家に服從さへして居れば、黒田の五十二万石に別條はあいと云ふ、極めて穩かな意見でありまして、夫れで時々又兵衛基次とも衝突するのでございますが、今日は第一番に眞田幸村のベテンに掛つて居られるので、又兵衛が斯く無禮の言葉を吐いても怒る譯に相成らん、只火の如く顏を赤

ふ致して、ムウ〳〵と唸つて居られるばかり、左衛門尉幸村は智謀衆に秀でた人物丈け、人の氣を察し人の心を見拔のは却々鋭ひ、此奴は駄目であると思ふたら諦めは早ひもの、今黑田長政公の顏色を眺めて居た幸村はアイヤ、長政公には、番頭の惡ひ方をお好みかさると相見へる、人の大將たる者は表裏反覆の心があつては、到底大將たるの技倆はあきものとしてあります、一度は豐臣の天下を覬はんとせし御父勘兵衛孝高公の技倆とは、天地黑白の相違と申さうか、幸村笑止千万に存じ奉る、斯く申す幸村は父安房守以來、技倆を以つて一度は大名の列に相加はつた事もござる、今日と雖も長政公の如き考へであらば、三十万石や五十万石の大名とあるはイト安き事であるが、夫れを捨てゝ豐臣家に盡す譯は只恩義の二字を重しといたす爲であります、今後に於いて德川豐臣の和睦破れ、スハ戰爭と云ふ場合には、長政公は定めて德川方の爲めに、豐臣家へ敵對あさるでござろう、其の節に假令何十万騎を以つてお攻め寄せに相成るとも、幸村只一人にて美事擊ち敗つてお見せ申さう、左ばとにてお暇申す」と傍若無人に大言を吐き散らし、悠々然として出ていたしたるは、只一人敵地に入りながら、實に大膽不敵なる所業であります、聽て後藤又兵衛基次も、暇乞して御前を退き、幸村と共に田隈城さして立ち歸つて來る、サテ兩人は田隈城に立ち歸るや、又兵衛基次は幸村に向ひ又兵「誠に幸村殿、基次不幸にして斯かる主人を頂き折角遠來の御貴殿に對し、面目次第もありません、某の胸中御推察下されたし」と流石の後藤又兵衛も男泣きに泣いて居る、幸村も其の情を推し計り幸村「イヤ後藤殿、如何に千里を走る駿馬でも、之を見分ける伯樂がなければ駑馬と等しく、其の價値は相判らん、貴殿が一人お焦に相成つても、主君長政公の精神が既に斯かる有樣では、到底貴

公の意へ見も貫徹せず、技倆を延ばすことも出來ません、實に福島と云ひ、揃ひも揃ふて豐臣家恩顧の大大名には、能くも腰拔の多い者である、ア、豐臣家の運命も最早底が見へ透いて居る」と之も落涙に及んで悲み沈む、其處で又兵衛基次は改めて幸村に向ひ又兵「サテ幸村殿、某は遠からず黑田家を退散あし、一先づ浪人をいたし、諸國漫遊の考でござる故、假令何地に、參り居らうとも、腹心の家來郎黨を駈り集め、スワ戰爭と云ふ時には、花々しく大坂へ入城の決心でござりますれば、此の義豫め御承知置き下されたふ存ずる」幸村「イヤ、夫れは有り難き仕合せ、貴公さへ御入城下さらば黑田家を失ふとも、利益とぞあれ結句損には相成りません、且つ不肖幸村と協力して御相談相手とおつて頂くは、貴公の外に誰もございません、此の上あから宜敷豐臣家の爲にお願ひ申す」と智將眞田左衛門尉幸村は、豪勇無双の後藤又兵衛基次と、暫らくは後々の

手段を打ち合し、互いに胸中を語り合ふて居る、而して其の夜は後藤基次の寢處により、眞田幸村、猿飛佐助、筧十造及び後藤家の勇士と共に、一座は心好く酒宴を催ふし、サテ翌日と相成ると、左衛門尉幸村は後藤基次に別れを告げ、筧十造、猿飛佐助を引伴れ、田隈の城下を出立あし、然らば之より薩州鹿兒島へ乘り込み、島津兵庫守殿に對面をいたさんものと、再び肥後地に入り込み、段々と道を急いで漸々慈に肥後三角の湊に出で參いる、此の時幸村は猿飛佐助筧十造に向ひ幸村「時に兩人、今迄は別段難かしい事はあかつたが、薩摩の島津家は、他國人は一人も入れんと云ふ位で、頑固な國柄である故、陸路より乘り込んでは、處々に關所があつて却々入り込む事思ひも依らず依つて乃公は不意に船にて鹿兒島の港へ乘り込み、夫より入國いたさんと心得るが、其方等は如何に思ふや、猿飛「ハイ、御大將のお言葉通り、船にて乘り込むが宜しうございませう、筧、貴

樣は何う思ふ十造「オ、、乃公も御大將のお考へが至極宜かろうと思ふ、御主人然らば三角港より、便船を傭い乗り込みませう」と相談一決いたし、三人は今や三角港の海岸船宿へと出て參るに、然るに彼方海岸の波打ち際に於いて、多數の漁夫が黒山の如く相集まり、口々に罵り叫びあがら、ガヤ〳〵騒いで居ると云ふ必竟之れは何事でございませうや、智將真田左衛門尉幸村が孝子の危難を助け、其の者の手引によりて薩州薩兒島に乗り込み幸村智謀を以つて態と不淨の縛を受け、夫れが爲めに首尾能く島津兵庫守御親子に對面と云ふ、本講談の大眼目、肉躍り血湧き骨鳴るの――御物語りは、一寸一息入れまして、次席に申し上げることにいたします……

第六席

今真田左衛門尉幸村は、猿飛佐助、筧十造の兩人を引伴れ、三

船港の海岸船宿の傍りに參つて見ると、波打ち際の砂原に人が群集おし、互に罵り騒いで居る、此の有樣を眺めた真田幸村は「幸村「佐助、彼れは何事であるか見屆けて參いれ」佐助「ハイ、畏まりました」と猿飛佐助は其の處へ駈け附け、群集を推し分けて眺めて見ると、年頃十五六歳の骨格逞しき小年を、多勢の漁夫が追つ取り圍み、手に手に棒切を以つて、惨々毆り据へて居る然るに件の少年は格別痛そうお顔もせず、眼を冥つて睨つといたして居るから、之を見た佐助は傍への漁夫に向ひ佐助「コレ漁夫、之れは何うしたのであるぞ」スルト件の漁夫は佐助を眺めて訝しそうお顔をいたしながら漁夫「ヤア山伏さん、お前は旅の者で知るまいが、此の小僧は不死身の剛吉と云つて、却々剛太い野郎だ、先頃迄此奴の母親が病氣で居つたが、其の間は誠に神妙に孝行を盡して、村内の評判者であつたのが、母親が死ぬると以前とは身持が悪皆變つて了い、此の頃では人の船を勝手

に漕出して沖へ行く、夫れを喧しく云ふと、小僧あがらも力量があるので、船を砂地へ引摺り揚げて轉覆へす、錨を陸へ擔ぎ揚げると云ふ始末で、翌日は人が十人も十二三人も掛つて、漸々船を波の上へ浮かす、錨を元の通りにすると云ふ銚子で、手に棒にも掛からん奴で、叩いた處で不死身ですから、彼の通り平氣で居ると云ふ有樣、今日は此の村を投げ出して了ふと云ふので、慘々折檻をして居りますが、却々死太ひ奴で皆々往生して居るのです」と話すのを聞いた猿飛佐助は、中へ進み寄り、殴つて居る漁夫共を推し退け、佐助「コリヤ漁夫共、左樣お手荒い事をいたすお、先づ暫らく待て」スルト漁夫共は、

漁夫「イヤ〳〵、山伏等の出る幕じやない、俺等の村内の者を俺等で折檻するに遠慮が入るかい、恐圖〳〵云はずと龜首んで居やアがれ、今日と云ふ今日は勘辨出來ないのだ」と夥多の漁夫は佐助の言葉を聞入れず、理不盡にも佐助を突き退け、益々件の

少年を打ん殴る、此の有樣に佐助は憤といたし佐助「コリヤ、山伏であらうが何であらうが、待てと云つたら待たぬか、某に向つて突き飛ばすとは何うだ、無禮をいたすと承知しないぞッ」此の言葉に夥多の漁夫は赫ッと急き込み漁夫「ナ、何んだ、外から來やアがつて承知しねいもないもだんだッン山伏から遣つ付けて了へ」と木切れ棒切れを打ち振りあがら猿飛佐助に打つて掛かる、此方佐助も大いに怒り、携へたる金剛杖を持つて、當るに任せて打ち据へて居る、然るに先刻より船宿にあつて、佐助の歸りを待つて居た眞田幸村と筧十造の兩人は、餘り佐助の戻りが遲いので幸村「十造、佐助は何うしたんだろう、行つて見て來い十造「ヘイ合點」と十造は件の場所へ駈け附けて見ると、猿飛佐助が多勢を相手として喧嘩をいたして居るから、十造は聲鋭く十造「オイ、猿飛何うしたんだ、漁夫原を相手にして大人氣ないではないか」佐助は殴り付けあがら佐助「オ、筧か、實は

云々斯様〳〵、此奴等が無禮だから懲して居るんだ」之を聞いた十造も怒り出し、十造「フム左様か、ヨシ乃公も懲して遣ろう」と又も金剛杖を振り廻し、荒れ出した、此の騒動を聞き附けて、漁夫は益々群集り來り、兩人を追取り圍んで騒いで居る、眞田幸村は兩人共戻つて來んので、不審に思ひながら其の處へ來たつて見ると、右の有様であるゆへ、大喝一聲、幸村「コラ、佐助十造、貴様等は何うした者じや、控へ居らぬか」と鶴の一聲に佐助十造は夥多の奴を引外して、御大將の傍へ來る、相手の漁夫共も二人に持て餘して居た處へ、又も大兵肥滿の山伏が來たので、黙いて居た處が、右の始末であるゆへ、別に打つて掛ろうともせず、口々に罵りながら騒いで居る、此の時幸村は佐助十造に向ひ、幸村「コレ兩人、無智文盲の漁夫原を相手として、何んと云ふ事をいたす、馬鹿者奴がッ、佐助「ハイ、實は云〳〵斯様〳〵、私で、餘り無法と心得まして、已を得ず懲して居りました十造私

も佐助に加勢をいたして居たのでございます、幸村「フム左様か、然らば控へて居れい」と幸村は漁夫の方に向ひ、幸村「コレ漁夫共、話を聞けば其方等も宜敷かい、善惡を聞き闘さず、亂暴をするとは不都合である、以後氣を附けるがよい」スルト漁夫の中より重立つた者が夫れへ出て參り、頭を掻きながら漁夫「ヘイ、之れは山伏さんの大將ですかい、何うも漁夫の奴等も惡るふございました、俺ば漁夫の惣代をして居る大藏と申す者ですが、今此の騒動を聞まして、駆け附けて來た處なので……ヘイ何か御勘辨あさつて下さいませ、幸村「イヤ、勘辨も何も、左様な事は何うでも宜いが、然し其の少年を村より逐ひ出すと云ふ事から、乃公に呉れぬか、乃公が一つ弟子にして養ふて遣ろと思ふが何うじや、大藏「ヘエ、〳〵、貴公が貰ふて下さる……夫れは願ふても有い幸福でございます、此の餓鬼は村内の持て餘し者ですから何うか伴れて行つて下さいませ、ヤイ剛吉俺りやア、此の山伏

さんに貰はれて行け、村に居るより幸福だい」之れを聞いた少年不死身の剛吉は、仕めず臆せず、眞田幸村の前へ出て參り、

剛吉「ヘイ山伏さん、吾儕ア此樣な譯の判らん村に居るのは、極嫌いでございます、何うか何處へでもお供をいたしますゆへ、伴れて行つて下さいませ

幸村「オヽ、汝は少年に似合はず、却々確りいたして居る奴だ、ヨシ乃公が伴れて行つて遣る」と、幸村は独夫全体にと云ふて、金子を十兩取り出して酒代にやり、到頭少年剛吉を貰ひ受け、一反船宿へ立ち歸り、サテ便船を求めて鹿兒島へ渡航いたさんと、色々船宿の主人等に尋ねるが、鹿兒島へは便船がない、又特別に備ふと云つても金を何程出そうと云つても、鹿兒島と聞いたばかりで、漁夫共は誰も行き手がない、其處で流石の幸村も仕方がないから、其夜は船宿へ一泊いたし、緩々相談をいたし方向を定めると云ふ事にいたしました、

疲て夕食も濟ましし、一室の内に幸村始め佐助十遣まつた

少年剛吉も片邊に控へて居る、此の時幸村は少年剛吉に向ひ、

幸村「コレ剛吉、其の方は先刻申せし通り、武士にありたければ乃公が立派なものにいたして遣るが何うじや

剛吉「ハイ、何うぞお願ひ申します

幸村「フム、承知いたした、其方は此の村には親族とか身寄りはないか

剛吉「ヘイ先頃阿母アが死にまして、今は只一人で親類あそはございません

幸村「左樣か、結句其の方が都合がよい、實は乃公は眞田幸村と云ふ者で、之より薩摩國へ入り込ぶと思ふて此處迄歩つて來た者である」此れを聞いて少年は夫れへ手を支へ

剛吉「ヘエ、、、夫では貴公樣が此の邊に迄噂のある、眞田幸村樣と仰つしやる方でございますか、夫では何うぞお引立を願ひます

幸村オヽヨシ〳〵、シテ其方に聞くが何とかいたして、鹿兒島の湊へ乘り込む工風はないか

剛吉「ヘエ、行くに行けん事もございますまいが、何んしろ薩摩と云ふ國は、他國の者は決して入れんと云ふ難しい國でございまして若し湊へ

でも船を附けやう者あら、船も生命も取られて了いますので、夫れで皆怖がつて行きません幸村、成程、尤お話ではあるが、實は夫れで困つて居るのだ」と流石智謀に掛けては、我が朝に双ぶ者あじと云ふ位の眞田左衛門尉幸村も、之には、ホト〳〵困却をして居られる、此の体を見て少年剛吉は剛吉「御主人様私も貴公の家來にあつた上は、何か一つの手柄を現したいと思います依つて此の三角から鹿兒島灣迄は、隨分遠ふございますが、一つ私が船を漕いで、根限り遣つて見ませう幸村ナニ、其方が漕ぐ事が出來るか剛吉ハイ、出來ても出來んでも、乾度遣つてお目に掛けます幸村「フム、却々剛ひ事を云ふ頼もしい少年だ、見れば力量も大厄ありそうあ、コレ佐助十造、其方此の少年の力量を試して見よ十造「ヘイ心得ました」と推し、棒推し、座相撲を遣つたが、十造も佐助も苦もなく打ち負かされた、之を見て幸村は驚き且つ喜悦び幸村「佐助十造、何うも少年に似合はぬ

力量があるでないか」兩人「ヘイ、實に驚きました、我々は力量では到底敵いません」スルト剛吉は剛吉「ヘイ御主人様、其上私は不死身でございまして、叩いたつて敲つたつて痛くはありません、又少し位は斬られたつて、放つて置けば直ぐ癒へて了います幸村「フム、イヤ何うも妙な便利な身体もあるものである夫れから鹿兒島へ迄漕げるであらう、デは左様いたそう、然し船は何う出する剛吉「船は濱にあるのを一艘借りませう幸村「貸して呉れるか剛吉「イエ、駄つて借りますので……幸村「ナニ、黙つて借るッ、夫では盗む様な者でないか剛吉「左様です、云ふたら誰も貸す氣遣はございません、天下の大事には換へられませんから、駄つて借ることにして、後で歸せば差支ございますまい、

幸村「フム、却々面白い事を云ふ奴だ、シテ何時船を出すのだ、

剛吉「ヘエ、善は急げで今夜船を出しませう幸村「イヤ、此奴益々活潑極まる少年である、ヨシ然らば左様いたそう」と如何なる

大山が崩れ來るとも動かんと云ふ幸村も、此の少年の擧動には悉く感心いたし、佐助十造三人共々大層喜悅んで居る、偖ても幸村は件の少年に猿飛佐助を附けて濱邊迄歩り、適當なる船を撰び出し、充分用意をさせて置いて、密かに夜の更けるのを相待つて居るや、何うやら方今の十二時頃の刻限と相成つた、四方は森々として泊り客は、處々に鼾の聲をさせて前後も知らず寢入つて居る、身仕度万端を整へて居た眞田幸村は、一兩の金を取り出して紙に包み、宿屋の亭主へとして、床の間に置き、四人密かに船宿を忍び出で、濱邊へ差して出で參いり、見定めて置いた船にと乘り移り、纜られては一大事と皆々聲を密め、到頭船を一艘無段借用に及んだ、眞夜中頃三角の港を船出おし、鹿兒島灣の方向へと漕ぎ出した、御大將の幸村始め、寃十藏、猿飛佐助は船の事は甚だ不得手であるから、万事を少年剛吉に任せて、其の大膽不敵なる所業を見て、三人共或は感じ又は呆れて居る、艦で港を出ると順風に帆を卷き揚げ、船は矢を射るより早く波を蹴立て走り出した、其處で猿飛佐助は船中隅々迄捜して見ると、米が二俵ばかり其他鹽味噌醤油と、食事に必要な品物は皆備はつてある、殊に夜具も薄いのが三四枚あるので、之から鹿兒島へ乘り込む迄は餓死する氣遣はないと、皆大喜悅び、少年剛吉は順風の時は只梶を掴みながら鼻唄交りに、艦に控へて居るが、風が無くなると一生懸命に櫓を漕ぎ、イトモ神妙に働いて居る、艦て鹿兒島領分の海とかゝると、成べく登は船を島蔭に潜めて人目を避け、夜に入ると漕ぎ出し帆を揚げると云ふ風にいたして、海上何の變りし事もなく、日數を重ねて漸々登に鹿兒島灣の近く櫻島の傍りへと漕ぎ附けて來た此處に於いて眞田幸村は、島蔭に船を附けさせ、皆を一處に呼び集め幸村「サテ、何うやら目的の地へ到着をいたしたが、之からが隨分難かしい處だ、今夜此の處を出帆して、眞夜中に鹿兒

島の港海岸に船を着け、不意に上陸せねば、若しも船役人に見附けられては大騒である、密かに天文を見るに今夜は風が出て雨も大いに降り暴風雨と相成るに相違あいゆへ、其の嵐に乗じて上陸する事にいたそう、剛吉貴様御苦労であるが左様いたして呉れ、剛吉へイ、畏まりました、何に夫れ位お事朝飯前の仕事です、三角に居た頃は不死身の剛吉、龍神の剛吉と云はれた位ですから、大丈夫でありますず御安心あさいませ　幸村「オ、其方の活潑な氣分には誠に感心いたした、就ては云ふて置くが、余は之より佐助に十造を、引伴れ、鹿児島へ乗り込む故、其方は我々三人が上陸したらば、直ちに船を漕ぎ出して、此の船を三角の港へ密かに返して置いて、夫より紀州は高野山の麓九度村に、余の枠太助幸安が居る故、其處へ行つて余の歸りを相待つて居れ、其處へ行けば其方等の朋友も澤山居る、又盡は書物を習ひ夜は武術を稽古いたすが宜かろう、決して不心得お事をいたすでないぞ剛吉「ハイ、色々御心配を備へます、お引立によりまして屹と立派お武士にあつて見せます」と潔よく返答する、幸村「夫では、不死身の剛吉では甚だ悪ひ姓名である、一つ改めて其方の出生地を名乗り、三角剛吉といたせ剛吉「ハイ、有り難ふございます　幸村「尚ほ、大助行安に宛て手紙を書いて遣はす故、之を持つて行け」と御大將幸村は、用意の墨壺白紙を取り出し、一書を認めて之を三角剛吉に渡し、且つ金子二十兩を取り出し幸村「此の金子二十兩は、其の方の旅費として與へる、必らず途中恐悦いたさず、急いで行くが宜かろう　剛吉「ハイ、何から何迄御心添に預り、誠に御恩は忘れはいたしませぬ」と打ち喜悦んで居る、此の三角剛吉は後年難波兩度の戰爭に於いて、真田幸村の家武者と相成つて、始終忠勤を盡し、比類なき働をいたし、敵軍の目を驚かす事數知れず、遂に大助幸安に從ひ、秀頼公の御供をいたし、薩摩へ落ちるのでございます、偖ても左術

門財幸村は、万事の手筈を相定め、出船の時刻を相待つて居る、然るに其日も何あく暮れて、彼是亥の刻方今の午後十時頃に相成ると、俄かに吹き出す大嵐、雨も交つて降つて來た、十造佐助及び剛吉は、幸村の云ひし事め間違あきを感じ入り、夫々出帆の準備に忙がしく、剛吉は眞裸と相成り、腹巻をグッと引締め、手紙と金子二十兩とを腹巻の中へ巻き込み、斯ふして置けば大丈夫であると、艫に飛び出で帆を半分ばかり捲き揚げ、梶を掴んで吹き降りの眞只中に突つ立ち、大波小波の荒れに荒れて、白馬の崩けるが如き中を事ともせず、怒濤を犯しあがら、闇に透して行手を見張りつゝ、漸々鹿兒島港の海岸へと到着した、時刻は何んしろ丑滿頃、船番所の見張役人は、何れも暴風雨に安心いたし、氣を詳して寢入つて居るのを幸ひと左衛門財幸村、覓十造、獄飛佐助の三人は陸へと飛び上る、其處で幸村は剛吉に向ひ幸村「コレ剛吉、最早此處にて

相別れるであろう、某が云ひ付けたる如く、三角へ其船を返して置いて、夫より陸路紀州へ參り、我子大助幸安の許へ尋ねて行き、余の歸りを相待ち居れ、決して不心得をいたしては相成らぬ、氣を附けて行けよ剛吉「ハイ、夫では御主人樣、之にて暇申し上ます、隨分御健勝で早くお歸國の程を相待ちます、獄飛樣、覓樣お去らばであります」と云ふより早く棹を以つて陸地を推せば、船は沖合へと浮び出した、眞田幸村始め兩人は、剛吉の船の見へずなるを見定めて置いて、之から安心と密かに船番所を通り抜け、段々町内へ入り込み、今や曲り角を曲らんとする出抱頭に、流石は取締嚴重ある島津藩の夜廻役人、一人の頭立つたる役人は、鐵棒をガランと引摺りながら、五七人の下役を隨へ、此の吹き降りを事ともせず、嚴燈片手に此方へ歩つて來たつたのと、セタリと出遇つた、餘り風雨が激しいので鐵棒の引摺る音も聞へませんだと見へ、流石の幸村もギ

ヨッといたし、三人一度に足を留めて其處へ突つ立つた、彼方の見廻役人も不意の事として大きに驚き、之れ又足を留めて、提燈の光りで、幸村等三人を照しながら怒りの聲鋭く、役人「ヤイ、汝等は旅の者と相見へるが、此の取締り嚴重ある座兒島御城下へ何處から入り込んだのだ」其處で一寸お斷りを申して置きますが、薩摩の言葉は却々判り悪ひ故、一々薩摩辨で演じますと、何うも聞取り難い處が多ございますから、玉秀齋は矢張普通一般の言葉で辯じて置きますに依つて、其の積りでお聞取りを願います、此の時幸村は慇懃に口を開き、幸村「コレハ、お役人衆に、我々は山伏修行の者で、先刻船にて御當地に着し、此處迄參つたとあ、汝等も大抵承知之より一應何處かへ宿を取らんと存じ、此處迄參つたのでござる、役人「オヽ、船にて參つたとあ、汝等も大抵承知いたして居るのであらう當島津藩の領内へは、他國人は斷じて入れぬと云ふ規則である、若し他國より入り來つたる者は、

生命を取るのが定法である、サア汝等も町奉行所へ引立て、身許取り調べの上死罪に行ふ間、鬼や角申さず縛に附けい、幸村「アヤ、暫らくお待ち下され、紐に附かずとも町奉行所へは御同伴いたそう、役人「イヤ成らぬ、此の國に入つては此の國の掟てに從ふが當然である、愚圖〳〵吐さず神妙にいたせい」と理不盡にも不淨の繩を掛けんとする、此の時迄幸村の背後に控へし冤士造は、此の体を見て大きに怒り、突然夫れへ飛び出し、十造「ヤヤ不埒千万ある夜廻番太郎奴、辱くも御大將に向つて不淨の繩を掛んとは何事ぞッ、無禮いたすあ」と云ふより早く件の役人の腕首引掴み、手許へ引寄せ肩にと擔ぎ、頭頭倒と投げ附けたり、之れを眺めた殘りの役人は、狼藉者召し捕つて了へ」と前後左右より打つて掛る奴を、十造「エイ、猪虎才さらすあ」と呼く間に五人迄其の處へ叩き附けた、今一人の下役人は、下役「コリヤ敵はぬ、イデお役所へ注進して、酷い目に合して呉

れるから待つて居れ」と捨言葉を殘しながら、一目散に逃げ出した、後に幸村は兩人に向ひ幸村「兩人共、決して彼等の生命を取るでない、今又此處へ多勢の役人が參る故、其奴を追ひ散し、其の後へ來る奴は少し重立つた人物であろうと考へるに依つて之を少々惱まして置き、其の上にて尋常に縛を受け、夫より後は此幸村の胸中にあるから、其方共は余の爲る通りにして居れば差支あい、決して手荒くいたすま」と語合ふて居る處へ向ふより彼是四五十人ばかり、逃散に驚け附け來り役人「ヤア〳〵狼藉者縛を受けよ、只今注進により町奉行所の役人差し向ふたり、尋常に縄に掛れい」と三人を追つ取り圍んで打ち込み來る此處暫らくは互に入り亂れて、騒動を追つて居ましたが、又も三人の爲めに、惨々な目に遇され、皆々這々の体で左往右往に亂散する、三人は其處に悲ひながら、今度は何うゆふ奴が來るかと相待つて居ると、既に風も收まり雨も止み夜に白々と明け

て來た、待つ間程なく騎馬武者約そ三十騎ばかり、驀進に此方を差して駈け附けて來る樣と相見へたり、此の有樣を見たる眞田左衛門尉幸村は、莞爾と打ち笑ひ幸村「ソレ兩人、此奴を少々惱まして置いて、其の上で縛を受けるのである」と云いつゝ相待つて居ると、駈け附け來つたる彼方の同勢、中にも重立つた一人は夫れへ進み出で役人「ヤア〳〵三人の狼藉者、汝等は敵國の間者に相違あるまい、音に名高き島津家鐵騎組の副將、島津樓六郎相向ふたり、神妙にいたせ、ソレ方々」と副將の號令に其他の面々、馬を縱横に乘り入れ、三人を中央に取り捲いて擊つて掛る、三人は兼て期したる事あれば、彼方此方に身を躱しながら、近附く奴を一々猿臂を延ばして、馬よりスル〳〵と引摺り落して廻る、瞬く間に十五七人と云ふ者、其の處へ引き落され、或は氣絶する平倒ばる、馬は主を失ふてピン〳〵跳ねて狂ふの大混雜、時しもあれや遙かの方より馬に鞭打ち、疾風の

如く驅け付け來つたる、服裝立派な武士一人、近寄る儘に大音聲を張り揚げ「武士ヤア〳〵何奴あるぞ鹿兒島の御城下とも憚らず、狼藉いたす不所存者奴、島津家の武大將たる新納民部一重が立ち向ふたり、双方共靜まれ〳〵」と、叫びあがら此の處へ乘り込んで來る、サア之より眞田左衛門尉幸村と新納民部一重との大論判より遂に日向大隅薩摩三ケ國の大守、島津兵庫守御親子に對面と云ふ一條は、一寸休憩の上、次席に於いて講演いたします……

第七席

新納民部一重と名乘るを聞くや、眞田左衛門尉幸村は、新納民部一重と名乘るを聞くや、寛十造、猿飛佐助の兩人を制しあがら幸村「アイヤ、我々は決して狼藉をいたす者にあらず、實は云云斯樣〳〵餘り故おくして狼藉をいたす者にあらず、實は云云斯樣〳〵餘り迎不靈を致方と存じ、是非あくお手向ひ申せし次第、島津家名

聞の新納民部一重殿の御乘り込とあれば、最早お手向は仕らん」と三人共神妙に其の處へ相控へる

イザ尋常に細を聽けられよ」

新納民部一重は之れを聞いて新納「フム、潔よき覺悟である」と三人共に高手小手に縛めて置いて新納「コリヤ、汝は何れの者にて名は何と申す、定めて山伏に姿を變じ、島津家の模樣を窺いに來たつたる、他國よりの間諜に相違あるまい、眞直に申し立てよ、幸村「ハイ、人を取り調ふるは其の場所あり、路傍に於いて左樣な事お尋ねあるは、新納民部一重の御所置とも覺へず、近頃笑止千万に存ずる」スルト流石は新納民部一重だ、新納「イヤ、之れは某が惡かつた、然らば役所に於いて取調ふる間、力々此の者を城内へお引立て下さい」と到頭新納民部一重は幸村、十造、佐助の三人を引立てさせ、鶴丸城へと立ち歸つて來る、サテ此の新納民部と云ふ人は到つて豪勇に仁義の志し厚き武士で先年大閤秀吉島津家征伐の砌り、加藤清正の爲に討ち取られた

る、島津家第一の豪傑鬼新納武蔵守の嫡子であります、今日幸村外二人を捕縛いたし、普通であらば町奉行所へ引渡すのが定法でありますが、流石は新納民部一重だ、幸村の人品骨柄を眺めて、此は尋常の人物にあらずと見抜いたるからして、罪人を扱ふ如くして町奉行所へ引渡すは禮にあらずと、自身が御城内侍大將の控處へ引伴れ來たつたのでございます、偖も眞田左衛門尉幸村は、猿飛佐助、筧十造と共に、新納民部一重に從ひまして、鶴丸城内侍大將の詰所へと引立てられ、暫らく其の處にて相待つて居ると、廳て立ち出たる、新納民部は、言葉穏かに

新納「其方共は、何れの者にて姓名は何と申す者である、定めて當國の内幕を探らん爲め、山伏の姿と相成り入り込み來たつたる、敵國の間者に相違あるまい、眞直に包み隠さず申し立てよ」

此の時幸村も慇懃に言葉を攝へ幸村「アイヤ、其のお疑は一應御尤の樣なれど、我々は決して敵國の間者にあらず、則ち眞田左衛門尉幸村にてござる」之を聞いて新納民部一重はカラ〳〵と打ち笑ひ、新納「コリャ、偽りを申すな、成程人品骨柄尋常の者にあらずとは思ひ居れど、眞田左衛門尉幸村あるべきは事可笑しや誠に眞田幸村ならば斯く安々と召し捕らるゝ筈はない、苟にも元は信州小縣郡上田の城主にして、父祖三代智勇兼備の名將と唄はれた家柄である、然るに汝は間諜の罪を免れん爲め、幸村であるなぞと偽名を騙る不敵の曲者、早く神妙に白狀に及べ」

と權柄推しに叱り付ける、此の時眞田幸村は幸村「此は心得難き御一言、某は名を偽つて罪科を逃れんとする如き卑怯ある者にあらず、得と御賢察下されたし」新納「フム、眞實其の方が眞田左衛門尉幸村ならば、某が申す條一々返答いたすや如何に」幸村「ハイ、如何なるお尋かは知らねども、某存知居る事は一々御返答仕る」新納「フム、能くぞ申したり、左らば相尋ねるが、我朝に於いて軍略兵法の聖と云つべき古今の英雄は、ソモ誰を指すべき

や「幸村」サン候、某の見る處では甲州の守護職武田大膳太夫晴信入道信玄、きつた越後の國春日山の城主上杉輝虎入道謙信、之れ等兩將を軍學兵法の聖と稱するも差支なしと相信じ候「新納」フム、シテ今日の世の中にては……

「幸村」今日天下の人物を見渡すに、皆己れの慾に迷ひ節義兩全の名將ありとも覺へず、只惜むべきは肥後熊本城主、如藤肥後守清正公に之れあり、申す迄も何はあれど故大閤秀吉公は、當島津家に備ふる爲め、饒勇無双の名將清正公を、隣國肥後に封ぜられし次第、清正公死去あり し以上は、他に之れに優る人物おきを遺憾に存じ候「新納」成程、然らば自下天下の形勢は如何「幸村」左れば、今日の形勢は申す迄もなく、徳川の天下と相成り居り候、然して之れは今日に始まるしにあらず、慶長五年關ヶ原の戰爭は、之れ天下分目の大戰爭にして、此の戰こそ徳川の天下とある前兆に之れあり候「新納」フム、偖ては愈々御貴公は、眞田左衛門尉幸村殿にて候か

「幸村」如何にも左樣「新納」之れは失禮を仕つた、天下の名將に繩を掛くるとは恐縮の次第」と新納民部一重自ら起つて、眞田幸村始め、千造佐助の縛を解き、夫より別室に案内をして、イト丁寧に侍遇する、「幸村」も漸く安堵いたし、改めて新納民部一重に向ひ「幸村」時に新納殿、某今回山伏姿と相成り、諸國漫遊いたすは深き仔細あつての事、實は秘密でござるが、云云斯樣〳〵、依つて各地大名の擧動を探る爲め、且つは御當家島津兵庫守樣に折入つて幸村一生の御依頼あり、夫れが爲め態々警戒殿重なる御當國へ乘り込み參つた次第、何卒武士の情、貴殿の御盡力を以て御城主兵庫守樣に御拜謁いたす樣、御取計ひは下さるまいか「新納」成程、お話を承はり諒に御尤千万に存ずる、某とても豐臣秀頼公の御身の上を思ふ度に、密に涙を催す事屢々、旁々幸村公の御精忠の程、感するに餘りあり、イヤ宜敷ござる、屹度不肖民部一重が一身に替へ、我君樣に御對面いたされる樣取り

計らひませう、御安心あつて然るべし」と心好く承知の旨を答へ、夫より新納民部一重は御殿兵庫守様の御前に出仕いたし、新納「ハヽア、我君様には既はしき御尊顔を拜し奉り、恐悦至極に存じ奉ります」兵庫「オヽ、新納民部あるか、出仕大義である、新納「ハヽア、我君様に一つのお願ひがございます」兵庫「フム、願とは如何ある義である」新納「ハヽア、別儀でもございませぬ今回當國へ元信州小縣郡上田の城主、眞田安房守昌幸の一子同苦左衛門尉幸村能り越し、是非其御殿様にお目通りの義を願ひ居ります るが、如何取り計らひませうや」兵庫「ナニ、今日本に於いて智將と呼ばれし、眞田左衛門尉幸村が參りしとか、他國人の斷じて入る事あらぬ當國へ如何ある手段で參りしや、事と場合に依つては、眞田幸村とて容赦はいたさぬ、是非其國法に行はねば相成らぬ、速に其の次第を申し立てよ」と御城主兵庫守様は、顔色を變じ威丈高となつて御激怒あらせられる、此の時新納民部

一瞬は、神色自若として夫れへ手を支へ新納「ハヽナ、我君様の御立腹は一應御尤には候へども、之には深き仔細のある事にございます、兵庫「ヤア、假令如何ある仔細ありと雖も、二百年來連綿と打ち續きし、祖先よりの國法は破る事能り成らぬ、殊に眞田幸村如き智謀に秀でし者が參りあば、今後に於いて如何様の手段を用ひ、我國を覗ふやも計り難し、早く仔細を物語れッ」と一徹短慮の兵庫守、却々御立腹が激しい、其處で新納民部は益々落付拂ひ新納「イヤ、其の仔細と申しまするは、實は云云斯様〳〵、如何に國法とは云へ、斯かる仁義に厚く忠勇に秀でし人物を國法に行ふたとあつては、若しも此の事が他國に聞へては、御城主の御威權に拘はる道理、篤と御賢諒の程を偏へに希ひ奉つる」と赤心面に表はれて言上する、御城主も其の仔細をお聞にあり、暫らく思案をいたして居られましたが兵庫「フム、其の仔細を聞くと、滿更ら無理強いも出來まい、然らば一應目通り

計すに依り、至急召し伴れ參いれ新納「ハア、速かにお聞入れ下され、有り難く存じ奉つる」と民部一重は御前を退き、間もなく左衛門尉幸村を判れて、兵庫守樣の御前へ伺候する、幸村は新納民部の計らいにて社祢を着用あし、禮儀正しく遙か下手に平伏する、此の時島津兵庫守義弘公は、御聲鋭く兵庫「ヤヨ、夫れに控へしは今我朝に於いて、智勇兼備の名將と云はれたる、眞田左衛門尉幸村かるや幸村「ハ、ナ、兵庫守樣には初めて御面調を仕ります、不肖某は眞田左衛門尉幸村にございます兵庫「フム、其の幸村ともあるべき者が思慮分別もなく、國禁を犯して我國に入り込むとは抑も何事である、返答の次第に依つては、眞田幸村とは云はさぬぞッ」之れを聞いたる眞田幸村は、驚いて恐縮するかと思ひの外、悠然と頭を擡げ、片頬に笑を含みあから幸村「コハ、心得難き御一言を承はる者かな、必竟國禁と云ひ國法と云はれるは、天下の國法にあらずして、島津家に於い

てお定め相成つたる、御當家の國法に過ぎますまい、左すれば取りも直さず之れ私法にして、日本全國に通用する法則ではございません、不肖幸村は無祿の浪人ありと雖も、今日本全体の爲めに寢食を忘れて奔走いたし居ります、島津家に於いてお定めに相成つたる私法に就ては、幸村毛頭存知申さず、まつた幸村は自分の立身出世を計り、一身の榮華を得たい爲めに、危險を犯して迄も、御當家をお訪ねいたしたのではございません、御賢明ある兵庫守樣には、此の義御賢察の程、伏して希ひ奉つる」と辨舌爽かに、怯めず臆せず、立板に水を流すが如く、少しの淀みもなく悠々寛々として述べ立てる、先刻より此の始終の辨舌に耳を傾けて居られましたる、兵庫守義弘公は、之も怒られるかと思ひの多、礑と膝を叩き兵庫「ウム、流石は眞田幸村である、余が面を犯して能くぞ申した、其方の申す處我が意を得たり、今回當地へ來たりし用向、何にても申し述べよ、兵庫

宇喜多弘乾度聽屆けて得さすぞよ」と到頭幸村に惚れ込んで了は、れた、此の御懇篤ある御言葉に、左衛門尉幸村は返つて涙を催ほし幸村ハ、ア、不肖幸村の言葉を御怒らせもなく、返つて御嘉納あらせらる、幸村身に取り如何ばかりか恐悦至極に存じ奉つる、申す迄も御座あく候へども、今天下泰平に治まり居ると雖も、此處二年を出でずして再び德川豐臣兩家の爭起り、結句各地大名は勢に付き、德川方に加勢する者十中八九に之れあり殘り二分は豐臣恩顧の大名にして、關東關西双方へ義理を立て戰爭に馳せ加はらず、左すれば御愁しや豐臣秀頼公には、全たく孤立の勢とあられ、大阪城へ天下の大軍を引受けての大戰爭遁りは利あらず大阪落城と相成るは火を見るよりも明かなる次第も存じます兵庫「フム、シテ其の後は何うじゃ幸村「左ればにて候、木肖幸村國法を犯して迄、御當國へ乘り込みし其の存細は、全く其の後の御依頼をいたしたき爲めにて候、必竟するに大阪落

城と相成れば、秀頼公は御討死と云ふ事は、深く申す迄もございませぬが、誠に夫れが殘念至極と存じ、不肖幸村の考ふる處によれば、其の場合に秀頼公を討死と見せ掛け、一端大阪を落し參らせ、當島津家へお隠匿の程を願はしく、依つて身命を抛つて、遥々推參いたしたる儀にございます、憚れ兵庫守樣には、秀頼公の御身の上まつた豐臣家の末路、及び不肖幸村の胸中御推察の上、否やの御返答に預り度存じ奉る」と言葉さへも、溢り勝ちに涙を流しながら、イト熱心に物語る、之れを聞かれた兵庫守樣は、一時は御驚きの御容子でありましたが、聽て口を開かれ兵庫「成程、聞けば誠に氣の毒千万、シテ秀頼公をお隠匿申して其の後は何うするのじゃ幸村「ハア、其後は申す迄もなく、秀頼公御薨命全たければ、機を見て再度の旗擧をいたす考へ候、また其の内には德川家康公も此の世を去られるに相違ありません、左すれば德川の天下は恐るゝに足る者之れ無く、

何卒此の義御高察の上、宜敷御依頼申し奉つる」と事も細やかに末の末迄を見透して懇願に及ぶ、兵庫守様も悉く御感心遊ばされ兵庫「成程、見上げたる眞田左衛門尉幸村、聞きしに勝る義心鐵石の如き人物である、其身は十万二十万石の大名とあるは、イト易く、徳川方より高祿を以つてお招きに相成るを退け、天下寄り處あき豊臣家の爲めに盡すとは、誠に感ずるの餘りあり、余も屹度引受けた、一諾は千金よりは重し、幸村安心をいたして宜かろう」と心好く御承知下される、日頃物に動せぬ左衛門尉幸村も、天に歡び地に喜悅び、未だ豊臣家の武運盡きざる處であると、頻りに御禮を申し上げる、夫より若殿様にも御拜顔をいたし、之も兵庫守様同様御依頼を申し上げ置き、其處で幸村は兵庫守様御親子より、御杯を頂戴いたし、大いに面目を施して、一先づ新納民部一ツ重の屋敷へと立ち歸つて來る、而して途ずがら猿飛佐助、冤十造兩人にも御前の首尾を聞かせ、

主従互に打ち喜悅び居りまする、偖て此處にて五六日滯在いたし、新納民部とも万事後々の打合せを定めて、最早や心殘りはないと云ふので、左らば當地を發足いたそうと再び島津兵庫守様御親子にも御拜謁の上、吳々も御依頼申して置いて、御暇乞を告げ、新納民部の取り計らいを以つて、陸路を行けば事面倒であると云ふので、島津家の船に乘り人目を忍んで、到頭鹿兒島の港を出帆あし、又も肥後三角の港より上陸いたし、熊本の御城下へ出で、大木土佐の屋敷を訪ねて、今日迄の模様を話し其處に一泊して翌日清正公の墓前に詣で、夫より筑前福岡の御城下も通り、博多より千代松原の景色を眺めて、箱崎八幡宮に拜詣あし、豊臣家の武運長久を祈り、直方より豊前小倉の御城下に出で、海上を下の關に渡り、サうゞ之より山陰道に乘り込み、雲州松江堀尾山城守の胸中を探らんものと、道中泊りを重ね日を重ね、漸く石州と雲州の國境三瓶山の麓迄歩つて來まし

たが、此處迄別段何んのお話もございません、サレバ眞田左衛門尉幸村は、筑十造、猿飛佐助の兩人を從へ、今しも三瓶山の麓の掛茶屋に腰打ち掛け、茶店の婆が酌み出す澁茶を呑みあがら、主從三人が四方八方の話をいたして居る、此の時茶店の婆は幸村に向ひ、婆モシ山伏さん、貴所方は之より此のお山をお越しなさるのか知りませんが、モオ日も大分西へ傾いて居りますゆへ、此の村でお泊りあされて明日お越しあされぬと、途中で日が暮れますぞへ」と親切に云ふて呉れる、幸村は、幸村、オ、婆アさん、深切に有り難いが、山伏あぞと云ふ者は何處で寢るやら、行當りバッタリで草根岩角を枕として樹の下へ寢る事も度々あるゆへ、日が暮れたとて格別困りもせんのじや、それに山伏は山へ伏ると書のだから、山の中で寢るのも宜かろう、アハ、、」と冗談口を云ひながら幸村サア行ふ」と主從三人は笑ひ興じあがら山路へ差して登り行く、然るに幸村主從は段々と路

を急いで、今しも三瓶山の半腹の處迄來ると、日がズウブリと暮れて終ふて、四方は暗くなつて來た、三人は尙もズン〳〵登つて行きましたが、何處で何う路を蹈み迷ふたか、行けども〳〵太家はない、果ては路が無くなつて終い、何の方角へ進んだら宜いか茫張り見當が附かなくなつた、流石平氣な幸村主從も、之にはホト〳〵困却いたし幸村「兩人、何うも閉口いたした、幾等山伏でも路に迷ふては往生である十造「ヘエ御主人樣、之れは裏山へ迷ひ込んだらしうございます、オイ猿飛、貴樣忍術で以つて路を搜して來ては何うだい佐助「オヽ、乃公が一つ搜して來るから待つて居れ」と、云ふより早く猿が梢を傳ふが如く、イトモ身輕に彼方此方の木の間を潛り、向ふへ歩つて參りましたが、稍暫らくすると歸り來り佐助「御大將、途が見付かりました此處より十丁余り參ります、小路があります、夫れを五六丁行くと曲り角があつて、其の角を曲ると向ふに一つの燈火が見へ

ます、確か小屋が建つて居ると思ひますゆへ、一夫れへ參つて今夜は一泊を願ふて見ては如何でございます」幸村「フム左樣か、夫れは結構である、然らば左樣いたそう」と猿飛佐助を途案内と して、幸村と十造は夫れに從ふて行く事稍暫く、スルト漸々燈火が見へ出した佐助「御主人樣、何うです火の光りが見へませう幸村ウム成程、夫では急いで行かう」とズン〳〵路を急いで谷を一つ越へて向ふへ渉ると、樹が繁々と茂つて居る中に小屋がある、其の窓から燈火が見へて居るのだ、三人は漸々夫れへ便り附き、戸外に立つて覗ふと、内では兒童の經書を讀んで居る聲が聞へる幸村「ハテナ、此の山中の樵小屋に於いて、經書を讀む聲がするとは、コサテモ床しき事である」と暫らく耳傾けて聞いて居ました幸村は幸村「お頼み申す、行暮れて山路に踏み迷ひ甚だ難澁をいたし居ります旅の者でござる、何うか一夜のお宿を願たい」スルト今迄讀んで居つたお聲はピタリと止んで、

あなどりて表戸を引開けたる人物を、眞田幸村は燈火に透して眺むれば、彼是六十近くの年頃にして、頭には白髮を頂き斯かる山間に住居おす事とて、服裝は賤しけれども、何處とも なく威嚴備はり、由緒ある者の果あらんと思はれるにぞ、幸村は慇懃に頭を下げ幸村「只今申し上げし旅の者三人、何うか一夜のお宿を願ひ度ふ存ずる」之を聞いた此の屋の主人は、二熟々三人の風体を見詰めて居りましたが何に思ひけん主人「イヤ、此の小屋は宿屋にあらず、氣の毒ながらお斷りいたす」と左も無愛想に云ふと同時に、表戸引き締め奥へと退入る、ソモ此の人物は之れ何人でございませうや、眞田左衛門尉幸村義に依つて、堀尾家の惡人征伐と云ふのお物語りは、例に依つて……

第八席

偖て茲に御話しは二ッに分れまして、彼の北條浪人和久半左衛

門、因州鳥取浪人宮部熊太郎、及び金子崎榮次郎の三人は、大阪備前島片桐且元公のお屋敷に於いて、御大將真田左衛門尉幸村公に別れ、大將の命により、一先づ山陰道を漫遊いたさんとまして、丁度因州鳥取は宮部熊太郎の故郷であ最初丹波國に入り込み、夫より丹後、但馬、因幡と歩つて參りますので、宮部熊太郎の親族へ泊り込み、五六日厄介と相成り、處々方々と見物いたし、又も其處を出立して、伯耆の國に入り込み、米子の町へ到着いたし、備口屋傳兵衛と云ふ宿へ泊り込み、暫らく此處に逗留いたしまして、只毎日何の爲す事もなく、三人は彼方此方と見物をして居る、處が或日の事朝から雨が降つて外へ出ることも出來ず、和久半左衛門、宮部熊太郎、金ケ崎榮次郎の三人は、居間の中でグビリ〳〵と酒を呑んで居る、然るに隣室にも昨夜泊り合せた四人の武士があつて、之も同じく酒を呑んで女中あぞを相手にして打ち興じて居ましたが、段々酔の廻

はるに連れ、頻りに自慢話を始め出し、

△「オイ近藤、貴公は宿に力量があるからと云つて、大層意張つて居るが、力量あんて云ふ者は必竟一人や二人の敵を相手にする事は出來ん、其處にあると智謀と云ふ事が必要であると思ふが、各々何う思はつしやる」

スルト近藤と云ふ武士は腹を立て「ナンダ安永、乃公は斯ふ見ても二十人力はあるのだぞ、力量が役に立たんと云ふたが、ジヤア貴樣乃公と此處で勝負をしやう」

安永「マア、力量も入用であるが、然し彼の牛を見給へ、牛と云ふ奴は力量は大變あるが、力量ばかりで能がない則ち智謀と云ふ者がない故、少さい少年にでも尻をビシ〳〵叩かれて、追ひ使はれて居る樣なもので、竟り智謀ある者は力量のある者を追ひ使ふて行くから、智謀の方が上だと云つたが、

近藤「オンダ此奴、乃公を牛に比較べたりしやがつて、失禮な

申し分でもあるまい、サア立ちあつて勝負せい、」乃公が一掴みにいたして遣るのだ、」此の時他の連中は

◎「オイ〳〵、喧嘩あぞ止めて呉れ、」友人の間柄で其様な事を云ふな」と宥めるが却々聞かない、近藤「イヤ、承知せんのだ、此の近藤を畜生に譬へるとは不屈あ奴、堪辨相成らん」と安永と云ふ武士に飛び附き、果ては罵りの両人は一生懸命人ドタンバタンと掴み合を追つ始めた、殘りの両人は金々くにあつて引き留めるが、何うしても止めん、突つ組み合は益々激しくなつて來た、隣りの室で酒を呑んで居た和久、宮部、金ケ崎の三人は、何か事あれかしと思ふて居る矢先へ、隣りが騒き出したので、和久「オイ宮部、金ケ崎、何うやら面白ふあつて赤飯を炊ぐ格始めた喧嘩を留めては、乃公が行つて止めさせて遣ろうか宮部「馬鹿を云ふな和久左様だろう金崎「ウム左様だ、薩張面白ふあいでないか、金ケ崎喧嘩と火事は大きいに限る、乃公が行つて手傳つて遣ろうか、和久「ナニ、貴様等人情のない奴だ、

放つて置けとか手傳うとか、怪からん事を云ふな、御大將でも居られたら直きに留められるのだ、譯の判らん事を吐すな宮部「喧しい黙、譯が判らんでも貴様の世話にはおらんのだ、黙つて放つて置けい」と之も酔の廻ると共に、ッロ〳〵氣が荒くなり双方喧嘩腰となつて來た、スルト金ケ崎茶次郎「金崎「オイ〳〵我々が喧嘩をすると云ふは何うだ、日頃御大將の云はれる言葉が判らんのか、口でこそ何んと云をうとも、お互に腹を立てると云ふ事があるか、見苦しい止せよ和久「イヤ止さん、宮部は常から少し生意氣あから、今日は許さんのだ宮部「ナンダ猪虎才千万な事を吐す、乃公が何日生意氣な事をした、サア問答無益だ、組打にて勝負いたさう和久「ムヌ、小癪な一言其舌の根を止めて呉れん」と到頭両人も突つ組合を追つ始めて、ドタンバタン、グワチャンカチーンと、皿鉢を踏み碎き、座板も抜けんばかりに、オヤオヤと互に叫びあから、豪傑同士の事とて、留めても留ま

らばこそ、龍虎の爭をいたして居る、金ケ崎榮次郎も始めは留めたが、双方酔つて居るので、却々聞かぬいものだから、遂には片傍へ座り酒と杯とを持つて來て、呑みあがら一人見物いたして居る、隣りの間でも今喧嘩の眞最中と見へ、之も掛聲入りで騒つて居る、宿屋の亭主番頭は、餘り物音が激しいので、何事あらんと來たつて見ると、隣りの間同志で大組打を始めて居る、此れを眺めた亭主は呑然仰天、亭主「ヤア大變〳〵、若しお武家様、貴所方は傍で眺つと見物とは殺生じや、サア番頭皿鉢徳利膳椀茶椀を退けて呉れ」とウロ〳〵して居る、スルト番頭は平氣な顔で番頭「且那、今喧嘩の最中に側へ寄つては大變です、マアお待ちなさい、モウ止みませう」之を聞いた亭主は眼を剝き亭主「ヤイ番頭、貴様は主人の云ひ付けを聞かぬとは不屆な奴め其様な番頭は内へ置けん、今日から出てうせい」とボカり横顔を拳り付けた、番頭は怒つたの怒らんのでない番頭「ヤイ慾張り

館め乃公の横面を殴りやアがつたな、サア許さんのだ」と亭主に掴み掛り、之も到頭上にあり下にあり組合を遂り出した、宿屋の内は其處此處と都合三組の突つ組合で、隣子を突き抜く襖を蹴破る、膳を踏み碎くと云ふの大騒動が出來て來た、稍半時ばかりは負けず劣らず遣つて居つたが、何れも少々下火と相成つて、果ては疲力の根も盡き果てたと見へて、三組共組み合ふた儘、眼ばかりパチツかせて溜息を吐いて居るばかり、之れを見た金ケ崎榮次郎は、金崎「オイ皆の者、餘り止めるのが早いでいか、却々人の喧嘩を見るのは面白い者だ、モ一遍始めては何うだ」スルト和久半左衛門と宮部熊太郎は、起き上りて和久「モオ止めだ宮部「ウム、乃公も止めだ、一杯仲直りに呑み直そうか和久「ウム宜かろう」此の時金ケ崎榮次郎は金城「オイ、和久宮崎、聊も喧嘩を始めた起因は隣りの客から始まつたのだろう、兩人「ウム左様だ金崎「然らば、我々が金を出して酒を呑む事はあ

い、隣りの客に奢らそうでないか、兩人ウム宜かろう、貴様談判をして呉れ、乃公等は口を利くのも大儀だ　金崎「ヨシ、乃公が掛合ふて遣るから待つて居れ」と襖は脱れて了ふて行き通じにあつて居る隣りへ出て來たり　金崎「アイヤ、隣室の方々に掛合に參つた、只今拙者の方でも喧嘩が出來たが、竟り各々が酒に酔づて喧嘩を始められるに依つて、我々の方にも其の喧嘩が傳染をして來たと云ふ者だ、左すれば其の罪は各々方にありと云つても可ありであろうと思ふが、何うでござる御意見承りたい　各々「イヤ御尤千万重々此方が悪ふござる　金崎「フム、悪ひと知られたから、其處へ何とか色を附けさつしやい　各位「ヘエ、色とは何うしまするので……　金崎「之れは何うも、各々は甚だ悟りの悪い方である、色とは手取り早く云へば、仲直りをいたすによつて、酒を奢らつしやいと云ふ事あので、若し夫れをお聞入れがおいと云ふと、拙者存寄りがござる如何でありまする　各々「ヘエ、そ

れは甚だ迷惑至極で……　金崎「イヤ、決して迷惑も無理も申さんが、然らば斯ういたさう、先刻隣室より聞いて居れば、各々の中に二十人力の方があると云ふて、大變御自慢であつたが、其の方と拙者とが力量比べをいたそう、さうして負けた者が何も奢るといたそう、何うでござる　各々「ヘエ、夫では是非がござらぬ、オイ近藤、貴公は日頃から力自慢である、我々の爲に力量比べを遣つて呉れ　近藤「何うも困るが、今迄惨々組打を遣つたので、宛で力量が拔けて了つて狀拔の樣になつて居るのだが、仕方がおいお相手いたそう」と金ケ崎榮次郎に向つて、棒を捻じを遣つたが、金ケ崎榮次郎は片手で相手をいたし、苦もなく先方も打ち負かし、此の力量に驚いて近藤と云ふ武士は、到底敵はんと謝り入る、其處で到頭隣室の武士一同に奢らす事となり、故めて隣同士は一座とあり、サテ金ケ崎榮次郎は宿屋の亭主を呼び金崎「コリヤ亭主、貴様先刻より番頭と喧嘩を遣つて

居つたが何方が勝つたか」スルト亭主はフウ〳〵と吐息をいたしながら亭主「ナアニお武家様、私は負けるのちやアありません、皿鉢徳利膳椀茶椀銚子杯硯蓋子あぞを毀されちやア堪らんと思ひまして、ハイ其の方に氣を取られまして……」金崎「夫れで負けたのか、アハヽヽ、然し毀れた後で悔んでも仕方がない、マア心配するな何うにかなるわい、其處で亭主、之から隣室の方へ二座して、仲直りの酒を遣るのだ、酒と肴を澤山持つて來い」亭主「ヘエ、酒は持て來ますが、又騒動が起りはいたしませぬか」金崎「オヽ、今度騒動が起つた時には、乃公が心配するあ、、安心いたして居れ」

彼の容赦なく戸外へ掴み出すに依つて、酒と肴を澤山運ばせ、サテ隣同志と漸やく亭主を納得させて、

の七人は又も酒を呑み始めた、此の時和久半左衛門は近藤と云べる武士に向ひ和久「時に近藤氏とやら、御貴殿方は何れの御藩中でござるや」近藤「ハイ、我々は雲州松江の城主十八萬石堀尾山城守様の御指南番職、神野隼之助の門弟であります」和久「フム、ジテ神野先生は何流でござるや」近藤「真蔭流でござる」和久「成程、失禮ながらお尋ねであるが御門弟衆は澤山ござろう」近藤「ハイ、先頃迄は彼是二百名ばかり之れありましたが、目下は僅か五十名程に相成り居ります」和久「フム、夫れは妙だ、二百名が不意に五十名に成るとは、何か理由でもあつての事でござるか、お差支あくばお話下さい」近藤「ハイ、如何にも理由はあるのでござる、我々は其の事を思ふ度に、殘念無念と思ひますが、何うも相手が悪いので仕方がありません」和久「フム、夫れは何う云ふ理由であります」近藤「実は外でもございません、矢張同家中に沼田與次兵衛と云ふ一刀流の先生がありまして、此の先生は其の性質傲慢邪智にして、上に阿ひ取り入る事が甚だ上手であります、處が目下雲州松江堀尾家の藩中は二派に別れ、老臣堀尾典膳殿は殿中を切り廻はして、其の勢ひ旭の登る如く、却々其の威勢は素

晴しいもの、其の典膳殿に取り入つて指南番職とあつたのが沼田典次兵衛先生であつて、其の以來と云ふ者は色々の手段方法を講じて、我々の先生則ち神野隼之助先生の門弟を奪ひ去り、夫れが爲に利に趣むくは小人の常、到頭二百人餘の門弟が五十人計りに減つて了いましたが、神野先生は格別苦にもあさらず烏合の大勢よりも、忠義鐵石の如き五十人の方が結句樂である と仰せられて、屈せず撓まず沼田典次兵衛に對抗して、飽迄門弟を、教導して居られます 和久「フム、夫れは何うも感心なことであるが、其の二派に分れて居ると云ふのは、何か惡人原でも蔓つて居るのでござるか 近藤「イヤ、我々臣下の身分としては、堀尾家目下の有樣をお話いたすに忍びません、何うか御推密下されたし」と四人の者は打ち悄れて居る、此の事を聞いたる和久宮部、金ケ崎の三人は、元來義を見ては捨て置く事の出來ぬと云ふ性質の人物のみであるから、互に顏見合し 和久「何んと、

宮部金ケ崎、一面白い話を聞いたが、一つ沼田典次兵衛を云ふ奴を懲じて遣ろうでないか 兩人「ウム、面白い遣つ附けて了へ」と相談一決に及び、改めて四人に向ひ 和久「お話を承はれば、我々も御貴殿方の御精神には感服いたすが、其の堀尾家に於いて、御貴殿方の大將株と云はれるは誰方と申されます 近藤「ハイ番頭役にて、衣笠權之進殿であります 和久「イヤ、相判りました、就ては御貴殿方に御相談があるが、我々は見らるゝ通り武術修業の爲めに、諸國を漫遊いたし居る者にして、左樣な事を聞くと何うも捨てゝは置けんと云ふ性質なので……竟り各々方の爲めに一臂の力をお添へ申したいと存ずるが、何うか我々三人を松江の御城下へ御同道下さるまいか 近藤「ヘエ、シテ松江へお乘り込みにあつて何うなさるのです 和久「ハイ、一つ沼田典次兵衛先生に試合を申し込み、打ち懲して遣ふかと存じます 近藤「ハ、ア、夫れは有り難ふござるが、却々沼田先生は剛ひ方で劍術

も相當に使はれ、大變力量があつて侮り難い先生です　和久「イヤ、夫れは御心配あるな、我々は臨機應變で働きます、決して御心配に及ばぬ、又各々方に御迷惑も相備へません故、其の事は御安心あつて然るべし」と漸々彼等四人を得心させ、夫より酒宴も相濟まし、明朝は宿屋を出發いたそうと、夫々相談いたして居る、其處で宿屋へは諸道具を損めた價料として、和久、宮部、金ケ崎の三人は相當の金を道はし、其の替り酒肴一切の代金は近藤、安永等の隣室の連中が支拂ふと云ふ事に話が纏まり、鳥は飛んでも跡を濁すな、宿屋へ迷惑を掛ては相成らんと、充分の心添迄いたして道り、サテ翌日總勢七人連で米子を出立して遂に雲州島根郡松江の城主、御高十八万石堀尾山城守樣御城下へと到着をいたす、其處で近藤始め四人の連中は夫々自分の屋敷へ歸り、和久、宮部、金ケ崎の三人は、一先ず本町通り出雲屋清吉の方へ宿を取り、其の翌日早朝より、豫て四人の連中に

聞き置いたる沼田與次兵衛の道場を尋ねて行き、內玄關へと差し掛り、太郎の宮部熊太郎は宮部「頼もう〳〵」と怒鳴つて居る、スルト其處へ立ち出でたるは稽古福神に段小倉の袴を穿ひたる一人の門弟、門弟「何用でござる、左程大きお聲をせずとも相判る、宮部「イヤ、道場で稽古が騒がしい故、聞へまいかと心得、夫れで態と氣を利した積りでござる、我々三人は武術修業者である、當道場の先生に一つお手合せを願ひたい爲め參つた、左樣が、取り次がつしやい」と横柄に云ふので、執次の門弟は面膨らして奥へ引込んだが、聽て其の處へ出て參り門弟「お通りあさい、三人「御免」と三人は門弟の案內にて道場へ通る、流石は當時十八万石堀尾家の指南番、沼田與次兵衛の道場程あつて、八間四面柱あし太敷張り、正面神棚には鹿島香取の御神を祭り、彼方の一段小高き檢番所には、主人沼田與次兵衛傲然と控へて居る三人は夫れへ參り三人「御免下さい、我々は武術修業の爲め、諸

國を漫遊いたし居る和久半左衛門、宮部熊太郎、金ケ崎榮次郎と申すもの、弱き者は敎へて通る、強ひ者からは敎導を受ける修業者のあらひ、一本のお手合に預りたい」之れを聞いて沼田與次兵衛は與次「イヤ、承知いたした、然し手前道場の法則として、門弟とお立合ひ下されて、失禮あから門弟を打ち込む丈けのお腕前があれば拙者替つてお對手いたす　和久「委細心得ました何某おりとも差支へとざらぬ、木劍を拜借いたしたい」と和久半左衛門は第一番に飛び出し、天草樫の木劍を借り、待ち受けて居ると、聽て門弟一人仕度をして現はれた門弟「お手柔かに、和久「御同樣でとざる」イザ〳〵の聲と共に、立ち別れて一二合は打ち合せましたが、何んで和久半左衛門に敵ひませうや、忽ち半左衛門に打ち据へられる門弟「參つた　和久「これはお氣の毒千万、お後を願たい」夫より入り替り立ち替り和久半左衛門に立合ふ僕が、既に二十五七人ばかり叩き据へられた、今は沼田與次兵衛も、約束だから仕方がない、仕度をいたして其儘立ち現はれ、互に式禮も終り、双方立ち上つて、七八合打ち合した道場の主人、丁々發止と受けつ流しつ對手をいたして居たが、今や和久半左衛門が、ヤアッと大喝一聲横に拂つた木劍で、横發を強か毆られ、與次兵衛も仕方なく沼田「參つた」と引下ろうとする、處へ立ち出でたる金ケ崎榮次郎　金崎「オイヤ沼田先生、今度は拙者の順番だ、サアお對手申さう」日頃傲慢なる沼田與次兵衛も之には大きに困り沼田「イヤ、拙者到底お對手は出來んに依つて、之にて御免蒙る　金崎「夫れは怪しからん、未だ拙者とは試合をいたさんのであるから、何方が勝か負るか相判りますまい、是非〳〵立ち合はつしやい」と又も沼田與次兵衛は金ケ崎榮次郎と立ち合ふたが、今度は五六合にして忽ちお面を毆られ、頭が割れたかと思ふ程痛かつたので與次「マ、參つた」と退々の体で引込ふとすると宮部「アイヤ沼田先生、

未だ一人殘つて居ります、二人には試合をいたされ、某丈けをお殘しにあるとは、餘り殺生でござらう、イザ參りませう」イヤ之を聞いた沼田與次兵衛先生、青くなつて泣出し相あ部付いたし與次「イヤ、それは何うか御免下され、拙者が負でありますし、未だ立合もせぬ先から、負と云ふ事が分りますか、是非共お對手願ひませう」

宮部「何と仰しやる、先生は易者ではあるまいし、

今は沼田與次兵衛も詮方なく、

處が宮部熊太郎は胸に一物、暫は

と頻りに詰め寄せられるので、

又も宮部熊太郎と試合に及ぶ、

らくは發止〳〵と扱ふて居たが、

今は受太刀となつて後退りを

して來た、此方沼田與次兵衛之が策略と云ふ事は知らずに、

手が少し弱いと見て取り、不意に勇氣を恢復して、

く打ち込んで來る、今沼田與次兵衛一聲エイと上段より打ち下イトモ激し

したる木劍に、宮部熊太郎は木劍を叩き落され、嗟咄と見る間

に宮部「サア組打參ろう」と宮部熊太郎は大手を擴げて突つ立つ

て居る沼田與次兵衛も根が力量自慢の剛性者、對手に拂みを掛け

られて、何かは猶豫いたすべき、同じく木劍投げ捨て與次、サア

渝い來れ」と身構に及んで、双方エイ〳〵聲して突組合を始め

たが、宮部熊太郎は今ぞ沼田與次兵衛の首筋を引掴み、片手に

稍暫を取ぬたかと思ふと、目上よりも高く差し上げ、滿身の力を

込め乗道場の羽目板目掛け、傲慢にあれと叩き附けた、頭が割れ目

もあらば沼田與次兵衛は、ウ、と一聲血泡の別れ、頭が

鼻口より血を吐いて、到頭死んで了つた、此の時宮部熊太郎は

勝多勝弟に打ち向ひ「宮部「アイヤ御門弟、各々の師匠沼田與次

兵衛殿は、勝負の上で討死をあさつた、依つて死骸取片付の義

宜きに御取計らいを願ふ、夫れ非師匠の仇討がいたしたいと

あれば、遠慮なく立合あさい、サア如何

に、遠慮は無用の容赦はない、

「門弟「ざる」勝多の門弟も今眼前に師匠を殺され、殘念とは思へ

ども、立合の上で怪我死をいたしたのであるから、苦情の云ひ

樣があむ、まわれ相手の三人共が案晴しい強いのに忍れをるし門弟「ヨさ」致方ありはせん何うか其儘お歸の程を……」と殺され方から謝ゆて居る樣なる始末、其處で三人は悠々寛々として大手を振つて、今や道場を立ち退き、戸外門を立ち出んとする、時に也もあれや遥か彼方は砂烟を蹴立て、此方へ差して駆け附け來たる人數彼是百人計り、三人は何事やらんと足を留めて見はあれば、近寄り來たつたる彼の人數の中より、頭立つたる人物が夫れへ現はれ出で、頭「ヤア、狼藉者其處働くな、只今注進に依つて町奉行所より召捕りに相向ふたのだ、尋常に縛に附けい、夫れ者共搦め取つて了へい」と大聲に下知をする、之を聞いたる三人は大いに怒り、中にも和久半左衛門はワカ〳〵と前へ進み出で和久「ヤイ、狼藉とは何事だ、劍術の試合をいたし居るから負けて、其上叩き附けられた位で、死ぬる樣な蛆虫に等しき奴は、生て居つた處が何の役にも立たんのだ、夫れを狼

藉者とは失禮な一言、オイ宮部金ケ崎、此奴等を行き掛けの駄賃に、懲々打ち懲して置いて、此の處を逃げやうではないか、三兩人「オヽ合点だ、サテ荒れて遣ろう」と無茶苦茶者に出遇ふた町奉行所の下役人こそ災難だ、今や三人は多數の内へ荒れ込み縱横無盡に叩き付け張り倒し蹴飛ばし、阿修羅王の荒れたる如く働いて居る、處へ差して向ふより扮裝立派な武士を先に、彼是二十人計りの若武士を引伴れ、此の處へ乘り込み來る、サテ此の人物は善か惡か、之れ果して何人でございませう、此の場の收まりは如何相成ります、宮部熊太郎の三人が、御大將眞田左衛門尉幸村公、及び筧十造猿飛佐助に出遇の一條は、一寸休憩……

第九席

今乘り込み來たつたる件の武士は、武士「ヤア、白洲町内に於いて

此の有様は何事であるぞ、堀尾家の指南番職神野隼之助である双方共静まれ〳〵と呼はりながら、和久、宮部、金ケ崎の側へ近附き、少き聲にて神野「早く此の場をお逃げあれ、又改めて御面會を仕る、早く〳〵」と促されて、早速に似たれど大望のある身は、此様な所に捕はつて居ては面倒である、三人「然らば後は、お頼み申す、重ねて御再會いたす」と多勢を引外して三人「八幡にドン〳〵と逃げ出した役人たち逃すな、召し捕つて了へ」と後よりドン〳〵と追つ駈ける、之を聴めて神野隼之助は氣轉を利かし、神野「お役人の方々、決して御心配召さるな拙者一人にて彼等を搦め取つて御目に掛けん、夫れ門弟共、抱かつしやい」と追取り大刀で追ふ駈ける、和久、宮部、金ケ崎の三人は一生懸命に駈け出だし、松江の御城下を離れ、宍道湖水の堤防を傳ふて加茂街道へ逃て來る、神野隼之助は役人の先に立つて、追ふ真似をいたして居る位な事で、門弟二十人と共に

返つて役人の邪魔をする樣ち鹽梅式に走つて居る、漸やく町端迄來ると早くも三人の姿は影も形も見へません、其處で神野隼之助は足を留め神野「お役人衆、到頭姿を見失いました、最早背後を追ふたとて、到底駄目である と思ひます、是非に及ばぬ引返しませう」と胸中には喜悦みながら濟まん顔をして役人と共に引返へす、此方の三人は、此處迄來れば大丈夫であろうと金崎オイ、宮部、和久マア待つて呉れ、何うも云譯に逃げるのも却々難義だ、乃公は息が切れそうになつて來た和久「オヽ左樣だ、最早差支へあるまい」と三人は暫らく路側の茶店で憩ひ、身体を休めて夫より一先づ石州地へ乘り込まんと、現在覓十造の伝お絹が、雲州松江十八万石、堀尾山城守のお部屋の方と相成つて居るのは夢露知らず、途に其の處を立つて石州地の方面へ歩つて參り、途中何のお話もあく漸々茲に雲州の國境に發ゆる、三瓶山の麓へ差して出て參いる、日は正に西山に傾かんといた

して居るが、三人は平氣かもの、思ひ付いたら夜通し歩く、氣に向かん時は三日でも四日でも逗留して、酒ばかり呑んで居ると云ふ豪傑肌の連中ばかりですから、日が暮れたとて別に恐れもせず一軒の茶店に腰打ち掛け、雑おどを穿き替へて茶を呑んで居る、スルト茶店の婦女は　女「モシお武家様、之から此の峠をお越しにありますのでございますか三人「ウム左様だ　女「それは何うも夜通しお越しあさるとは、隨分五月蠅い山でございまして、石州の方へお出であさるのでございませうが、路が幾つもありますゆへ、能く踏み迷ひます、お氣をお附けあさいませ　和久「イヤ、深切に有難い、シテ泥棒あそは居らぬか　女「ハイ格別泥棒と云ふ様あことは聞きませんが、時々追剝が出るそうで……然しお武家様方お三人でございましたら、追剝も恐れて出はいたしますまい　宮部「フム、夫れは何うも便寄あい追剝だ　和久「金ケ崎、ポッ〳〵出掛けやう」と三人は茶店を立つて、

三瓶山へ差し掛り段々と峠の方へ登り行く、彼是二里ばかりは來たかと思ふ頃、路が三條に分れて居る處へ出て來た、處が既に日はズツプリ暮れて了つて、此處迄は何うやら歩つて來たが、四方一面は樹木繁ひ茂り、其の枝葉で空を蔽ひ、暗さは暗し一寸先きも判らん樣にあつて來た、流石三人の豪傑も之には大いに困却いたし、傍への石に腰打ち掛け、金崎「オイ、和久、宮部、斯ふ暗らくあつては困るじやないか、夫れに路が三つに分れて居つて、何れを行つて宜いか躍張り判らん事にあつた、和久「左樣だ、然し暗ひ位は這ふて行つても差支ないが、三つ路があつては、何れを行つて宜いか判らんのに困る、丁度今頃追剝が出ると、途案内をさして遣るのだが……」スルト宮部「熊太郎は怒り出し、宮部何うも、當國の領主は怪しからん奴だ、元來旅人の爲に斯ふ云ふ迷ひ安い所へは、途案内の石を建て置くのが當り前だ、夫れに左樣あことをして置かんとは、實に不

都合樵夫の領主である「金崎」アハヽヽと、又宮部が怒り出した、今度は此處迄怒鳴り出した、宮部和久「貴様等は何の恐を知らつたら筑州に行けると思ふぞ和久」ザア、乃公も物ならんが然し物は此時世は！中央の道を行つて見ては何うだ」宮部「ウヽ、乃公も去樵夫で居るめだと見る飛小由熊都定では埒が明かん、」「成つて碌ばよだ、」サア行つて見やう」と三人は此處を立つて中央が道を便り一寸刻みにオツ〳〵と歩つて行く、然るに段々進む程後ふ路は自然と細くなり、果ては樵夫の通ふ如き細道と相成て、遂には途が無くなつて了つた、流石の豪傑も弱り迷み出さは立つたる宮部熊太郎ば「宮部」オイ、到頭路が紛失で判つた、和久「ハヽヽ、品物が何んかの様に紛失は何うだ、」然し困つた事になつた、」金崎「何うしやう」金崎「サア、所ふ暗ふそば何うしやうも斯ふしやうもない、行ける所へ迄ネン〳〵行ふとおいか、何處かに路があるであろう」二人「左樣だ、」遣つ附け

が」と無茶者の三人は、樹を潜り荊棘を掻き分け、蔦蔓を傳ふで向へ進み、盲滅法に歩つて行くと、漸く細き途へ出て急つだ、三人は大いに喜悦び、三人「サア、此の道を便寄つて行けば」と手探りに探りながら奥の方へ進んで行くと、遙か谷を隔て向ふに、微かに燈火が見へる、宮部熊太郎は此の燈火に自を附け宮部「オイ彼の向ふに見へるのは燈火でないか」二人「ウム、何うも燈火らしい」宮部「然し、狸奴が悪戯をして居るのであるまいか」和久「サア、二夫れは判らんが狸の火は青ひと云ふが、彼れは青くはないぞ金崎「何んでも宜いから、谷を越へて火を目當てに行つて見やうでない」二人「夫れ宜からう」と又もズン〳〵向ふへ行つて谷を越へ、漸く燈火の近邊へ迄來たつて、三人はホツと息を吐き、向ふを見渡すと、樹木鬱蒼と繁ひ茂つて居る中に二つの小屋がある、其の窓から燈火が差して居るのであるから、三人は始めて安心をいたし和久「何うやら狸の陰火でもなかつた、」彼

の小屋へ行つて今夜泊めて貰をうでないか　二人「左樣いたそう」と三人は喜悅び勇みながら、小屋の近邊へ歩つて來る、スルト先に立つて居つた和久半左衛門は、不意に足を留め、聞に遂して頻りに向ふを窺ふて居たが、小聲で兩人に向ひ、和久「オイ、何か小屋の戸口に居る樣だ、オ、、盜の下にも一人居る哩、此奴泥棒に違ひない、一つ引つ捕へて遣ろうでないか　二人「ウム、合点だ」　人もヤ三人は拔足差足其の傍へ近付くと、一斯の人物も既に三人の來つたるを知つたと見へ、眤つと動きもせず其處に立つて居る、此の時和久半左衛門は突然窓の下へ進み寄り、件の一人に向つて飛び附いた、双方互に物をも云はず、ドタンバタンと上になり下になり組打を始めた、此方戸口に來たつたる宮部金ケ崎の兩人は、此處にも二人立つて居るゆへ、宮部熊太郎は「一人の奴に飛び附くと共に、之も組合と相成つた、金ケ崎榮次郎は、少しく離れて立つて居る一人に跳り掛る、スルト此の一人

は物をも云はず、金ケ崎榮次郎の腕首引掴むが早いか、エイと、で發三肩にと引擔ぎ、頭頭倒と投げ附けたり、投げ附けられた金ケ崎榮次郎、轉々〳〵と筋斗打つて、小屋の表戸へトンと突き當つたと同時に、戸は、グワラリと脱れて、與よりは手燭片手に、一刀引提げ主人「オノレ曲者、無禮であらう」と戸外へ立ち出で る、其の手燭の光りで金ケ崎榮次郎の顏を眺めた件の山伏は、眞村「ヤア、其方は金ケ崎榮次郎であいか、余は幸村であるぞッ」此の發聞いて金ケ崎榮次郎は、夫れへ平倒り込み　金崎「ハ、ア、之れは御大將でございますか、知らぬ事とて失禮の段御容赦下されたし」と夫れへ三拜九拜して居る、スルト幸村「コレ金ケ崎、彼れは熊太郎、半左衛門であいか　金崎「ハイ、左樣にございます」幸村「然らば、早く止めて遣れ　金崎「ハ、ッ」と金ケ崎榮次郎は其處へ飛んで行き　金崎「オイ、宮部に和久、味方だ〳〵だ同志打ちを止めい、御大將のお出であるぞ？」と兩人を引分け

「お志賀ヤ」と宮部熊太郎は漸く起き上り「宮部オヤ寛、冗談じゃ
ないよ、早く云つて呉れゝば、斯んおに無駄骨折らすと済む者
を……十造方公も貴様と知つたら、同志打はせんのだが貴様が
組み附いて来る故、已を得ず此れに應じたのだ」と御大將の傍
へ歩みよ来る猿飛佐助と和久半左衛門も互に笑ひながら、其
の處へ歩みよる金子崎榮次郎、宮部熊太郎、和久半左衛門
の三人は其の處へ手を支へ三人「ハヽア、御大將には、相變らず
御健勝で大變に存じます、思はぬ處で御拜顔を得ましで、これ
は過たる喜悦はございません、只今無禮の段々本に御宥免下さ
れたし」と濕へ謝罪に及ぶ、此の時幸村は、幸村「イヤ、三人共珍
らしき處にて對面をいたす、皆々壯健にて結構である」と互い
に打ち喜悦ぶ、此の始終の樣子を先刻より眺めて居た此の小屋
の主人は、手燭を其處に置き、背後へ飛び退り主人「ハヽア、先
刻よりのお話を承はれば、何うやら御貴公は今日本にて其の名

も高き、長田左衛門尉幸村公と推し奉る、某事は元雲州島根郡
松江の城主、御高十八万石堀尾山城守の家臣にいれして、松井
右馬之亟と申すもの、仔細あつて斯かる山中に詑住居をいたし
ます、此處ではお話も出來兼ぬる、先づ〳〵内部へお通入り下
されたし」と幸村始め五人を伴れて奥へ通し、戸を締めて内へ
上り、チテ席定まる、松井右馬之亟は改めて松井「驚に知らぬ
事とは申しながら、先刻は御無禮を仕り申した幸村「イヤ、某こ
そ斯く夜陰とも憚らず推參仕り、恐縮をいたしました、某先刻
戸外より お窺ひいたせし處、奥床しき讀書の聲、定めて由緒あ
る方の世を忍び居らるゝならんと推察をいたし居りました、シ
テ失禮あるお尋ねであるが、斯かる山中の詑住居は、如何ある
仔細のござつてか、御差支あくばお話し下されたい、某も及ば
すながら御相談に預るやも計り難し」とイヤモ深切に相尋ねる
此の時件の松井右馬之亟は眼を屢叩き暫らく差し俯向て居

まじたが、聽て頭を擡げ、松井「ハイ、」お母に頂り思ひ出だす事も裏の種、何をか包みませう、先刻迄經書を讀み居られましたるは之ぞ御殿堀尾山城守様の御幼君光之助君様にぞいます、幸村けニ、左すれば先刻の小兒の聲は、堀尾吉晴公の若君にてありしが、フ、ム、益々仔細あり げ御一言、シテ御幼君が何故あつて、貴公と共に此の山中に詫住居をせらるゝや、松井「ハイ、お話申せば永き事ながら、一通りお聞き下されたし、目下當堀尾家は二派に相分れ、老臣堀尾典膳殿は御城主堀尾家の一族と云ふ上から、非常に勢力あり、近來は奢り増長して兎角に佞者無人の振舞多く、志ある者は何れも眉を顰め居りましたが、先年何れよりか一人の婦人が松江の御城下に參り、碁の指南をいたし居りし處、其の婦人は容貌非常に美人にして一笑傾國の綽綽とか噂あり、松江御城下の大評判と相成り、然るに老臣堀尾殿も碁は隨分好まれる道とて、或日其の婦人を屋敷へ招き、碁を圍

まれしに夫れが縁となり、其後屢々其の婦人の出入りいたし居る内、如何なる處より取り入りましたるや、御殿山城守様に碁のお相手として、御拜謁をいたしたるが基となり、御殿様の御意に叶ひ、遂には始終お側に引きつけられ、果ては御手を掛けられ、到頭素性も知れぬ其の婦人をお部家とあされ、我々忠臣の切諫をお聞入れもなく、日夜酒に耽られ、誠に堀尾家の前途は風前の燈火同様、然るに聞く處によれば老臣堀尾典膳と其の婦人とは、篤より姦通いたしたり、其の結果として件の婦人を御殿山城守様にお勧め申せし様子、而して目下其の婦人の腹より生れたる幼君長之の助様と申して、當年三才とかられる方とれあり、然し之は眞實御殿のお胤にはあらずして、堀尾典膳の胤に相違なく、依つて典膳と件の婦人は腹を合はし、御本腹より御誕生遊ばされたる、此の光之の助様が世にある以上は、長之助様を家督に直す事叶はずと、此處に大膳にも惡計を企て、邪

腰にかゝる御幼君光之助様を害し、まつた大殿迄も毒害あし、堀尾家を横領あさんとの陰謀を廻らし、爾來堀尾典膳は件の婦人お部屋の方をあり居るを幸ひ、之れと結托いたし、頻りに一味徒黨を語らひ、内外より相應じて兎角に忠臣を讒し義臣を退け、目下堀尾家の前途は實に憂ふるに堪へたる次第であります、然るに某も典膳の舌頭に讒言せられ、當國を追放せられんとせし時、忠義黨の旗頭、番頭役衣笠權之進殿の依托を受け、密かに御幼君光之助様を奪ひ取り、此の山間に忍び隠れ、如何にかして衣笠殿と示し合せ、惡人輩を果し御幼君をお伴れ申さんと、種々に肝膽を砕き居ります次第、然るに先刻御貴公のお出かされし時、一期く夜陰に猿狼とても來らざる此の山中へ、人の親ひ來るは必竟惡人輩が、御幼君まつた某を殺害あさん爲め居處を突き止め參つた者と相心得、幸村公とも存せず無禮をいたし、誠に申譯之れなく、何卒御推察下されたし」と涙と共に

物語る、此の始終の顛末を聞き及んだる眞田左衛門尉幸村は、深く感嘆あし「幸村に、御貴公のお話を聞けば實にお察し申す惡人輩り忠臣退けられると云ふ事は、間々世にある做ひ、月にも村雲あり花にも嵐ある譬へ、只時節の來たるをお待ちあさるが宜しい、天は何時迄も惡人を生しては置きますまい、シテ此の御幼君の御母君は矢張り御城内に居られますや、まつた其のお部屋の方は名は何と申さるゝぞ」松井「ハイ、御奥様は先年お死去あされました、又お部屋はお絹の方と申します」先刻より傍にて聞いて居た筧寸造は、お絹の方と聞くと等しく十造「フム、先程よりのお物語によれば、基の上手お處と云ひ、お絹と云へば必定父の仇お絹に相違あるまい、御主人様何うやら仇らしうございます」幸村「オヽ、余も先刻より左様相心得て居つた、それば丁度幸ひである、余が山陰道を漫遊いたすも、必竟堀尾山城守吉晴公の胸中を探らん爲であれば、此の機を逸せず其方の仇

を討取り、傳手に惡人輩を退治いたすことが出來る、時に松井殿某は云云斯樣にて、諸國漫遊中であります、只今お聞及び、の通り、某の家來則ち此者の父兒十兵衛は、云云の譯にて其のお組の爲めに計られ、一命を果しまして爾來仇討をせんと、諸國を捜索いたし居ります、次第、只今のお話に依れば、何うやら仇のお組らしい奴、機會を見合し彼を打ち取り、合せて惡人輩を退治し、其上にて某が堀尾山城守に對面仕り、乾度御意見を申し上げ、御幼君まつた貴公方を引取る樣お手筈にいたしますれば、決して御心配召さるあ、此の幸村の耳に入りし上からは、ヤワカ其の儘には捨て置きません、充分御安心あつて然るべし、シテ御幼君光之の助樣は御年幾つにおられます、松井イヤ、今年丁度六才にあられます、六才としては却々利發ある御樣子、貴殿の御養育の程が察せられます、松井イヤ、恐入ります、古今の名將と云はれし御貴殿

に御拜顏を得、何うやら惡人征伐も近附き來り、之れに倍した る喜悅はありません」と暗涙に咽んで幸村に感謝いたす、此の時迄默つて傍らに控へて居たる、和久半左衛門、宮部熊太郎、金久崎榮次郎の三人は、幸村公に向ひ、和久半左衛門先づ口を開いて、和久サテ、御太將に申し上げます、我々三名は今日迄云々斯樣の有樣で、漸やく此處迄參つたのでございますが、丁度伯州米子に於いて云々の譯にて、松江藩指南番職神野隼之助先生の門弟方より堀尾家の內幕を聞取り、共の門弟方に出遇ひ、惡人輩の片割れにして矢張り指南番職たる、沼田與次兵衛と云ふ先生に試合を申し込み、松江に乘り込みしを幸ひ、沼田先生を投げ殺し、町奉行所の役人輩が召捕りに向ふたるを、神野隼之助殿の計らいを以て、其の場を逃れ此處迄來たつたる次第でございます、幸村フム左樣であつたか、夫れは丁度幸ひ我々が松江に乘り込み、當分

身を忍ばせる場所があれば、都合が惡ひと思ふて居つたが、其の神野隼之助と申す方に相談いたしたからば、又好き分別もあるであらう」と主從互いに今日迄の物語をいたして居る、此の時松井右馬之亟は幸村に向ひ松井御中言でありますが、只今お話の神野隼之助と申すは、忠義無類の一人でありまして、某とは日頃懇意にいたして居りました間柄、依つて松江へお乘り込でござらば、失禮ながら某が手紙を認めませう、左すれば番頭役衣笠權之進殿にもお面會を願ひ、万事の手筈をいたすに好都合かと考へます、殊に衣笠殿は始終御城内に詰め切りにて、御殿樣の御身体を守護し居られますれば、仇討をせられるに付ては好き手筈があろうかと思ひます、依つて是非共御面會をお願ひ申し度、傳手に御幼君光之助樣まつた某の事をも話し置き下されば、至極結搆に存じます、幸村イヤ、万事承知いたした、決して御配慮御無用にあされい」と松井右馬之亟を慰藉め、同人は其の夜は皆々安堵して睡りに就き、サテ翌朝と相成ると、幸村は松井右馬之亟と尚も万事の打合をいたし幸村「然らば、之れにてお暇申すに依り、通知ある迄何うか御辛抱をあさい、光之助殿の御身大切に御守護をいたされよ松井「ハイ、御懇切なる御言辭、呉々も宜敷御依賴申し上げます」と互に別れを告げ、まつた寃十造、猿飛佐助、金ケ崎榮次郎、宮部熊太郎、和久半左衛門の五人も夫々に暇乞をし、遂に三瓶山松井右馬之亟の住家を發足いたし、サラバ之より雲州島根郡松江の御城下へ乘り込み、堀尾家の内幕を搜らんと、御大將真田左衛門尉幸村を始めといたし、寃十造、猿飛佐助、金ケ崎榮次郎、宮部熊太郎、和久半左衛門の諸家傑之れに從ひ、勇氣凛々として乘り込み來たる、幸村智謀を以つて松江御城下を騒がすと云ふ、實に面白きお物語りは、次席に委しく辨じ上げます……

第十席

偖ても眞田左衛門尉幸村は五人の勇士を從へ、雲州松江の御城下入口へ參ると、幸村は五人に向ひ幸村、サテ、之よりは一同が一緒に參いつては、人々の目に附いて都合が惡ひ、依つて一人づゝ別々に參ることにいたせ、先づ和久半左衛門は神野の集之助殿の道場へ參つて、此の由し申し傳へて相待ち居れ、我々は順々に後より參いる事にいたそう和久「ハイ、委細畏まりました」と和久半左衛門は一人急ひで神野の道場へ參いる、夫より半時ばかり距てゝ順々と入り込み、最後に眞田幸村は悠々として乘り込んを參り、サテ一統神野集之助屋敷の奥の離れに集まり、先づ主人集之助とも挨拶を濟ましし、終つて幸村は松井右馬之助より一書を主人集之助に渡す、神野集之助は其の手紙を讀み終りて推し戴き神野「ハ、ア、我々の忠義未だ地に落ちず、天運

廻り來つて茲に幸村公を下し給ふ、惡人輩を征伐する事近きにあり、辱あし有り難し」と天に喜悅び地に歎び、深く幸村始め五人の者に禮を述べる、此の時幸村は神野集之助に向ひ幸村「時に神野氏、我々が此處に逗留いたすと云ふ事は、惡人輩に氣取られる恐れはありませぬか」神野「イヱ、夫れは決して御心配に及びません、某の門弟共は皆々忠義無類の連中ばかり、殊に先達此のお三方が沼田與次兵衛を投げ殺されし以來、續々入門を申し込みますが、某思ふ仔細あり何れも之れを謝絶いたし居りますれば少しも他へ洩れるの憂はございません、御安心下されたし」幸村「フム、夫れ聞いて大いに安堵いたした、然らばお氣の毒おがち當分御厄介に相成ります」と幸村始め五人の豪傑は此處に逗留いたし、五人の連中は日々道場へ出て諸門弟に交ばり武術を闘ましして居る、其處で主人集之助は、衣笠權之進にも此の旨通知いたし、互に氣脈を通じて機會を相待つて居る、然る

に衣笠權之進は一度幸村に對面いたしたいとは思へども、惡人殿中に藝り御城主山城守様のお身、少しも油斷がありませぬゆへ、一刻もお側を去る事が出來ん、其處で細々と手紙に認め、万事幸村に依頼に及ぶ、處が幸村は或夜猿飛佐助を招き密かに申すには幸村佐助、其の方は之より御城内に忍び込み、お部屋お絹の方と云ふのが、果して筧十造の父の仇であるか否やを見屆けて參いれ、佐助「ハイ畏まりました」と身輕に扮裝ち、御城内差して忍び込む、暫らくすると猿飛佐助は歸り來り佐助御主人様只今歸りました幸村オヽ何うであつた佐助「ハイ、例のお絹に相違ございません、其の証據といたして之を盗んで參りました」と幸村の前に差し出す品を、幸村手に取り見れば、堀尾典膳よりお絹に宛たる密書一通である、之れは宜き者を手に入れた、後日の証據と相成る故大切に保存をいたし置かねばあらん」と件の手紙を藏つて幸村就ては佐助、其方は之より

毎晩殿中へ忍び込み、お絹の身に就いて居る者は何でも宜しい故、一品宛盗んで來い、而して其の傳手に惡人の奴の頭の髷を一つ宛切つて歸いれ、佐助「ヘエ、スルト髷を根元からブツリ切るのでございますか、幸村「ウム左様だ、餘り身分のある奴は決して切れ、佐助「ヘイ、夫れは面白い、イヤで切るのを雜兵ばかりのを切れ、佐助「ヘイ、夫れは面白い、イヤ提まりました、幸村「然し、決して人に云ふな、又悟られぬ樣いたせ、佐助「イヤ、御心配に及びません」と幸村は佐助に吩咐けて置いて、一方神野の隼之助の居宅へ出て參り、幸村「神野氏、實は某一つ方法がござる、外ではありません、當堀尾家の臣にして忠義の方々に、此處七日の間夜は決して外出をいたさぬ樣、決して御通知をいたしては下さるまいか、神野「ハイ、何うも妙な事を仰つしやるが、然し親族に死人が出來たとか何とかで、已を得ず外出いたす者もあいとは限りませんが、左様ゆふ者は何ういたします、幸村成程、御尤千万のお尋ね、其の已を得ざる外出の時

には、必らず印を持つて頂きたい　神野「ヘエ、其の印と申しますと……」　幸村「イヤ、他ではござらぬ、胸へ白ひ切れを附着で置いて下されば宜しい　神野「ハイ、オヤ畏まりました、只今より至急夫れに通知いたします、然し何う云ふお考へでありますや　幸村「ハイ、其の考は拙者申さずとも今夜より直ちに相判ります、然らば至急御通知を願ひ極々秘密に他へは少しも洩れん様にお頼み申す　神野「イヤ、宜敷ゆるさる」と神野集之助は密かに心利きたる門弟に書面を持たせ、忠義の一統へ一々通知に及ぶ、此方幸村は又密かに和久半左衛門、宮部熊太郎、金ケ崎築次郎、寛十造を呼び寄せ　幸村「其方等を呼んだは外ではあい、今夜より四組に分れて、此の御城下の成べく人通りの多い處へ出掛けて行き、武士が通行いたすと見たら、直ちに斬り倒して了へ、然し決じて生命を取るのではあい、右の腕を斬り落すのだ　四人「ヘエ、ズバリ斬り捨てるのでは武士が通行いたすと見たら、直ちに斬り倒して了へ、然し決じて生命を取るのではあい、右の腕を斬り落すのだ　四人「ヘエ、ズバリ斬りとか云ふ様なもので……」　幸村「ウム左様

だ、何人でも多ひ方がよい、又決じて此處へ歸つて來る處を見付けられては相成らんぞ」　イヤ之を聞いて四人は大喜悦び、四人「ハイ、畏まりました　幸村「尚ほ一つ云つて置くが、胸に白ひ切れを附着て居る武士は斬つてはあらぬ、則ち惡人を斬るのであるから、其の積りで出掛るが宜い　四人「ハイ、合点でございます」と四人何れも喜悦び勇んで、夜の來るを相待つて居る、然るに程なく日も暮れて夜となつた、猿飛佐助は一人ナヲリと御城内へ出掛けて行つた、和久半左衛門、金ケ崎築次郎、寛十藏、宮部熊太郎の四人は、黑裝束に目計頭巾で面を包み、別れ〳〵に神野屋敷の裏門より立ち出でゝ、何處ともなく歩つて行く、然して夜明前には四人各々歸り來り、何喰はぬ顏で密かに居間へ這入り、夜具引被りてグウ〳〵と寢込んで了ふ、幸村は何う云ふ噂が立つであらうと、世間の噂を窺ふて居ると、聽て神野の道場へ稽古に來たつた門弟五六十人は、道場の控所にて休みあ

がらへ△「オイ山本氏、貴公昨夜の事を知つて居るか　山本「昨夜の事とは何でござる　△貴公も頓馬だな、神野先生から廻狀が參つたろう　山本「ウム、參つた〳〵　夫れが何うした　△未だ判らんか、某は妙な廻狀だと思ふて居ると、案に違はず昨夜辻斬りがあつたろう　山本「ウム、今此處へ來る途中で聞いたが、辻斬と云へども腕を斬つて居るばかりでないか　△「左樣だ、お濠端には腕が六本落ちて居たよ、本町角には七本落ちて居た　山本「フム妙だな、我々は之から決して夜は出あい事にいたそう」と皆々不審に思ひあがら、唯とり〳〵である、幸村は之を聞いて莞爾と打ち笑ひあがら知らぬ顔をいたして居る、此方猿飛佐助は例に依つて、お組の方の堀尾家の定紋打つたる銀の簪と脇一束とを持ち歸る、最初の一日二日は格別の噂もあかつたが、既に四日五日とおなと、此の評判は殿中に擴がり、皆々安き心もおく、△御殿では宿直の武士は何れも恐れ戰へて居る、然るに不思議あ

事には殿中にて腦を切られる者は、何れも一味徒黨の連判狀に加名して居る惡人ばかり、まつた腕を斬られた者は悉く惡人加擔の連中ばかりであるから、堀尾典膳は甚だ安からぬ事に思ひ一日人あき折を窺ひ、お部屋お組の方の部屋へ忍び込み典膳「サテお組殿、近頃甚だ不審に堪へぬは、毎夜殿中に於いて宿直の武士の腦を切られる事で、其の切られる連中は皆我々の味方ばかり、何と怪しいではござらぬか　お組「左樣でございます、妾も此の間より貴所に云はう〳〵と思ふて居りましたが、大切な品物が度々紛失いたしますので……　典膳「ナニ大切な品物とは……

お組「ハイ、貴所より頂ひた密書、殿樣より拜領の簪、若君辰之助樣の守札、妾の懷劍、其他毎晩何時の間にやら一品づゝ紛失いたします　典膳「イヤ、夫れは大變である、お互に九分九厘迄事を仕果せて、今一息で破れる樣の事あつては殘念至極、何とか詮議いたさねば相成らぬ、殊に此頃御城下でも毎夜辻斬りあ

必らず右の腕を斬り落され、其の斬り落される者は皆々我々の運中ばかり、依つて領城下は夜にあれば人通りはあい、賊に人心は穩からん樣子、豊夫人間業ではあるまいと存じます　お絹、左樣しますと、我々の惡事を邪魔する者が出來たと見へます、シテ、貴所にお願みしてございます、光之助樣又は之を奪ひ去りました松井右馬之亟の行衛は、未だに判りませんのですか、典膳「サて、我々も自分の子の立身出世にもある事あり、旁々彼等を生かし置いては、計略の妨と相成る事故、草を分けて搜索いたすと雖も、頓んと其の行衛の相分らんには、ホト〳〵困つて居る處であるが、然し夫れは兎も角も今堀尾家の政事万端は、皆此の典膳の自由になる事であれば、此の際早く御殿樣を毒殺あしお互の腹より生れし辰之助を家督相續に立ち直さねば思圖〳〵する内に如何なる邪魔のあいにも限らぬ故、其の積りで貴女の手で御城主を溺惑し參らせ、機を見て兼ての計畫を成し遂げね

ば相成らぬ故、其の積りで居るが宜いお絹「ハイ、夫れは充分呑み込んで居ります、妾も早く御殿を片付けねば貴所との逢ふ瀬も思ふ儘にならず、誠に辛氣臭ひ樣な心地がしてなりません、然し決して急いで事を仕損せぬ樣にあさいませ」と互に寄り添ひ密々話し、稍暫くは言葉も途絶へて居ましたが、驚て襖を蹴けて立ち出でたる典膳は、四方見廻はし何に喰はぬ顏して、御殿をさして立ち去りまするは、實に大膽不敵とも譬へ樣のあき惡人でございます、偖ても眞田幸村は和久、金ケ崎、筧、宮部の四人に命じ、毎夜辻斬りを遣らせた結果、丁度四人で百二十六人の腕を斬り落した、筧惡人輩を百二十六人退治た樣な譯おるので、神野隼之助は大いに喜悅び、深く皆々を待遇し厚く禮を云ふて居る、猿張佐助は都合十日と云ふ者、毎夜〳〵殿中に忍び込んで居つたが一日幸村は幸村佐助、最早今夜で十一日と相成る故、モオ大抵惡人輩の膽を取り挫いて威かす事が出

来たであろうと思ふ故、今夜を終りとして見合したら宜かろう

佐助「ハイ、承知いたしました、今夜は仕事の打ち留といたして一寸太きい事を遂つて來ませう」と夜になると佐助は例の如く出て行つたが、夜明け前に歸り來り、御大將幸村公の居間を覗いて見るに、既に幸村は褥の上に座り、頻りに軍書を讀んで居られる、佐助は襖を開き佐助「只今立ち歸りました」幸村「オ、佐助が大變遅かつたが、何か異つた事でもありはせぬか」佐助「ハイ格別變つた事もございませんだが、何んしろ御城主の山城守樣に惡人輩が淫酒を勸め、夜通し酒宴を催して居られますので、夫れを見て居りました故斯樣に遅くなりましたが、此の腦を持ち歸りました」幸村「佐助、夫れは前に置いた腦を眺め幸村「佐助、夫れは婦人の腦であいか佐助「ハイ、之が則ちお絹の方の腦でございます」幸村「ナニ、お絹の方の腦とあ……フム、夫れは面白い事をいたした、婦人の腦は却々取り惡くかろう佐助「ヘエ、取り惡ひ事

もございませんが、お絹が癖るのを待つて居ましたものですから、それに丁度堀尾典膳奴がお絹の部屋へ忍び込み、ベチャクチャと吐して容易に歸りません故、斯樣に遅く相成りました、幸村「スム左樣か、シテ御城主には別にお變りはあいか佐助「イ何んしろ忠義黨の喧し屋の、衣笠權之進殿が始終お側を離れず、惡人輩も少々弱つて居る樣子が見えます、然し今頃はお絹の腦が無くなつたので大騒動を遂つて居ませう」と幸村と佐助は互に打ち笑ひながら、佐助は自分の居間へ下りて一寢入りする、然るに此方御殿中にては、お絹の方は夜通し、御殿に淫酒を勸め、夜明間近くに睡りに附きましたが、嬶て方今の午前九時頃に眼覺め、不圖枕頭を見ると、櫛笄が其處に散亂つて居りますゆへ、ハテと思ひながら頭を押へて見るとお腦がない、ハッとお絹は起き直り、頻りに頭を撫廻はし、首を左右前後に振つて居ましたが、直ちにフッと其處に泣き

雖れ共、此の襖を開き附けお側附きの侍女二三名、襖を開けてお絹の部屋に首差し込み侍女「お部屋様、お目覺めでございますか、何為かお悪ふございますか、何う遊ばしました」と側へ來たつて泣き伏して居るお絹の方の頭を見て呑然仰天、侍女「ヤ、お部屋様のお頭は……」と餘りの事に尻餅突いて呆れて居る、ルトお絹の方は怒りの形相凄ましく、佶っと面を擡げ、お絹「コレ楓、紅梅、山吹、三人共近ふ寄りや、お前等は目頭彼れ程目を掛けて遣るに、氣を附けぬゆへ斯様な事が起るのじや、腦は何處へ遣つた捜して來や、サア元の通りに直して、呉れ」と糞燈紛れに無理難題を云ひ出した、侍女三人は日頃「お絹の氣象を知つて居る故、色青褪めてブル〳〵震ひながら　楓「ヤイ、妾達はお次に寢て居まして先刻目覺めたばかり、何も一向存知ません」の、誠に無調法をいたしました、何うぞ御堪辨の程を偏へにお願ひ申します」お絹「イエ、聞かぬ〳〵、女の嗜みは髮じやあや

か、其の髮を切られて何に面目に生きて居られる、サア早く捜して來や紅梅「お部屋様、夫れは御無理と申しますもの、先日より御殿では殿方の腦を切るのは毎夜の事でございまして、皆々心配をして居られましたが、夫れが今度は女の方へ順が廻つて來たのでございませう、左様私達をお怨み遊ばした處で、今更ら取り返しは附きませぬゆへ、何うかお諦らめ下さいませ」之れを聞いてお絹は身体を振り立て〻目に角立て　お絹「コレ紅梅、其方や何時も小癪な事を云ふ、此の腦を切られたのも其方の所業じや、サア承知は出來ぬ」と根が悪黨だけに腦を切られたを口惜がり、立ち上つて紅梅に掴み掛つて來る、然るに此の紅梅は忠義黨の一人、正木作兵衛と云へる者の娘にして、お絹の擧動を捜る爲め、お部屋附の侍女となつて居る位の氣丈者、云は〻敵地に乘り込んで居る樣な者、今お絹が掴み掛つて來たゆへヒラリ体を躱して逃んとする拍子に、懐裡より取り落したる一

通、お絹は手早く拾ひ取る、紅梅はハッと思ひあがら夫れ取られては大變と、お絹に無者振り付き、其の手紙を取り返さんとする、お絹は渡すまいと、双方が互いに揉み合ふて居る、處へ差して廊下をドシ〳〵と歩つて來たつた此の一人、餘りお部屋お絹の方の居室が騒しいので、河事やらんと襖に耳を寄せて窺ふて居る、内には今お絹の聲として、お絹ヤア、無禮であらう、侍女の分際で此の妾に手向ふとは生命知らずめ、サア其處離しや、紅梅「イエ〳〵離しませぬ、ナンボお部屋様でも妾の落した者をお返し下さらんとは、御無理と思ひます、妾は生命に掛けても取り戻さいで置くべきか」と互に挑み爭ふて居る、サア此の場の納まりは如何相成りませうや、愈々眞田左衛門尉幸村主從が、雲州松江の沖合大根島に於いて、堀尾家の惡黨を退治して其の内亂を收め、尚ほ毒婦お絹を生捕り、首尾能く寃十造に仇討本懐を遂げさせるの一條は、後席に讀ります……

第十一席

偖て永々辨じ來りましたる本講談も、愈々此の一席を以つて大尾を告げることに相成ります、左れば今お絹の方と侍女紅梅は、互に負けず劣らず爭ふて居る、然るに先刻より廊下の蔭に立て、此の場の樣子を耳傾けて立ち聞きをいたして居たる一個の人物、突然襖をグワラリと引開け、其の場へ乘り込んで參り、

武士「アイヤお部屋樣には賤あき侍女と何をお騒ぎ召さる、其の手紙は衣笠權之進お預り申す」とお絹が渡さじと掴んで居る其の手紙を引繰り、手早く懐中へ捻じ込み、紅梅を傍へに突きやり衣笠「侍女の分際として、お部屋樣に手向ひするとは無禮であろう、乾府罪科に行ふべき間、屋敷へ下つて御沙汰を相待ち居ろう」と云ひ放ちて其儘後をも見ずに立ち去りまする、お部屋お絹の方も之が他の者であつたら、喧しく掛合ふ處であるが

何んしろ忠義黨の大將分として、日頃御城主の樣始め堀尾典膳も一目措いて、始終目の上の瘤と恐れ憚つて居る人物ですから、何んとも云ひ樣がない、只面膨らして紅梅を尻眼に掛け、其の場の方へ相控へる、處へ侍女頭の咲花と云ふ老女が出て參り、

咲花　之れはお部屋樣には、只今承はりますれば紅梅が何か無調法をいたしましたとやら、乞度罪科に行ふ間屋敷へ下つて謹慎を申し付け置けよとの衣笠樣のお言葉、早速召し伴れて歸ります、コレ紅梅、其方はお場處柄も辨へず、又お絹の方樣に手向ふとは氣でも狂いはしやらぬか、サア起ちませい」と無理矢理に紅梅を伴れて、自分の詰所へ歸つて參り、聲を密めて咲花「コレ紅梅殿、其方は何うしやつたか、日頃狂れ程申し聞かせてあるる事が判りませぬか、お前が侍女にあつて居るのは、お前の爲ではない忠義の方々のお爲に、お部屋樣の樣子を探る爲ではありませぬか、それに何ぞや僅かの事より腹を立て、何んぼ敵じ

やとて苟もお部屋の方と名の付く方に手向ひをするとは、日頃にも似ぬお前の氣象！丁度衣笠樣がお通り合せであつたればこそ、お宿下げで濟みますが、若し御老臣の堀尾典膳樣であつたら、お前は生命はありませんぞへ、シテ又手紙を落して拾はれたと聞きましたが、何の手紙を持つて居ました紅梅「ハイ、其の手紙を見られたならば、忠義の方が今迄盡されました事も、水の沫と心得ましてお手向ひ申し、誠に濟まん事をいたしました咲花「フム、其の樣な手紙幸ひ衣笠樣のお手に渡つて結構であつた、夫では一時お屋敷へ歸つて謹慎をして居るが宜い、決して心配せずと時節を待つが宜ふございます」と涙を催し紅梅「ハイ、夫れでは屋敷へ歸りまして、御沙汰を待つて居ります程に、宜敷お願ひ申します」と其處で紅梅は夫々手續を濟ませ、屋敷へ歸つて御沙汰のあるのを相待つて居る、然るに此方お絹の方は紅梅の事

が癖に障つたのと、頭の髪を切られたのとで、氣がムシヤクシヤといたして、立つても座つても居られん程腹を立て、密かにお氣に入りの侍女に云ひ含め、堀尾典膳を呼びに遣るハ程あく典膳は出て参いり、お部屋の居室へ這入るあり、お組の頭に目を附け

典膳「ヤ、お部屋様には其のお姿は……」

お組「ハイ、昨夜何者にか髪を切り取られ殘念でございます、何うしたら宜しふございませう」と俄波と打ち伏し、泣き悲しんで居る、

典膳も一時は驚きましたが、流石は豪傑の大將程あつて諦も早い、お組の方の泣き悲しむを見て、言葉を柔げ典膳「何うも、意外の珍事出來いたし、お氣の毒千万ではあるが、最早出來た後では悔んでも取り返しが附きまい、只此の上には先達より毎夜〳〵惡戯をいたす奴を伸返も學ぬ出し、殿様に行ふより外致方もありませんスルト、お組は悲みの聲曇らせ、お組「イヤ〳〵夫では今日より妾が御殿様にお目通を為る事も、お側へ參る事も

出來ません、斯様な頭では御殿様もお見捨てあさるは知れてある、何うしませう〳〵」と類りに泣き叫ぶので、堀尾典膳も持て餘し、お側附の女中を次へ立たせて、跡で二人は密々話し典膳「思もよらぬ肝腎の其方が、其の姿では何うも困る、仕方がない故當城下で、附け髭の巧な者を捜させ、其の者に附させ御殿様の眼を暗ますより手段はない、お組「それでは、何うぞ早く左様して下さいませ、何時御殿様のお招やら判りません典膳「イヤ、承知いたした直に捜させる程に、氣を腐らさず心配せぬがよい」と典膳は直ちに腹心の者に命じ、御城下より附髭に巧者な者を呼び寄せ、お部屋の髭を附けさせ、何うやら斯ふやら一寸見ては判らん様に出來上つた、其處でお組も幾分か安緒をいたし、サテ堀尾典膳を呼び寄せて申すには お組「典膳様、他ではありませぬが、妾は髭を切られたばかりでなく、云々斯様〳〵で、日頃紅梅」と云ふ侍女は、何うも怪しい奴と目を附けて居ます矢先

紅梅の落した手紙は、男の手跡であり ましたゆへ、讀だら魂膽が あるであろうと、渡すまいと互に爭ふて居る處へ、人もあろうに衣笠橘之進奴が通り合せ、到頭手紙を衣笠奴に取られて了い 其の上妾に手抑ふた紅梅は屋敷へ下げたばかりで、何のお咎もあいとは少し輕ふ過ぎるとは思ひますれど、何を云ふても敵手が惡かつたゆへ、默つて控へて居りました、何にと腹が立つてはございませんか、典膳「フム、夫れは殘念な事をいたした、某が知つたら紅梅は其儘棄て置くであかつたに、惜いことをいたしたお絹、夫れで、妾は考へますに、彼ての手管は恐嚇〳〵といたして居る時は、六日の菖蒲十日の菊、後で悔んでも仕方がありませんゆへ、斯樣に誰がいたすかは存知ませぬが、我々の仲間はかりに崇をするのを見ると、却々油斷がありませぬ、依つて早く御殿樣を例の……典膳「オヤ、相判つた、夫では至急其の手段を取る事にいたそう、傳手に日頃目の上の瘤と忌み憚かる衣笠奴

も諸共に……」と惡黨堀尾典膳と妖婦お絹は、暫らく互に密々で何か相談をいたして居る、繼て堀尾典膳は、典膳「夫では來る何日大根島に於いて、御櫻見と云ふ事に相定め、成べく一味徒黨にばかり通知をおし置き、御殿樣には其の前日貴女よりお勸めいたす事にして、餓の御催しと觸れ出し、忠義顏する奴の鼻を明させ、其の席に於いて毒藥を……お絹「ハイ、宜よ呑み込んで居ります、御殿樣の方は妾の自由にあります故、決して御心配には及びませぬ、貴公の方こそお手抜かりあき樣……典膳「イヤ万事は此の胸にあり細工は隆々だ、安心せよ」と夫より堀尾典膳は御殿を差して立ち去りました、然るに此方御殿に於いては衣笠橘之進御城主堀尾山城守樣の御前に出仕あし衣笠「ハ、ア、何日に替らせもおく麗はしき御尊顏を拜し奉り、櫂之進身に取り如何ばかり恐悅至極に存じます御殿「オ、櫂之進、何日もあから出仕大儀である衣笠「ハ、ア、本日は改まつて御殿樣に申し上

げぬき儀のございます」御殿「フム、何事であるか申して見よ」此の時衣笠權之進は兩眼より涙を流しながら衣笠「イヤ、御聰明なる御殿樣には、近頃の御身持ち、先年御奥樣御死去あされし以來、日夜淫酒に耽られ、御亂行日に增し相募り、殊に若君光之助樣の御行衛不明なるを、格別お氣にも留めさせ給はず、素性も知れぬ婦女をお近附けに相成るとは、之れ何たる事でございまするや、今日は權之進慥なる御返答承はらぬ內は、一寸も此の場を動きませぬ」と決心の色を現はして切諫する、御殿「ヤヨ權之進、左樣其方の樣に野守は空吹く風と聞流し給ひ御殿の山城暮でも困る、余の身持が何うあろうが、余の腕で立身出世をいたした此の十八万石、其方等は默つて居れば宜いのだ、又光之助が居らぬと申して居らぬ者を何日迄思ふたとて仕方がない、余は辰之助るへおれば跡目相續は出來る、そんな事をクヨ〳〵心配いたす、あ衣笠「イヤ、それでは御死去あされし御奥樣に相濟みますまい」御殿「アハヽヽ、死んだ者を思ふたり、義理立てをして居つては、世の中は樂のない者じや、今日は諫言無用にいたせ、サア酒じや〳〵」と宛で忠言をお聞入れもなく、御亂行日に增し相募るばかり、衣笠權之進始め忠臣の面々は、膽を絞る思ひをして涙に咽ばぬ日とてはございませんが、御殿樣の御胸中が斯の如くであるから、皆々手の附けやうもなく、只々堀尾家の前途を憂へて居るばかりであります、偖て此方神野隼之助の屋敷に逗留いたして居る、眞田幸村始め五人の豪傑は、近頃は腕切りも止み、齒切りも濟んだので、皆々退屈をいたし何か事はないか、早く騷動が起れば宜いと、日々欠伸ばかりをして機會の來るのを、一日千秋の思をして相待つて居る、處が或夜獵飛佐助は愈々退屈で仕方がないと見へ、密かに神野の裏門より立ち出で、アラ〳〵御城下を彼方此方と徘徊おし、今お濠端堀尾典膳屋敷の表へ來ると、暫らく闇の中へ立つて何の氣もあ

に表門を眺めて居る、スルト通用門がギイーと音がして立ち出でたる一人の仲間、猿蔵佐助は見咎められてはあらぬと、板塀にシイッと倚れて覗ふて居ると件の仲間は四方を見廻して置いて何か手に持ちながら彼方に來る樣子、佐助は不審に思ひ、

佐助「ハテナ、此屋敷は堀尾典膳の屋敷であるが、苟にも老職の屋敷の仲間が夜る使に行くに提灯も燈さずいたして行くとは不審の到りである、之には何か仔細があるに相違ない」と佐助は件の仲間を尾けて見失はぬ樣に歩つて行く、今仲間はお蔵端を通り抜けて濠の内屋敷町へ這入らんとする、此の時遲し彼の時早し、疾風の如く飛び掛つた猿飛佐助は、突然背後より仲間の脾腹を一つ當てた、アッと一聲仲間は氣絶する、佐助は手早く仲間の持つたる封箱を奪ひ取り、急いて箱を開け中なる手紙を皇明りに透して讀んで見ると、兼て典膳とお絹の企んだる、大根島に於いて櫻狩りの案内狀だ、宛名は何れも典膳加擔の連中

ばかり、佐助は始より終り迄兩三度も繰返し〳〵讀んで置いて又元の通り箱に入れ緒を結び、之を仲間の手に握らせ、背後に廻つて活をウンと入れて、密かに片傍に潜んで樣子を覗ふて居ると、仲間は漸々息吹き返し四方キョロ〳〵見廻はし、頻りに考へて居たが、不意に身震して立ち上り仲間ヤレ怖や、此の邊には豆狸が棲んで居ると聞いたが、其奴の所業であろう、封箱に別條があくつて結構だ、ドレ急いて廻ろうか」と獨言を云ひあから屋敷町の方へ這入り込んだ、後に猿飛佐助は仲間の後姿を見送あがら佐助「ハ、ハ、豆狸の所業だと吐して居る哩、好い事を聞き出した、何れ歸つて御大將に申し上げん」と逸散に走り去る、幸村も之を聞いて大いに喜悦び幸村「夫れは好き事を聞き出した、其の機會を外さず惡人征伐を致さねば相成らぬ、左ら」ば明後日御櫻狩の場處へ先廻をして乘り込み、堀尾家の安泰を

計つて遣ろう」と密かに五人を呼び寄せ、其の手筈を定め、準備をいたす、又神野隼之助にも此の趣を知らせ、其當日に隼之助は諸門弟を引伸れ船にて島の周圍を警戒おし、惡人が遁げ出たる場合は、之を洩さず討ち取ると云ふ手筈にいたして、夫々用意怠あく當日の來るを相待つて居る、然る處御城内に於ては惡人原が密かに計畫を廻らしたる事故、忠義黨の面々は誰知る者もなくいたして居ますと、不意に其の前日お觸出しと相成つたので、衣笠權之進は大いに驚き衣笠之れは怪からん事である、斯の如き御催しの時には、第一に某に御相談に相成るべき筈であるに、出し抜けに明日櫻狩あぞとは不都合千万である」と御殿始め堀尾典膳に向つて、嚴しく御練言を申し上げ、又談判をいたしたが、毫もお聞入がない、其處で衣笠權之進も「之には何か魂膽があるに相違あかろう」と益々油斷をせず御殿樣の御身体を保護して居る、偖ても益々今日は大根島に於いて櫻

狩の御宴の催し、此の日一天雲なく、誠に麗かな好天氣でございます、御城内大奥に於ては早朝より其の用意に忙しく、聽て方今の午前九時頃には、御城内より行列美々しく繰り出され、御警護の面々には、堀尾典膳を始め惡徒輩の連中ばかり、一人衣笠權之進は始終お側を離れず附き添い參らす、御供には御殿女中彼れ百人程、殘らず日傘を差して、矢の字の帶でアロ繰り出だす、既にお船端と相成り、御殿樣は警護の家臣を從へお部屋お組の方と共に御座船に召され、女中共は別の船に乘り漸やく大根島に到着いたされ御上陸と相成る、大根島に於ては既に前日より用意万端殘る隈なく、事も立派やかに出來上つてある、御城主堀尾山城守樣は、お組の方と相并らんで設けの褥に腰を下され、四方を御覽に相成ると、何んしろ頃は陽春三月万朶の櫻は咲き揃ひ、其の美しさ譬やうもなく、實に吉野の山を此の處へ移したるかと怪むばかり、此方にズラリと居列んだ